656-228
1200501571513
656
228

エトイ71

序

最近ソヴェート・ロシヤではマルクス主義的批評家達によつて、ドストエーフスキイの再吟味が相當盛んに行はれてゐる。そしてそれ等の研究や新しい發見は雜誌や單行本に個別的に發表されてゐる外に、綜合的に纏められたのもある。この方面では既に一九二八年にモスクワの「ニキーチンスキイ・スボートニック」から、ニキーチナ女史の編輯の下に、ドストエーフスキイ學者として夙に有名なペレヴェルゼフを初め、故ルナチャールスキイ、ポロンスキイ、ソロヴィヨフ・アンドレーエヴィチ、ウォイトローフスキイ、ゴルバチョフ、リヴォフ・ロガチェフスキイ等の論文を一卷に纏めた『マルクス主義照明下のドストエーフスキイ』が出て居り、一九三一年には國立出版所からルナチャールスキイを編輯長として、グロスマン、コーガン、レオーノフ、ペレヴェルゼフ、チェルコフ等マルクス主義文學者より成る編輯委員の手で『ドストエーフスキイ選集』が發行されてゐる。

私は最初ニキーチナ女史編輯の『マルクス主義照明下のドストエーフスキイ』を全譯する計畫であつたが、一通り讀んで見ると、ボロンスキイの論文は專ら小說『惡靈』に關する研究だつた

ので、作品研究の際に參考するだけに止めてその飜譯を省き、ゴルバチョフの『ドストエーフスキイとその反動的民主々義』は餘りに政治的抽象文に流れて、ドストエーフスキイの藝術を研究する上には却つて讀者の理解を妨げる虞があつたので、これも省いて了つた。その外にも本書に取り入れた論文の中で、ほんの一二ケ所ではあるが、同じ理由で省略した部分もある。その代り綜合研究としての陣容を整へ、內容の完璧を期するため、他の資料から幾種かの論文を選んで追加した。チュルコフの『ドストエーフスキイ略傳』、ペレヴェルゼフの『方法と樣式』、ファチーマ・リーザ・ザーデの『西歐に於ける影響』の如きはそれである。

『作品研究』は專らウォルインスキイとボロンスキイとの論文を參考した。從來の傳統的解釋と違ふところの多いのは、主として兩者の研究に負ふものである。

本書の印刷最中家族に急病人が出來たため、充分校正の暇が無かつたことを遺憾に思ふ。特に讀者諸君の諒解を願つておく。

一九三四年五月一日

昇曙夢

656-228

綜合研究　ドストエーフスキイ再觀

目次

ドストエーフススキイの略傳（チュルコフ）……（一）
ドストエーフスキイの生涯と藝術（リヴォフ・ロガチェーフスキイ）……（二）
ドストエーフスキイの樣式と方法（ペレヴェルゼフ）……（八一）
ドストエーフスキイの特質（ソロウィヨフ・アンドレーヴィチ）……（九五）
一、他の諸文豪と比較して……（九五）
二、悲劇の意義……（一〇七）
ドストエーフスキイの小市民性と國際性（ヴォイトロフスキイ）……（一二三）

目次

一、トルストイとドストエーフスキイ……（一二三）
二、資本主義的様式……（一三〇）
藝術家及思想家としてのドストエーフスキイ（ルナチャールスキイ）……（一三九）
ドストエーフスキイ評價の再檢討（ペレヴェルゼフ）……（一六一）
西歐に於ける影響（ファチーマ・ザーデ）……（二〇一）
作品研究……（二〇七）
『罪と罰』、『白痴』、『惡靈』、『カラマーゾフ兄弟』……（二〇九）
附錄
一、ドストエーフスキイ年譜……（二九五）

昇曙夢譯編

綜合研究

ドストエーフスキイ再觀

（マルクス主義の照明の下に）

ドストエーフスキイの略傳

ゲオルギイ・チュルコフ

フョードル・ドストエーフスキイは一八二一年十月三十日モスクワのボゼドムカなる貧民病院の左の翼屋で、醫長ミハイル・ドスエーフスキイとその妻マリヤ・フョードロヴナとの間に生れた。ドストエーフスキイは父系から云へば、プーシキンと同じく古い貴族の家柄に屬するが、彼はプーシキンよりもヨリ多くの權利をもつて「新人達」（雜階級のこと）の中に自己を見出すことが出來た。ドストエーフスキイは「衰えかゝつた舊家の一破片」でもあり、また他の異說によれば、「虐げられた家門の一破片」でもあつた。右の二つの說はいづれも、このリトワニア貴族の家柄（ドストエーフスキイ家）に當てはまる。この家柄は古くルティシチェフと名づけられてゐたが、後年功績によつて下賜されたピンスキイ郡（ポーランド）のドストエーフ村とともにドストエーフスキイの姓を受けたのである。この一族は十八世紀の初めの頃から不如意に陷つて、家運が衰えた。文豪の父はまだ若い時分に身内のものと一切關係を斷つた。息子のフョードル・ドストエーフスキイ

（文豪）は、貴族と云ふよりはむしろ雜階級的境遇の下で教育された。ドストエーフスキイの家族は、病院の官舍の極めて狹い住宅に住んでゐた。ドストエーフスキイは、その幼年時代を兄ミハイルとゝもに薄暗い小さな室で過した。この室は玄關と隣り合つて、僅かに衝立で隔てられてゐた。だが、一八三一年にドストエーフスキイの父は、トウーラ縣に小さな村を手に入れたので、醫長の家族は毎年夏になると馬に乘つてこの莊園に旅行した。こゝで、當時まだ極めて剽輕なおどけた少年であつた未來の文豪は、ひろ〳〵として野原に親しんだ。しかし同時に彼はこゝで、慘酷な農奴の生活をも目擊した。彼の弟アンドレイの證言によれば、ドストエーフスキイは農民たちと話をするのを好んだと云ふことである。「彼はその生き〳〵した性格によつて何にでも手を出した。ある時は自ら進んで鋤をつけた馬を引いたり、ある時は犂を牽く馬を追つたりした……」

熱情的な性格と鋭敏な穿鑿好きな智力とは、ドストエーフスキイに於いて、隨分早くから鋭鋒を現はした。父は度々叱つたものである。「おい、フェーヂャ、おとなしくしろ！ でないと、お前、惡いことがあるぞ、……　お前を兵隊にやつて了ふぞ！……」

ドストエーフスキイは十三歳までは家庭で養育された。その間に彼はお伽噺を數多く聞いた。それらのお伽噺はドストエーフスキイの家庭を屢々訪れた女の草鞋匠（わらぢつくり）ルケリヤが子供たちに物語つたものである。家庭では毎晩、お茶のテーブルにつき、蠟燭の灯りの下でカラムヂンの「ロシヤ帝國史」や當時有名なアンナ・ラドクリフの物凄い冒險小說の朗讀が行はれた。また老詩人デルジャーヴィンの抒情詩を暗誦したりした。

一八三四年の秋、ドストエーフスキイは兄ミハイルとともにモスクワのチェルマク寄宿學校に入つた。そこでは當時の立派な教師たちが教授してゐた。ドストエーフスキイがプーシキンの詩に對して最初の歡喜に打たれたのはこの頃のことである。一八三七年に母マリヤ・フョードロヴナは死んだ。この家庭的不幸はちようど大詩人（プーシキン）の死んだ知らせと一緒だつた。弟アンドレイは語つてゐる、「兄たちはこの大詩人の死とその詳細な事情とを聞いて殆んど發狂せんばかりだつたことを覺えてゐる。兄のフョードルは長兄との談話のうちにいく度か次のやうなことを繰り返した。もし我々に家庭の喪がなかつたら、私はプーシキンの喪に服する許しをお父さんに願つただらう、と。」

同じ一八三七年の春、フョードル（ドストエーフスキイ）とその兄とはペテルブルグのコストマーロフ寄宿學校へ送られた。そこでは陸軍技術學校への入學試驗の準備をしなければならなかつた。後年ドストエーフスキイは自ら語つてゐる、「當時我々は、新生活へ熱中してゐた。我々は

何ものかを熱烈に信仰してゐた。我々は二人とも入學試驗の準備に數學を勉强せねばいけないことをよく知つてはゐたのだが、詩と詩人のことだけを空想してゐた……」

この年の秋ドストエーフスキイは、陸軍技術學校の本科に入學した。この學校はいつか皇帝パヴェルが近衞兵のために絞め殺された陰鬱なミハイル城内に位地を占めてゐた。そこでドストエーフスキイは六年間を暮した。この頃レーヴェリで學んでゐた兄ミハイルの手紙の中から、この兄弟の凡ての興味が文學に集中されてゐたことが分る。ドストエーフスキイは、ホーマーとシェークスピアとに熱中してゐる。プーシキンは依然として彼の偶像であつた。彼はゴーゴリを殆んど暗記してゐる。バルザックに就いてドストエーフスキイは、その偉大なことを語り、また「彼の作中の人物性格は世界的天才の創造である」とも云つた。彼はホフマンにも魅せられ、ヂョーヂ・サンドにも生き〳〵した興味を寄せた。彼はかう書いてゐる。「私はシラーを暗誦した。私はシラーの言葉で語り、シラーに夢中になつた。私の生涯のあのやうな時代にこの偉大なる詩人を私に知らしてくれたほどの好機會を、運命は二度と私の生涯中には惠んでくれなかつたやうに思はれる……」。

この頃ドストエーフスキイの家庭は極めて苦しい事情にあつた。妻の死で痛手を蒙つた父は、飲酒に浸りはじめた。彼が酩酊した時には殘忍な人となつた。この殘忍性は彼を恐ろしい最期に導いた。激怒した百姓たちは彼を慘殺して了つた。この事件は一八三九年に起つたものである。ある人々は、ドストエーフスキイの癲癇の最初の發作は、この父の最期を聞いた時に起つたものであることを肯定してゐる。

一八四三年の秋、ドストエーフスキイは陸軍技術學校の本科を卒業して、ペテルブルグ工兵隊附の將校として軍務に服した。ドストエーフスキイは軍隊勤務には少しも興味を持たなかつた。一八四四年の末、彼は中尉に昇叙されるとともに、病氣の故を以て退職した。彼はこの年を文學的實踐に献げたが、その中でも特にバルザックの小説を飜譯し、自分の處女作『貧しき人々』を熱心に書いた。一八四五年の春、この小説は完成してドストエーフスキイは俄かに有名になつた。ベリンスキイは、この新進作家を「社會小説」の作者として祝福した。ベリンスキイの友人たちは此の若い作家を競ふて自分たちの會に引き入れた。當時兄へ送つた彼の手紙は無邪氣な喜びに滿ちてゐる。彼は自分の名聲に陶醉して、それを少しも隱してゐない。ツルゲーネフやベリンスキイやネクラーソフを初め、その他の新しい知己を彼は「我が黨」と名けてゐる。けれどもそれらの「我が黨」は、間もなくドストエーフスキイが自分たちとは全く別なタイプの人間であるこ

とが分つた。先づ第一にベリンスキイがドストエーフスキイに幻滅を感じた。一八七三年の『作家の日記』に於いてドストエーフスキイはベリンスキイと自分との關係を物語つてゐる。「私は彼を熱烈な社會主義者として見出した。そして最初から直接無神論に就いて話した……」。最初の「社會小說」の作者（ドストエーフスキイ）と「狂暴なるヴィツサリオン」（ベリンスキイ）との間には少からぬ相違があつた。ドストエーフスキイ自身の回想から、我々は彼が當時ベリンスキイの宣傳した社會主義のあらゆる眞實を受け入れながらも、一面では人類の歷史に於いてクリストの人格が或る特殊の他位を占めてゐると云ふ信仰から離れることが出來なかつたといふことが分る。かうしたドストエーフスキイの信仰は、ベリンスキイには野蠻な迷信だと思はれた。この論爭はその本質に於てドストエーフスキイの將來の運命を決定したものである。

一八四六年の二月に第二の小說『二重人格』が『祖國雜纂』に揭載された。が、この作は成功しなかつた。一八四七年おなじ雜誌に『女主人』が發表された。ベリンスキイはペ・アンニェンコフへの手紙の中で、この作品を「くだらない愚劣な低級なもの」と評してゐる。ドストエーフスキイの新しい友人たちの中でも、先づ第一にネクラーソフとツルゲーネフとが彼を嘲笑した。この時ばかりは彼も、自分が侮辱され挑戰されたものと感じない譯には行かなかつた。

だが、ドストエーフスキイは彼等と論爭し、ベリンスキイと手を切りながら、別な仲間を探し初めた。彼は明かに言葉から實行へ移らうと願つたのである。それはちようど二月革命の前夜であつた。「ユートピアン社會主義」の思想がヨーロッパを波立たせた。ロシヤでもこの思想の地盤が見出された。ペテルブルグには、さまざまな地方から貴族が集合した。彼等は多くの場合、物質的に保證されなかつた連中であり、奉職することにより又は當時發達を見たヂャーナリズムに關係して收入を求めなければならなかつたのである。これらの階級脫落者たちは當時のニコライ一世の政治に對しては反對の立場にあつた。彼等は政治的無權利に惱み、頻りに自由を空想してゐた。そして政治と社會性の發達は農奴制を維持する限り不可能であることを理解してゐた。これらの知識階級の大多數は經濟的狀態が薄弱であつたから、自然、彼等はフーリエ、カーベー、コンデシラン、レルーらを初め、その他さまざまな形式で社會生活の改善を提唱したユートピアンの思想を少なからざる興味をもつて研究した。ペテルブルグを初めとして諸地方には、政治・經濟および社會問題を研究するための學會が組織された。一八四〇年代の末に於ける此の種の學會の中で最も著しいのは、ブタシェーヴィチ・ペトラシェーフスキイの學會であつた。そこには主としてフーリエ派が集つてゐた。ドストエーフスキイも此の會合の、かなり熱心な出席者となつた。

彼は大抵默り勝ちであつたが、時として彼の目が燃え立ち、彼の聲が高まることもあつた。すべての人は「權威あるもの〻如く」語つた此の人の言葉に耳を澄ました。或る時、農奴制に關する談話の最中に、ドストエーフスキイは自分の思想を表明して、「陛下は必ず農民を解放しなければならぬ、陛下はそれを近き將來に於いて實現するであらう」と云つた。或人々はこれに疑問を挾み、誰かがドストエーフスキイに向つて、もし最高權力が此の問題の解決を澁るやうな場合にはどうするか、と押し强く問ふたとき、ドストエーフスキイは激して、「たとひ叛亂を起しても解放しなければならない！」と叫んだ。このペトラシェーフスキイ會でドストエーフスキイは、當時すでに故人であつたベリンスキイ（一八四八年春沒す）がゴーゴリに送つた有名な手紙を朗讀したこともある。この會合で彼は、詩人でもありまた「滑稽なほど宗教的な人間」でもあつたエス・ドゥロフと知り合ひになつた。このドゥロフは間もなく特別な會を組織し、そこには專ら文學者たちが集つた。この會でドストエーフスキイは、徹底的な無神論者であり「共産主義者」でもあるエヌ・シュペシニョフと交りを結んだ。このシュペシニョフなる人物は、その沈着冷靜な性格とヨーロッパ風の教養と非凡な智力とによつて周圍のものから特殊の尊敬を得てゐた。このシュペシニョフの立案によつて秘密出版所を設けるために、祕密結社が組織された。この結社には五人乃至七人の少數者が加入したのであるが、その中にはドストエーフスキイもゐた。詩人マイコフは最近發表されたヴィスコワートフへの手紙でドストエーフスキイが彼に向つて、此の事業に關係するやうに、そして自分のところに止宿するやうに勸告したことを物語つてゐる。「私は覺えてゐる」とマイコフは書いてゐる。「ドストエーフスキイは臨終のソクラテスのやうに寢衣の襟も合せないで友人たちの前に坐りながら此の事業の神聖なることに就いて雄辯を揮つた……」。一八四九年四月二十三日にペトラシェーフスキイ會員は檢擧され、ドストエーフスキイも檢擧された。彼は八ケ月間ペトロパーヴロフスク要塞監獄に拘禁された。豫審の際の訊問に於いてドストエーフスキイは、勇敢に且つ尊嚴に己れを持して、彼は誰の名も明かさず、また誰をも僞らなかつた。頗る聰明に注意ぶかく供述した。彼は轉向を誓ふほどに自らを卑下しなかつた。

一八四九年十二月二十二日、ドストエーフスキイはペトロパーヴロフスク要塞の獨房から兄ミハイルに宛て〻次のやうに書き送つてゐる、「兄よ、愛する私の友よ、すべては決定した。私は四年間の懲役（多分オレンブルグ監獄に）とそれに續いての軍隊勤務を宣告された。今日十二月二十二日に我々はセミョーノフ練兵場に引き出された。そこで我々への死刑の宣告が讀み上げられ、十字架に接吻させられた。我々の頭上で劍を折つて、我々の臨終の喪服（白いルバシカ）は調べ

られた。それから最初の三人が死刑執行のために斷頭臺に上らせられた。一度に三人づゝ呼出したから私は第二の順番に廻つてゐたわけだ。で、私の生命は一分以上は殘つてゐなかつた」……「最後に中止の警鐘が鳴つた。斷頭臺につながれたものを後へ引き戻した。そして皇帝陛下が我々に生命を與へ給ふたと云ふことが朗讀された。」……「兄よ、私は悲まなかつた。落膽もしなかつた。生活はどこに行つても生活だ。生活は我々自身のうちにあるので、外部にあるのではない。私のそばには人々が來るだらう。そして人々の中で人間となること、永久に人間として殘ること、如何なる不幸の時も悲まないこと、落膽しないこと――これが生活である。こゝに生活の意義がある。私はこの事を意識した。この思想は私の血と肉との中に入り込んでゐる……」。十二月二十四日の夜、桎梏（かせ）につながれたドストエーフスキイはシベリアのオムスク監獄（彼が豫想したオレンブルグ監獄ではなかつた）へ送られた。こゝに彼に、一八五〇年から五四年まで拘禁されてゐた。このことに就いては、『死の家の記錄』に描かれてゐる。一八五四年の二月二十二日にドストエーフスキイは監獄から釋放され、一兵卒としてセミパラチンスクの守備隊に廻された。この時、彼は四年間の徒刑生活のことに就いて兄に書き送つてゐる、「私の精神は明朗だ。私の將來、私がやらうとする一切のことが、私には目の前に見るやうにはつきりしてゐる。私は自分の生活に滿足だ……」「私は强盜に伍して送つた四年間の徒刑生活で、とう〳〵人間を見分けることが出來た。あなたは信じますか？　彼等の中には、深い强い美しい性格があるのだ。荒つぽい穀の下に黃金を探し出すことは何と愉快なことだつたか？……」

セミパラチンスクでドストエーフスキイは、地方官吏の妻イサエフとそのマリヤ・ドミトリーエヴナと知り合ひになつた。彼はこの女を戀ひした。しかも火のやうな苦しいほどの戀であつた。一八五五年の春イサエフはトムスク縣のクズニェツク市へ轉任して、そこで不意に病死した。一八五六年の末にドストエーフスキイは自分の妹に書いてゐる、「私はもう夙うから此の女を愛してゐる。夢中に愛してゐる、私の生命よりも强く……」。そして一八五七年の二月に、彼は此の女と結婚した。然し此の結婚はドストエーフスキイに心の安靜と平和とをもたらさなかつた。セミパラチンスクの友人ア・ヴランゲリへ送つた或る手紙にドストエーフスキイは書いてゐる、「マリヤ・ドミトリーエヴナとの關係は、最近二ケ年間、私の全身を占有した。少くとも私は生きてゐた。たとひ苦しんだとは云ふものゝ、とにかく生きてゐた……」。

一八五七年の秋ドストエーフスキイは將校に叙せられたが、翌年の春には病氣のために軍隊勤務を退いて、トゥヴェリに居住することが許された。一八五七年にはもはや『祖國雜纂』に彼の短篇

『小英雄』が匿名で發表され、一八五九年には『ルースコエ・スローヴォ』に『伯父の夢』が發表された。この年の秋をドストエーフスキイはトゥヴェリで送り、こゝで『死の家の記錄』を書きつづけた。その冬には『祖國雜纂』に『小說ステパンチコウォ村とその住民』が掲載された。十一月の末に至つて、ドストエーフスキイは終にペテルブルグに移ることを許された。彼が文壇へのこの復歸は、二卷に亘る彼の文集の發行（一八六〇年モスクワに於いて）によつて記念された。ドストエーフスキイはその妻君との苦しい複雜な關係に加ふるに、彼自身ひどく病みついてゐたにも拘らず、非常な熱中をもつて文學に從事した。彼はこのころ、小說『虐げられし人々』を書きながら、兄ミハイルとともに雜誌『時代（ヴレーミヤ）』を發行してゐる（一八六一年—六三年）。雜誌の同人としてドストエーフスキイ兄弟のほかにエヌ・ストラーホフとア・グリゴーリエフとが關係してゐた。この雜誌が標榜した新しい傾向は「國粹派（ポチヴェニク）」すなはち「國民性と國民正義の心醉家」の名をもつて呼ばれた。この雜誌の編輯局では、スラヴ派と西歐派の論爭はもはや盡きたものと見なし、綜合と生ける創造の時代が來たことをその綱領に於いて表明した。その三月號には、二月十九日（一八六一年）の農奴解放に關する勅令が掲載された。然し此の改革は明かに時機を逸したものであつた。一八六一年の末にはすでに學生運動が開始された。その翌年、ペテルブルグにはもの凄い檄文が撒布された。誰か分らない謎のやうな手によつて、全都の住民を脅威した放火が罪される者もなしに行はれた。一八六三年にはポーランドに叛亂が起つた。雜誌『時代（ヴレーミヤ）』が活動せねばならなかつた政治的零圍氣はかうしたものであつた。この雜誌は當時の虛無主義者と論戰を張つたにも拘らず、政府は疑ひの目をもつて、この自由主義的「國醉派」に對したのである。そしてポーランド問題に關する論說に言ひがゝりをつけて、取り急いで此の危險な雜誌に發行停止の處分をおこなつた。そこでドストエーフスキイは新たに雜誌『時代（エポーハ）』を發行する許可を得たのであるが、この雜誌は永くは續かなかつた。一八六四年の春、妻のマリヤ・ドミトリーエヴナは肺病で亡くなり、更に二ケ月後には『時代（エポーハ）』の發行人たる兄ミハイルも死んだ。ドストエーフスキイは兄の一切の義務と借財とを一身に引き受けたが、雜誌はすでに破產狀態にあつたので閉鎖の止むなきに至つた。債權者に惱まされたドストエーフスキイは、文學的勞働によつて所要の收入を得て、爲替手形で債權者と清算しようといふ希望の下に外國に去つた。

雜誌編輯のこの數年間、ドストエーフスキイは、その誌上に『虐げられし人々』、『死の家の記錄』、『厭（いや）な逸話』、『夏の印象に就いての冬の覺書』（一八六二年の六月および七月最初のヨーロッパ旅行の印象）、『地下室手記』（一八六四年）、『異常な事件』（一八六五年）などを掲載すること

が出來た。その他に匿名で發表した雜誌論文や批評や社會評論は多數に上つてゐる。

一八六三年まだマリヤ・ドミトリーエヴナの生存中、ドストエーフスキイは再び外國へ出かけた。このころ彼には、もはや妻君との夫婦關係はなかつたらしい。少くとも彼は兄弟たちには、彼が一人旅でなく、一緒に妻君ならぬ別な婦人ススロワなるものが同伴することを打ち明けてゐる。この外國旅行の同伴者とドストエーフスキイとの關係がどんなものであつたかは、彼が兄ミハイルに送つた手紙の文句によつて判斷することが出來る。そこにはかう書いてある。「いろんな出來事が澤山ある。だがひどく退屈だ、ア・ペ（ススロワ）が一緒なのにも拘らずひどく退屈だ。こゝでは幸福にひたるのも苦しい。なぜなら今日まで愛した人々や、そのために幾たびか苦んだ人々と離れたからだ。一切を放棄し、有益であり得るものさへも放棄して、幸福を求めることは利己主義だ。かうした考へが、たゞいま私の幸福（實際にそれが有り得るものとすれば）を害ねてゐる……。」ドストエーフスキイは一八六五年に三たび目の外國旅行に出た。外國でその夏、彼は『罪と罰』を書き初めてゐる。十一月にはロシヤに歸つたが、金に窮して三卷にわたる全集の發行權を極めて不利な條件でステローフスキイに賣り渡した。この全集には一篇の新しい小說を含める條件になつてゐたが、その小說と云ふのは『賭博者』であつた。

ドストエーフスキイは、この契約の苦しい條件を心配して、その小說を期限までに書き上げようとして急いだ。それがために彼は、女の速記者アンナ・グリゴーリエウナ・スニトキナを傭つた。そして一八六七年二月十五日には、この女と結婚した（その時ドストエーフスキイは四十六歲であつた）。同じ年に彼は債鬼を逃れて若い妻君と一緒に外國へ行き、四ケ年半を過した。この間にドストエーフスキイは『白痴』を書いたが、それは一八六八年の『ロシヤ報知』に發表された。そのほか『永久の良人』（一八七〇年『曙光』掲載）と『惡靈』の最初の數章とを書いた。『惡靈』は一八七一年から七二年にかけて、やはり『ロシヤ報知』に掲載された。一八七一年七月八日にドストエーフスキイはペテルブルグに歸つた。この間に彼の作品は幾たびか版を重ねた（『罪と罰』は四版を出した）。かゝる事情で彼は次第に債權者との清算を濟ますに至つた。若い妻君は極めて事務的な理智の醒めた女であつた。從つて彼女は一切の物質的の世話を献身的に引き受けた。ドストエーフスキイはその生涯の晩年に小說『未成年』を書いて、一八七五年の『祖國雜纂』に掲載し、最後の作品『カラマーゾフ兄弟』は、一八七九年から八〇年にかけて『ロシヤ報知』に掲載した。

ドストエーフスキイは、その止むを得ないヨーロッパ漂泊の後で、二度ばかり獨特な哲學的政

論家として乘り出したことがある。第一回は、一八七三年に雜誌『市民』に『作家の日記』を掲載した時であり、第二回目は一八七六年から七七年にかけて今度は獨立的に月刊の單行本として同じく『作家の日記』を發行した時である。

一八八〇年六月八日、ロシヤ文學同好會の主催でプーシキンの記念に獻げられた祭典で、ドストエーフスキイは此の詩人に就いての有名な講演をした。この講演は、聽衆に强い感動を與へた。その講演の中で、彼はロシヤ國民の運命を豫言して、ロシヤ國民はプーシキンと同じく他の國民の相貌を洞察する使命を擔つて居り、又それによつて自分の民族的特殊性に閉ぢこもらずに世界的原理のために奉仕すべく豫定されたものであると云ふ趣旨を述べた。

ドストエーフスキイはその最後の五年間に、ほとんど凡ての雜誌から敵視されてゐたにも拘らず、その多數の讀者と崇拜者の間には少からぬ成功を見てゐた。併し彼はその生涯の最後に至るまで、藝術家としての彼によつて世界文學に於ける最上の地位が征服されてゐることを氣づかなかつた。また彼は、ロンドンから東京に至るまで、世界の凡ゆる隅々に於いて、凡ての文化國民が、彼の書き流した草稿のまゝの文章の一句々々に感動しながら、熱心に彼の作品を飜譯するであらうと云ふことも、彼の小說がダンテの『神曲』やセルヴァンテスの『ドン・キホーテ』のやうに千度も註釋されるであらうといふことも豫知し得なかつた。

ドストエーフスキイは生涯、癲癇（「豫言者の病氣」）の發作に苦んだが、遂に一八八一年一月二十八日の晩方家族の人たちに圍まれながら肺動脈の破裂で亡くなつた。その前日、ひどく咯血があつたので、彼は死が近づいたことを明かに意識しながら死に就いたのである。

彼の葬式は、彼の家族に取つても、また彼の少數の親友に取つても、全く豫期されなかつたほどの大衆葬であつた。彼の傳記作者は書いてゐる。「その時までロシヤには未だかつてこんな葬儀はなかつたと斷言できる」と。大集團をなした民衆、盡くることなき數多の花環と代表吊問者、すべてこれらの事實は當時の人々を驚かした。あたかも死が突然、或るとばりを開いて、その瞬間、はじめてすべての人々が天才の顏を見たかのやうであつた。

ドストエーフスキイの生涯と藝術

(藝術上の新語)

リヴォフ・ロガチェーフスキイ

一

田園の住人にしてヤースナヤ・ポリヤーナの隱者なるレフ・トルストイの藝術を、もしロシヤ文學の明るい野原(ヤースナヤ・ポリヤーナ)だとすれば、神經質的な都會の子ドストエーフスキイの嵐の如き藝術は、切迫せる免れ難い破局(カタストローフ)の豫感によつて、電光のやうに貫かれてゐる。貧民病院、斷頭臺、死の家(監獄)——これが新しい『神曲』を書いた十九世紀のダンテたるドストエーフスキイが通つて來た地獄である。

彼はボゼドムカのマリンスキイ病院から出て、モスクワのツヴェツノイ並木街の上を歩いてゐる。不安さうに周圍を見廻しながら、何か恐ろしいものに鋭く耳を澄ましながら、囚人服を着て

都會の雜踏の中をたつた一人で、胸がドキ〳〵するやうな期待に充たされつゝ歩いてゐる。

斯樣に、ひとりの彫刻家は一九一九年にドストエーフスキイの姿を描寫した。彼は矢張り同じやうな姿でロシヤ文學にはいつて來たのである。「ハロルド風のマントルを着たモスクワ人」でなく、徒刑囚の服を着たモスクワ人たる彼は、我々の恐ろしい日の不安を、「絶え間なき情神の不安」を具現した彼は、悲痛と創傷と緊張した苦難と極度の窮迫と屈辱と謀反と忍從の道を通つて來た。ア・マイコフへの手紙の中に彼は自分のことをかう書いてゐる、「私は到るところに於いてまた總てのことに於いて、最後の限界にまで達した。私は一生、境界を踏み越えた」。彼こそは「最後の恐怖」に伴はれたレオニード・アンドレーエフの天才的な靈父である。彼こそは魂の中で永久に神と惡魔とが戰つてゐる極端な人間である。彼はその一生涯を擧げて、その全體驗をもつて、莊園出身のオブローモフやテンテトニコフやラウレーツキイらに、自分のヒステリツクなヒーローを對立させる爲めに準備された人なのである。あの神經質な頽廢的な發作的な人々、いつも氣違ひじみた、心の平衡の取れないヒステリツクな人々、そして社會的矛盾のために惱み拔いた騷々しい都會の人々、限界を踏み超えた人々、病院服や囚人服を着た背神者や改悛者、たとへばラスコーリニコフ、ラゴージン、ウェルホヴェンスキイ、スタヴローギン、カラマーゾフ、スメルジャーコフの如き人物を、彼は莊園文學の主人公たちに對立せしめてゐる……。ゴーゴリ、グリゴローヴィチ、ツルゲーニェフ、トルストイらの同時代者であるドストエーフスキイほど、我々が生きてゐる嵐の如き神經質な時代に間近く接觸したものは一人もない。批評家ストラーホフがドストエーフスキイのことに就いて「彼は最初から新しい作家として進出した」と言つてゐるのは全く正しい。『貧しき人々』、『虐げられ踏みつけられた人々』、『死の家の記錄』、『二重人格』、『未成年』、『惡靈』、『罪と罰』、『白痴』、『カラマーゾフ兄弟』の作者こそは、實にロシヤ文學に新しい言葉、新しい樣式、新しい手法をもたらした人である。そして新しい心理を持つた新しいヒーローたちを實生活に呼び出した。もしかう云ふ言ひ方が許されるならば、彼こそは新しい人生感、新しい人生觀、新しい人生描寫の藝術家であつた。

これは藝術家と近代都會との有機的關係から制約されたものである。つまり、新しい社會環境への傾向、ドストエーフスキイを力づよく掴んだところの嵐の如き革命時代の緊張や破局との有機的關係から來たものである。西歐に於ける一八三〇年、一八四八年、一八七一年の革命、ロシヤに於ける十九世紀の四十年代、六十年代、七十年代の革命運動、それから都會に於ける社會關係の明白なる矛盾――これが「不可思議な力を持つた心」を強く打つた。調和ある人々の落ちつ

いた心さへも打つた。が、特にドストエーフスキイの心を強く打つたのである。病的に、ヒステリックに敏感な、非常に疑い深い、自愛心の強い、内氣な癲癇病者の性格を持つた、そして個人的の特別陰慘な狀態によつて害はれた此の殉教者、此の受難者こそは、その藝術のうちに十九世紀末の凡ゆる矛盾と凡ゆる緊張さと凡ゆる悲痛とを盛り上げたのである。

二

彼は自ら新しい社會的環境の作家だと自覺してゐた。そして何時もゴーゴリ、グリボエードフ、ゲルツェン、レフ・トルストイ、サルツイコフ・シチェドリン、グラノーフスキイなどに自己を對立させた。階級的憎惡に滿された彼は、その幾多の擬狂詩（パローディー）に於いて、これら貴族的知識階級の貴族的特質を曝露し立證し描寫した。たとへば彼は、暴君的な厭ふべき僞善者であるホマ・ホミーチ、オピスキン（『ステパンチコヴォ村』の主人公）なる人物に於いて、『交友錄』の著者ゴーゴリを嘲弄した。また『シチェドロダーロフ（慈善家の意＝譯者）か虛無黨の分派か』と云ふ叙事詩に於いては、シチェドリンを痛烈に嘲笑し、『惡靈』のカルマージノフなる人物に於いては、ツルゲーニェフに對して意地惡いカリカチュアを描き、同じ作品の父ウェルホヴエンスキイなる人物に於いては、グラノーフスキイの惡口を云つてゐる。ドストエーフスキイは明かに、貴族の家の出身者たちが、彼とは全く沒交渉な世界觀や人生觀の所有者であることを意識してゐた。

一八七一年に批評家ストラーホフへ宛てた書簡の中で、ドストエーフスキイは、ツルゲーニェフの藝術を語るに當つて、突飛な云ひ方だが、全くマルキシスト的精神に於いて、次のやうなことを書いてゐる。

「御承知の通りこれは凡て地主の文學ではないか？　この文學は、もはや言ふべきことを凡て云ひ盡したのだ。特にレフ・トルストイの文學は素晴らしい。だが此の最高級の地主の言葉は最後のものであつた。地主の言葉に取つて代るべき新しい言葉は、これ迄まだ一度も存在したことがなかつた。レシェトニコフの如き人たちは、何も語らなかつた。でも兎に角彼は、藝術界に何か新らしい言葉の必要なことに就ての考へを表明した。たとへ醜い形に於いてではあつたが。」

『貧しき人々』の作者は、自分が藝術界に於ける此の新しい言葉を語るべき運命を擔つてゐることをよく知つてゐた。それは地主の文學でなく、田園文學でなく、莊園文學でなく、また洗練された優雅な文學でなく、何か新しい言葉を語るべき使命であつた。

彼はこの事を彼獨特の形に於て語つた。古い美學の法則に對し、美に就いての古い觀念に對して挑戰しながら、彼は「修辭法を學んだ人達」「高雅な文體の或る愛好者たちを嘲弄した」。

彼は速いテンポと慌たゞしさと雜踏とに渦卷いてゐる都會の子であつた。そこでは、

肩や手や足や頭の
速い流れに渦卷きながら
市街は荒々しい喧騒とともに
狂亂の瞬間へと疾驅する。
だがそれと同時に
完成と希望と復讐へと疾驅する……

「私は都會生活に適しない」と訴へながら、レフ・トルストイは自分の莊園に歸つて、そこで八十二年に亘る一生涯の中で七十五年間を送つた。これに對して、少くともその生涯の十分の九を都會で送つたドストエーフスキイは、「私に取つて、また私のヒーローに取つては、都會以外に生活がない」と答へることが出來るだらう。

レフ・トルストイには新聞紙とその電報やニュースとがとても堪へ切れなかつた。詩人フェートに宛てた手紙の中で、彼は新聞を讀まないやうに忠告してゐる、然るにドストエーフスキイは、都會の出來事の雜報をむさぼるやうに吸收した。彼の作中人物は、いづれも現代都會の雜踏とその騒々しい精神とその犯罪的記錄とに滿ちた新聞資料に大きな意義を與へた。

ドストエーフスキイは毎晩「昂奮しながら急ぎながら」一種の神經的な痙攣狀態で、非常な速度と緊張とを以て小說を書いてゐる。『虐げられし人々』の主人公の若い文學者は、作者自身をモデルにしたものであることは察するに難くないが、彼は二日二晩で五十六ページを書いたと言つてゐる。

莊園作家すなはち貴族文學者は閑暇にまかせて徐かに天才の遊戯を樂みつゝ、愛情を罩めて家庭の記錄を書いてゐる。幾たびか同じ事柄に還つては讀み返し、讀み返しては書き直しながら悠つくりと書いてゐる。ところが、いつも期限までに急いで書き上げなければならなかつた都會藝術家ドストエーフスキイは、時としてその長篇小說を尖鋭的な感興の熱火の中で一ヶ月間に書き上げてゐる。そしてその小說の中に、活動寫眞のやうな事件と人物との閃影を取り入れてゐる。

多くの研究家、たとへばウラデーミル・ソロヴイヨフ、ペレヴェルゼフ、グロースマン等は、樣々な角度からドストエーフスキイの根本的特質として、彼の藝術の力學性を認めてゐる。ペレヴェルゼフはドストエーフスキイを稱して、形式の藝術家でなく運動の藝術家だと云つてゐる。すべて是等の研究家は、『惡靈』の作者が、豫期しない出來事に滿ちてゐるその小說の中に、人生

の靜態（スタティック）でなく人生の動態（ダイナミック）を具現したことを認めてゐる。幾世紀かの間に亙つて固定した生活でなく、途上に横はれる一切の頑强な障碍を突破して行く運動を體現したことを述べてゐる。ドストエーフスキイは、祖先傳來の門閥の特質や格式に固まつた貴族の莊園生活に對するに、騷々しい都會生活を以てした。そこでは凡ゆるものが動搖の中にあつて、何物も固定してゐない。凡てのものはまだ初まつたばかりで、運動は舊い旣成の形式に嵌（はま）ることを欲しないばかりでなく、また嵌めることも出來ない。そこでは人々は、恰も萬華鏡中に於けるが如く散らついてゐる。そこでは藝術家の任務は、精神の最も偉大なる緊張の刹那に於けるこれらの人物の表情を洞察することにある。門閥の家庭的特質を永久に傳へたところのゴーゴリやツルゲーニェフやトルストイの肖像畫廊に對して、ドストエーフスキイは市街の群衆の中にちらついたり、都會の摩天樓の窓からちよつと顏を見せたりしてゐる、その作中人物の生活に於ける最も悲劇的な瞬間を對立させた。

三

市街や横丁を無限に織り込んだこれ等の紛糾錯雜した小說の構成の上に、都會はその刻印を捺してゐる。新聞の拔萃や犯罪記錄や哲學的論文や緊張した體驗やを、ドストエーフスキイは、湧き立つやうな渦卷の中に、又は混沌たる事件の葛藤の中に、或は嵐のやうな悲劇的熱火の中に放り込んでゐる。そして各種の樣々な部分を一個の全體に融合して、急激な生活の痙攣と顫動とに滿ちた新しい異常な作品を提供してゐる。

幼年時代や幸福な青年時代や圓熟した成年期の交替に件ひ、長い年月に亙つて年代記的順序で展開されてゐる事件の明瞭な整然たる緩やかな流れとは反對に、往々にしてドストエーフスキイは、一日または數日の間に於ける複雜な事件の異常性を對立させてゐる。そして斯樣な事件に滿ちたその物語を、屢々途中から又は終りから始めてゐる。恰も都會の往來で悲劇的な血塗れの事件が突然我々の足を停める時のやうに、我々は群衆の中に混つて、緊張せる興味に滿ちた複雜な事件の終局からその發端へと近づいて行くやうなものである。見も知らぬ他人の生活が、次第に我々を軌道から逸（そ）らして、都會の日常の慌しい仕事を忘れさせて、現代都會の地獄の中心へと導いて行く。この悲劇的な藝術家によつて永久に傳へられた都會の街道には、古い菩提樹の匂ひでなく、血の匂がする。哲學の夢物語でなく、老いたる乳母（うば）の昔話しでなく、『オブローモフ』（ゴンチャロフ作）や『シチグロフ郡のハムレット』（ツルゲーニェフ作）の眠りを誘ふやうな老婆の子守唄や優しいお伽噺でなく、雷雨と嵐と人間の悲劇とが、ロシヤ文學に於ける唯一の悲劇的作家たるドストエーフスキイの小說に漲つてゐるのだ。彼の小說に於ける兒童でさへ、たとへばイリューセチカ・スニェギリョフやニェ

ートチカ・ニェズワーノワの如きでさへ、我々の前には悲劇的事件のヒーローとして現れてゐる。ミーチャ・カラマーゾフに打ちのめされた二等大尉スニェギリョフの息子イリューセチカは、子供らしい悲痛な泣き聲で、「お父さん、あの人どうしてお父さんを侮辱したの？」と云つてゐる。この小さな受難者こそ都會生活の悲劇の結晶ではないか？『罪と罰』、『白痴』、『惡靈』、『カラマーゾフ兄弟』、『未成年』、これらの小說はいづれも悲劇的事件の複雜な織物である。これらの作に於いて、都大路の冒險的な物語の犯罪性は、この現代のダンテによつて神曲に作り替へられてゐる。もつと適切に云ふならば、現代都會の悲劇に作りかへられてゐる。そして顯著な豫言的意義を受けてゐる。宗教哲學的テーマに就いての素晴らしい對話、こまやかな心理解剖、人間行爲の複雜な根據づけ、天才の啓示と洞察、――これが樣々な事件の渦卷で紛糾錯雜せるドストエーフスキイの犯罪記錄を、現世紀の最も偉大なる成果にまで達せしめてゐるのである。

『罪と罰』や『カラマーゾフ兄弟』のうちに最も露はに表明されてゐる慘酷な悲劇的事件への作者の嗜好は、疑ひもなく、ドストエーフスキイ家の家庭記錄によつて說明が出來る。ドストエーフスキイ自身は家庭の陰慘な事件に就いて吹聽することを好まなかつたが、いま彼の娘のエル・ドストエーフスカヤはその著書（最初ドイツ語で著されたが、一九二二年にゴルンフェリドの序文を添えて國立出版所からロシヤ語で發行された『娘の見たるドストエーフスキイ』）に於いて、ドストエーフスキイの思想を罪と罰の方面へ、カラマーゾフ主義の側へと推しやつた陰慘な流血の事實を傳へてゐる。その中でドストエーフスカヤは、ドストエーフスキイの父であり彼女の祖父に當る人の、病的な吝嗇と重苦しい酒癖とのことを物語つてゐる。この酒癖は、彼の凡ての子供に取つて殆んど運命的に作用したのであつた。彼の長子のミハイルも末子のニコライもこの病氣を受けついでゐた。彼女は云つてゐる、「わたしの父の癲癇も明かに同じ原因から來たものである。だが最も不仕合せなものは、疑ひもなくわたしの叔母のワルヴーラであつた。」このワルヴーラ・ミハイロウナは富裕な人に嫁いだので、その人は自分の死後ワルヴーラの手に多くの家作を殘した。だが「不幸にして、この哀れた女は嫌惡すべき、疑ひもなく病的な吝嗇の爲めに苦んだ。」「彼女は總ての附添ひの者を始末し、部室を煖めることをせず、自分の食事すら料理しなかつた。近隣の村々では彼女の吝嗇と財產とのことを誰知らぬものもなかつた。この吝嗇家の財產に就ての噂さは、端なくもワルヴーラの借家人のところで玄關番をしてゐたひとりの若い農夫の空想に刺戟を與へた。彼は一人の浮浪漢と謀し合せて、二人でこの不仕合せな病める女を殺して了つた。」

ドストエーフスキイの父の最後はもつと悲劇的であつた。それは、ワルヴーラ・ミハイロウナの殺害よりも遙か以前に起つたことである。エル・ドストエーフスカヤは書いてゐる、「わたしの祖父はいつも配下の農奴たちをひどく慘酷に取扱つた。彼は酒を飲めば飲むほど、兇猛になつた。そして結局、農奴たちは彼を殺害するに至つたのである。祖父は或る夏の日、自分の領地のダローヲエ村からチェレマシニャと云ふ別な領地へ出掛けたのであるが、それっきり歸つて來なかつた。後になつて、道もないところで彼が馬車と座蒲團で締め殺されてゐるのが發見された。その時の馭者は馬もろともに姿を消し、同時に祖父の幾人かの農奴たちも姿を消して了つた。裁判審理の時に、父の手に移つた農奴たちは、この事件が復讐行爲であつたことを供述した。」

「このおそろしい殺害の時に、わたしの父（ドストエーフスキイ）は不在であつた……。彼の青年時代に彼があれほど愛してゐたダローヲエ村の農民たちがやつた此の兇行は、青年の心に深刻な印象を與へた。父の死に就いて初めて知つた時に、ドストエーフスキイは癲癇の最初の發作を起したと云ふことを、一家の言ひ傳へは語つてゐる……。彼はこの恐ろしい殺害の原因を一生の間思ひ出し、解剖したのである。」

後年に至つてもドストエーフスキイは、徒刑場で殺人者の間に幾年かを送りながら、人間の犯罪性の解剖を續けてゐる。斯樣にして、彼の根本的テーマの一つである罪と罰は、ドストエーフスキイの體驗から來たものである。そして此のテーマを、ドストエーフスキイは都會を背景として取り扱つてゐる。更に都會の環境とその神經的な緊張と、犯罪性に滿ちたその雰圍氣とはこのテーマの輝かしい表現を助けてゐる。

四

ドストエーフスキイの殆んど凡ての小說は、短篇も長篇もみな、都會の騷々しい環境の中で發展してゐる。單に『二重人格』がペテルブルグの叙事詩であるばかりでなく、殆んど凡ての作品がペテルブルグとその霧勝ちな夜と白夜と、その幻影のやうな生活とに漲つてゐる。ドストエーフスキイは單なる都會藝術家でなく、ペテルブルグを永久に傳へた藝術家である。アンドレイ・ベールイの『ペテルブルグ』は、ドストエーフスキイの小說の拔萃にしか値ひしない。

都會の高い黑い煤だらけの家々は、ドストエーフスキイの視野から田園の光景を陰蔽した。石造りの井戸の底に住んでゐるドストエーフスキイの作中人物は、充分の理由をもつて「明けても暮れても、わたしの牢屋は暗い」（『どん底』の歌）と歌ふことが出來る人たちである。空氣の不足から金翅雀（ひは）でさへ死ぬる穴倉の息苦しい部屋（へや）の中で、バネをかけたやうな神經質な氣違ひじみた奇怪

な人々が、久しく太陽に愛想をつかした人々が穴の中に於けるが如く棲息してゐる……一軒建ての家でなく、一杯に人が詰まつてゐる大きな摩天樓の中の小さな部屋々々、これがドストエーフスキイの注意の焦點である。

處女作『貧しき人々』の主人公マカル・デーヴシキンは、臺所のそばの頗る質素な一室を借りて「幾分腐つた、鋭く鼻を突く臭氣」の中に住んでゐる。小説『女主人』のヒーロー、オルドゥイノフは、まだ年若く、「感情の露骨さと卒直さ」で秀れた極端に敏感な男であるが、彼は或る貧しい借家人のところに一室を借りようとしてゐる。『二重人格』の主人公ゴリャドキンはゴーゴリの『狂人日記』のパプリシチンを思ひ出させるやうな發狂した位階持ちの小役人であるが、彼はシェスチラーヴォチナヤ街の、或る極めて大きな家屋の四階に住んでゐる。また官吏出身の都會育ちのプリューシュキンともいふべき、プロハルチン氏は二十年間も腐敗した小室の中に居る男であるが、彼は誰かゞ此の居間に物好きな鼻を突き込むことを好まなかつた。

貧しい大學生のラスコーリニコフは、部屋の女主人に氣付かれないやうに、その傍をいつも滑るやうにして通り過ぎてゐるが、彼は五階建ての家のすぐ屋根裏にある借家人の小さな一室を借りてゐた。この部屋は、「住宅と云ふよりは寧ろ戸棚に類してゐた。」(『罪と罰』)。そのほか「居室哲學」を創造したウェルシーロフの息子(『未成年』)も、キリーロフもシャートフ(『悪靈』)も同じやうな狹くるしい部屋に住んでゐた。

すべて彼等は、單に都會の住民と云ふばかりでなく、知識階級のプロレタリヤであり、常にその狹苦しい部屋の中でロスチャイルドやナポレオンたらんことを夢想してゐる獨りものである。これ等の都會の貧民——自愛心の強い、傲慢に咬みつかれた、陰欝な復讐に燃えてゐる貧民、彼等には現實的の生活がなく、たゞ「居室哲學」を持ち、または、じめじめした部屋の壁の中で幻想に耽つてゐる人々である。そして骨の髓からの都會貧民の新しい藝術家で、而も自分の『賭博者』と共に數十萬の懸け金を儲けることを夢想したドストエーフスキイその人が、特に此の貧民層を描寫してゐることは注意すべきことである。

もしポミャローフスキイが「淨められた人類」に飽いて、高貴な貴族や高雅な文章に對して平民の憎悪を感じたとすれば、ドストエーフスキイは、虐げられ踏みつけられた都會貧民の屈辱と憤怒とを透して全世界を眺めてゐると云へるだらう。彼みづからが、自身の上に暗い殺人的な貧困の苦軛を餘りにも鋭敏に感じてゐたと云ふことは驚くに足らない。たゞ晩年、死の少し前になつて、彼は漸く債鬼の毒牙を免れたのである…貧乏神はモスクワに於けるドストエーフスキイの搖

籃時代から彼の身邊に附き纏つて、ペテルブルグでもヨーロッパの諸都市でも彼を離れなかつた。運命は、詩人ネクラーソフを苦しめたやうに、貧苦と勞働と飢餓の深淵から深淵へと、彼を引つ張り歩いた。けれどもネクラーソフは、父の家の閾を出て、飢餓の貧苦と苦しい勞働とを味ふまでは、殆んど十六年間を田舍の地主の莊園で送つてゐる。然るにドストエーフスキイは、最初からモスクワなるマリンスキイ貧民病院の貧しい醫長の狹い住宅にある薄暗い子供部屋で成長し、絶えず威嚇するやうな父の陰欝な聲を聞いた、――「俺が死んだら貴樣たちは乞食になるぞ！」

五

一八三七年から青年ドストエーフスキイはペテルブルグの陸軍技術學校に入つた。見知らぬ他人と伍して修學の苦しい歳月（一八三七年――四三年）は始められた。同時に、半ば飢えた生活と作家に就ての空想とが始まつた。一八四四年から官吏の經歷を弊履の如く放棄した若き雜誌記者は、生活の爲めに戰はなければならなかつた。高利貸の爪牙にかゝつて喘ぎながら、五ルーブリづゞを借金して作家の道を開拓しはじめた。ドストエーフスキイの不斷の窮迫に就いては總ての傳記學者が物語るところである。この窮迫と債權者からの絶え間なき脅威とは、この頃すでに有名になつてゐた作家をして、一八六七年から四年のあひだ外國へ去らしめた。

だが一八七一年に歸國するや、ドストエーフスキイは再び「友人たち」の粘りづよい爪牙に引つかゝつた。ア・ドストエーフスカヤは、その『回想錄』中の一八七一年歸國當時の章に於いて、高利貸の一人とドストエーフスキイとの「友誼的」な談話の瞬間を極めて精彩に描いてゐる。その中でドイツの商人ギンテルロフは債務者ドストエーフスキイに云つてゐる。

「さて、お前さんは才能ある學者です。ですがこの小さなドイツ商人の俺でも、ひとりの有名なロシヤ人を債務勞役場へ叩き込むことが出來るといふことを見せてやりたいんです。まあよく考へなさるがいゝ、俺はきつとそれを實行しますよ。」

この種のギンテルロフはドストエーフスキイの生涯の途上には數多くゐた。彼は殺人的な窮迫の事情の下で、時としては違約の威嚇の下で、その小說や物語を書いた。小說『賭博者』を期限までに書き上げるには、女速記者アンナ・グリゴーリエヴナ・スニートキナの助力が與つて力あつた。この女は一八六七年にドストエーフスキイの後妻となつてゐる。

一八六三年にドストエーフスキイは、ストラーホフへの手紙に書いてゐる、「ボボルイキンは宣しく承知してゐるがいゝ。私は一生の間、『貧しき人々』のほかは、前金を取らずに作品を賣つたことが只の一度もなかつたと云ふことを。このことは『現代人』でも『祖國雜纂』でも承知し

てゐる。私は文壇のプロレタリヤである。誰でも私の作品を欲するものは、前以つて私を保證して吳れなければならない。」

貧乏神は始終、彼の背中に附き纏つて彼を衝つ突いた。それを彼は鋭敏に惱ましく感じて、既に一八五九年に兄弟に訴へたことがある、「二千人の農奴を所有するツルゲーニェフが十六ページに就き四百ルーブリづつを取つてゐるのに、窮迫してゐる私がたつた百ルーブリづゝしか取れないとは一體どう云ふ譯だらう。私は貧困ゆえに、金の爲め大急ぎで書かねばならないのだ。だから健康を害ふやうにもなるのだ。」

この文壇のプロレタリヤは、ヴランゲリの言葉に依れば、「最も必要缺くべからざるものを年久しく缺いでゐた。」そして自分と同じやうな永久の深刻な貧苦の重壓の下に喘いでゐる、見離された孤立したプロレタリヤを、その一生の間描き續けたのである。けれどもドストエーフスキイは、現代都會の小說を提供したばかりでなく、又その最愛のヒーローとして知識階級のプロレタリヤを第一線に推し進めたのみでなく、彼は社會小說を提供し、その小說に於いて社會問題を展開したのである。

六

貧困に對するドストエーフスキイの鋭敏なる感覺は、丁度ヨーロッパに於いてこの呪はしい問題が鋭く提出された時代と一致してゐる。若きドストエーフスキイがその處女作『貧しき人々』を書いたのは、一八四四年から四五年にかけてゞあるが、それをネクラーソフの『ペテルブルグ集』に揭載したのは一八四六年である。それは丁度フランスに於ける社會革命の前夜で、ベリンスキイが「思想の思想」たる社會主義に熱中した時期に相當する。

一八四〇年代と云ふ時代は、都會貧民層の代表者たるこの都會作家が、個人的體驗から廣汎な社會問題へと移つて、社會的不公正と社會的改造の問題を考察するのに資するところが多かつた。一八四〇年代に於いて、「甘い音樂と禱り」（プーシキンの詩の句＝譯者）は社會性にその地位を讓つてゐる。そしてこの社會性の宣傳者は「兇暴なるウィツサリオン」（ベリンスキイのこと＝譯者）であつた。ゴーゴリの『外套』、グリゴローヴィチの『アントン・ゴレムイカ』、ネクラーソフの『ペテルブルグの一角』は、いづれもこの社會性に浸されてゐる。ベリンスキイはドストエーフスキイの處女作『貧しき人々』を、社會小說を創造すべき試みとして激賞してゐる。

デョージ・サンドの社會主義的小說、フーリエの社會主義的教義、ベリンスキイの社會主義的煽動は、若きドストエーフスキイが、永久に人の胸を打つ新しい問題を自覺する上に助けとなつた。

それはたゞに四〇年代に取つてばかりでなく、十九世紀の後半期に取つても、特に現代に取つても、病的な尖鋭的な問題である。一八四八年の社會革命は、「呪ひで刻印された飢民と奴隷の世界」を震憾せしめた。そしてベリンスキイの熱烈な生徒であつたドストエーフスキイを、深く感動させたことは云ふまでもない。ドストエーフスキイの藝術は、社會革命の旗幟の下に展開されてゐる。彼は又、社會革命の旗幟の下に一八四八年から四九年にかけてブタシェーヴィチ・ペトラシェーフスキイ會に加入してゐる。斯樣にして彼は、社會主義者すなはちフーリエ主義者の集つた所で、ベリンスキイがゴーゴリに宛てた有名な手紙を朗讀してゐる。その手紙は、革命的な公憤と、農奴制への憎惡と、名だたる「正教、獨裁、國民性」の三位一體を標榜したニコライ帝の政治に對する憎惡に滿ちたものであつた、

一八四九年ペトロパーヴロフスク要塞監獄の中で書いた供述に於いて、ドストエーフスキイは自分の氣持の發生に就いて記してゐる。

「西歐に於いては恐ろしい見世物が催ふされてゐる。今までに例のない悲劇が演じられてゐる。永久的の秩序が龜裂を生じて破滅してゐる。最も根本的な基礎が瞬間ごとに沒落してゐる。沒落しつゝそれによつて全民族を惹付けてゐる。三千六百萬の人間が毎日のやうに、その將來とその財產とその存在とその子供とを、乘るか反るかの危機に立たせてゐる。この光景は迚も注意や好奇心や知識欲などを起させるやうなものではなく、直ちに精神を震憾させる底のものである！」

後年ドストエーフスキイは、この精神的震憾に就いて、社會主義への熱中に就いて、度々思ひ出して書いてゐる。我々は一八七三年の『作家の日記』の中に、次のやうな數行を見出す。「我々は、まだ一八四八年のパリー革命の遙か以前、すでに社會主義的思想の魅惑的な影響の下にあつた。私は早くも一八四六年にベリンスキイによつて共產主義社會の聖座に叙聖されたのだ。」一八四〇年代のロシヤの若い人々を、その社會主義的小說で支配してゐた有名なヂォーヂ・サンドが死んだ時、ドストエーフスキイは一八七六年の『作家の日記』に熱烈な感動に滿ちた一文を掲げて、この女流社會主義者が青年時代の彼に取つて如何なる意義を持つものであつたかと云ふことを追想してゐる。彼は十六才の時に彼女の小說を讀み終つて「一晩中熱病狀態にあつた」と云ふことを物語つてゐる。『惡靈』の作者であり、『日記』の作者であるドストエーフスキイは、その死の四年前に一篇の意味深い文章を書いて、その中に、ヂォーヂ・サンドが丁度新らしい希望と新しい理想とを表明すべき新しい試みが現れた時代に入つて來たと云ふことを言つてゐる。「進步的輿論は、專制制度が更新されたと云ふこと、新しい勝利者（ブルョジア階級）は恐らく從來の暴君（貴

族階級）よりも××と云ふこと、自由と平等と博愛は大言壯語以外の何ものでもないと云ふことを、よく理解してゐた。事實この時代には新しい言葉が興り、新しい希望が生れた。そして新しい人々が出現して直接に宣言した、――仕事は空しく中止されたこと、勝利者の政治的交替によつては何ものも達成されなかつたこと、仕事を續けなければならぬこと、革新は急進的社會的でなければならぬと云ふことを宣言した。」

七

ドストエーフスキイの新しい言葉は、單に都會の言葉であつたのみならず、また知識階級のプロレタリヤの言葉であつたばかりでなく、それはロシヤに於ける急進的・社會的革新の新しい希望、新しい理想を表明すべき新しい試みであつた。たとへ後に至つてドストエーフスキイが、パウロからサウルに變じて社會主義を呪つたとしても、彼は社會小說の創造者なのであつた。彼は社會的矛盾の凡ゆる尖銳さを人々に感得せしめた。

社會問題、貧しき人々に就いてのテーマ、虐げられ踏みつけられた人々に就いてのテーマ、死の家の犧牲者に就いて、高利貸の老婆を殺した飢えた大學生のラスコリニコフに就いて、貧乏な家族と醉ひどれの父とを救ふために自分の身を賣つたソーニャ・マルメラードワに就いてのテーマ、二等大尉スニェギリョフとその幼い子供イリューセチカに就いて、又は、母の乾からびた乳房に空しくかぢりついてゐる飢えた赤子に就いてのテーマ――それらはドストエーフスキイによつて創造されたものでなく、彼みづからそれらの苦痛を味ひ、自ら心のうちに背負つてゐたのである。しかもこれらのテーマは、日常生活のうちに見るところのものであつた。

「何故に人々は貧しいのか？　何故に子供達は貧しいのか、何故に曠野は不毛なのか？　何故に喜びの唄を歌はないのか？……何故に彼等は痛ましい不幸の爲めにあんなに黑くなつたのか？何故に子供たちを養はないのか……？」斯樣に一八八〇年に書かれた最後の小說の主人公ミーチャ・カラマーゾフは、夢の中で自ら問ふてゐる。ドストエーフスキイは此の夢を一生の間ゆめみたのである。「此の上子供が泣かないやうに、子供たちの黑い乾からびた母親が泣かないやうに、今後は誰の目にも涙が無くなるやうに、そして何ごとをも顧みず、時を遷延することなしに、カラマーゾフ式の無拘束な力をもつて今直ぐに何うかしてやりたい」と、ドストエーフスキイは一生の間熱望した。

ドストエーフスキイは、社會的不公正の爲めに虐げられ踏みつけられ惱まされてゐる子供たちの、恐ろしい苦痛の描寫を利用して、尖銳的な社會問題を特に濃厚に彩ることを好んだ。（『罪と

罰』、『カラマーゾフ兄弟』、『未成年』、『ニートチカ・ニェズワーノワ』）この手法は神經を痛く衝撃し、社會組織の甚だしい不公平を鮮かに立證する助けとなつたのである。

ドストエーフスキイの凡ゆる形而上學も、また虚無主義者と社會主義者に對する彼のあらゆる譴責も、飢えた赤子の泣き聲を打ち消すことは出來なかつた。飢餓の爲めに黑くなつた母親の乾からびた乳房にかぢりついてゐる此の赤子の惱みぬいた蒼白の顏は、神祕的な霧を透して、從順と謙遜との說敎を透して、鮮かに浮き出してゐる。例のミーチャ・カラマーゾフの夢は、ゾシマ長老のスラヴ主義的な敎訓よりも力强く、確信に滿ちてゐる。

けれども我々は、勿論、一八六〇年代からドストエーフスキイの意識が益々宗敎問題の上に作用してゐることを認めなければならぬ。「別世界の問題」への此の轉向は彼が體驗した個人的破局の後に行はれたものである。そして此の方面でも、最高の意味に於ける此の寫實主義者は、精神的傷創、精神的苦惱、腦變調の此の偉大なる鑑識家、淪落せる魂の叙述家は、自己の新しい言葉を新式に自己流に語つてゐる。

八

ドストエーフスキイはその創作的生活の三十五年間に彼の作品に認められる二つの基本的な時期を體驗した。一つは一八四六年から一八六二年まで、一つは一八六三年から一八八〇年までである。前期は社會的不公正に對し、社會的不平等に對し、貧民虐待に對しての熱烈な反抗と繫がつてゐる。もし病める良心が懺悔せる貴族をして彼等の薄倖な主人公を描寫せしめたとすれば、辱められた名譽と怒れる反抗とはドストエーフスキイの靈感を刺戟したと云へるであらう。特に一八四九年の檢擧までの、豐かな創作活動が爲された此の第一期に於いて、ドストエーフスキイは多くの長篇と短篇とを發表してゐる。卽ち、『貧しき人々』（一八四六年）、『二重人格』（同上）、『プロハルチン氏』（同上）、『九通の手紙より成る小說』（一八四七年）、『女主人』（同上）、『弱き心』（一八四八年）、『クリスマス樹と結婚』（同上）、『白夜』（同上）、『ニェートチカ・ニェズワーノワ』（一八四九年）、それから十年間の長い强ゐられた沈默の後に、『伯父の夢』（一八五九年）、『ステパンチコウォ村とその住民』、有名な『虐げられ踏みつけられた人々』（一八六一年）、最後に『死の家の記錄』（一八六一——六二年）を發表してゐる。これらはレフ・トルストイが、ロシヤ文學上の他の凡ゆる作品よりも高く評價したところのものである。社會問題に熱中した此の第一期に於けるドストエーフスキイの作中人物、卽ち貧しき人々、虐げられた人々、踏みつけられた人々、見捨てられた不幸な人々、罪人などは凡て、社會的不公正の犧牲者である。薄暗い隅、屋

根裏、穴倉、債務勞役場、死の家、これが犧牲者たちの住む世界である。

一八四九年四月のペトラシェーフスキイ事件による檢擧、同年十二月二十二日のペテルブルグのセミョーノフスキイ練兵場に於ける死刑の宣告、オムスク監獄に於ける徒刑（一八五〇——五四年）、セミパラチンスクに於ける軍隊勤務（五四——五九年）——この時期は、ドストエーフスキイを第一期から區別してゐる。

一八五五年には既に彼は、ニコライ一世の死を弔つた詩を書いてゐる。ニコライ一世と云へば、フーリエの社會主義的理想の平和な宣傳者たち（その中には詩人プレシチェーエフもドストエーフスキイ自身もゐた）を危ふく銃殺しようとした皇帝である。同じ年にドストエーフスキイは『アレクサンドル二世の卽位』と云ふ詩を書いてゐる。一八五九年に、十年間の不在の後、斷頭臺や死の家や兵營生活の後に彼がペテルブルグへ歸つて來たのは、あだかも長いあいだ死の支配下にあつたエリアザルの復活にも似たものであつた。

此の疑ひ深い人、葬列を見たのみで卒倒し、寢に就きながら昏睡の場合を見越して豫め死後への言葉を殘した此の疑ひ深い人は、實生活からもぎ離れて、足場を失ひ、現實との關係を失つて、終に宗教に歸依した。彼は死に就いて、破滅に就いて、最期に就いて、失つたところの總てに就いての思想を經て、終に十字架に到達した。

ポチンコーフスカヤは、ペトラシェーフスキイ會員がどのやうな風にセミョーノフスキイ練兵場に引き出されたか？　彼等はどのやうにして斷頭臺にかけられたか？　また彼等の頭上で死刑宣告が朗讀された模樣如何？と云ふことに就いての、ドストエーフスキイの話しを追憶してゐる。それには彼が要塞監獄に收容されてから、兄弟よりの手紙を受け取つたことども、彼の心に精神的更生が初つた顚末などを物語つてゐる。彼は顏に神祕的な喜びの色を浮べながら、その場でポチンコーフスカヤに自分の最も好きなオガリョフの詩を低聲に朗讀した。それは次のやうな詩である。

わたしは古いバイブルで占つた、
そしてたゞ吐息をついて熱望した、
生も悲哀も豫言者の死も
運命の命ずるまゝに私の上にあれかしと。

ドストエーフスキイは要塞監獄に入監中、おそろしい死刑の日を待ちながら兄弟への手紙にかう書いてゐる、「作品を創造した頭、高尙な藝術生活を營んだ頭、高尙な精神の要求と馴染んだ頭、その頭はもはや私の肩から飛び去つた」と。

彼は已が死を體驗しなかつたであらうか？

『死の家の記錄』の作者たる彼は、その徒刑場を、そこに生きながら葬らるべき墳墓の地と見なかつたであらうか？

彼は境界線の彼方をのぞいた。そして最後の境界を踏越えた。彼は偉大なる孤獨と、偉大なる絶望の瞬間を體驗した。トボリスクで或る十二月黨員（デカブリスト）の妻君から贈られた聖書は、徒刑場に於ける彼の唯一の讀みものであつた。それは、恰もラスコリニコフにラザルの復活の章を讀み聞かせたソーニャ・マルメラードワの場合と同じく溺れゆく者の最後の希望であつた。斷頭臺では死に直面し、徒刑場では二百五十人の野獸化した人々、囚人番號を附けられた人々を目のあたりに見つゝ、ドストエーフスキイは、『白痴』のムイシュキン公爵が死刑囚の最後を述べる話にあれ程はつきりと描き出したことを、自ら體驗したのである。ムイシュキン公爵は次のやうに云つてゐる。

「先づ斷頭臺をこんな風（ふう）に想像なさい。つまり最後の階段だけが間近かに、はつきりと見えるやうに、さうしてひとりの死刑囚がその階段に登つたとお考へなさい。頭と紙のやうに蒼白い顏、……やがて牧師が十字架を差し出すと、死刑囚はむさぼるやうにその眞つ蒼な唇を延して接吻します。それから彼はあたりを見廻して、一切のことを知ります。十字架と頭、これがこの光景の中心です。それから牧師の顏、死刑執行吏の顏、彼の二人の助手の顏、そして下からは若干の頭と目――それ等は補足としてずつと奥の方に、霧の中にぼかすやうにして描いても宜しいです……。さ、これは一體何といふ光景でせう。」（『白痴』五章）

死を宣告されたものゝ最後の階段、十字架と頭――これは徒刑を終へた後のドストエーフスキイの藝術の象徴である。つまり惱み拔いて、死人のやうに蒼白くなつて、絶望した人が、最後の隱家たる十字架にそのまつ蒼な唇を延した時の藝術の意義を示現するところの象徴（シンボル）である。

九

徒刑から歸つた最初の幾年かは、以前の友人たちはもはやドストエーフスキイを見分けることが出來なかつたほどである。けれども精神的轉機はまだ完成されてゐなかつた。まだドストエーフスキイには自覺されてゐなかつた。一八六四年に二人の近親者が續けざまに死んだ。すなはちこの年の四月十六日には彼の最初の妻エムム・ドストエーフスカヤ（イサエワ）が逝き、六月十日には彼の兄ミハイル・ミハイロウィチが亡くなつた。ドストエーフスキイは、この兄と生前苦樂を共にし、一八六一年には雜誌『時代（グレーミヤ）』をふたりで發行し、一八六四年には雜誌『時代（エポーハ）』を發行したのであつた。

「私は突然ひとり取り殘された。そして私はたゞもう恐ろしくなつた。私の一生はまつぷたつに割かれてしまつた、」と彼は訴へてゐる。兄の死後、その債權者の毒牙にかゝつたドストエーフスキイは、文字通り絶望狀態にあつた。「運命は私を押しつぶした……。またシベリアへなりと」……と、彼はおそろしい數行を列ねてゐる……。癲癇の發作は屢々くり返された……。一八六四年にドストエーフスキイは、『地下室手記』を書いてゐる。これは作者が「わが懺悔」と名づけようと思つたほどの戰慄すべき記錄である。これは人間と人類との運命に絶望した人の告白であつた。そこには最後の階段があつた。そこには、死に運命づけられた人の頭があつた。だがまだ十字架はなかつた。併し『罪と罰』（一八六六年）にはもはや十字架が存在してゐた。ラスコリニコフはまだそれを認めてはゐなかつたが。

一八六七年から七一年に亘る外國滯在は、自分の氣持を組織づけ意識づけることに於いて、自己を發見し精神的に更新する上に於いてドストエーフスキイに役立つた。この更新に就て、この總勘定に就いては既に一八六七年ア・マイコフへの手紙に書いてゐる。「高貴なる死人が横つてゐるヨーロッパ」に於いて、彼はロシヤの使命に就いて、將來のヨーロッパに就いての思想を最後まで考へつゞけてゐる。一生のあひだ神から苦められたドストエーフスキイは、ヨーロッパに於いて神への辨明を見出してゐる。イワン・カラマーゾフが欲求したところのあの攝理論を見出してゐる。一八六七年には彼の頭に五篇から成る大叙事詩的小說『無神論』の構想が浮んでゐる。此の叙事詩の中心に、彼は、神への信仰を失つた四十五歲の中年の男を立てようと考へてゐる。この男は新しい時代の青年や無神論者やスラヴ人やヨーロッパ人、ロシヤの迷信家や修道士、牧師たちの間を嗅ぎ廻つてゐる。そのうちに、エズイット派の傳道者たるポーランド人の奸計に陷つて了ふのであるが、やがてその手から離れて異端の深みに墜落し、最後にクリストとロシヤ國土、ロシヤのクリストとロシヤの神とを見出してゐる。

ロシヤ人が最後の十年の間にその精神的發達の上で體驗したところの一切を物語らうと云ふ考へが、ドストエーフスキイを强く捉へてゐる。この小說の第一編に於いて、彼は、主人公の幼年時代を描き、第二編に於いて修道院とその院長ザドンのティーホンとを描かうとした。作の中心には刑事上の罪を犯した十三歲の少年の姿が目論まれてゐる。我々の目の前で成長した此の少年の一生の物語りは、『大罪人の生活』でなければならなかつた。ドストエーフスキイの全藝術と彼の全生涯の總決算でなければならなかつた。つひに書かれなかつた此の小說のプランは、今日ブロードスキイ、グロスマン、コマーロヴィチの諸教授によつて發表されたものであるが、この小說

の代りにドストエーフスキイはその大きな意匠を分割して、『悪靈』（一八七一年）と『未成年』（一八七五年）および『カラマーゾフ兄弟』（一八七九年――八〇年）を書いてゐる。

十

一八七一年にはフランスに於いてコムミューンが沒落し、ロシヤに於いては虚無黨ニェチャーエフの結社によつて大學生イワーノフが殺害された所謂ニェチャーエフ事件なるものがあつた。このニェチャーエフなる男は、「革命のためには一切のことが許される」と信じ、ロシヤの革命運動は無神論の旗幟の下にあることを信じてゐた。すべてこれらの事件が再びドストエーフスキイの前に、革命に就いて、社會主義に就いての問題を提出したのである。だが今はドストエーフスキイには、ヨーロッパと若きロシヤとがその最後の段階に、その偉大なる破滅に近づいてゐるやうに思はれた。彼は痙攣的に十字架を差し出してゐる。彼は來らんとする新しい嵐に直面しつゝ、一八七三年から七六年に亘つて彼の『日記』を書いてゐる。自分の手記と備忘錄と小說とを書いてゐる。そしてどこを向ひても彼には、最後の段階と十字架と死に運命づけられた者の頭とが見える。

立場を失ひ、絶望して精神的地下室へ去つたドストエーフスキイは、その生涯の最後の十五年間に國粹派（ポチウエンニク）となり、民族主義者となり、ビザンチン主義者となつた。彼は虚無主義に對して十字軍を起してゐる。嘗てベリンスキイの弟子であつた彼は、今ではベリンスキイを呪つてゐる。一八七一年ストラーホフへの手紙に於いて彼は、ベリンスキイを「ロシヤ社會の恥づべきけがらはしい現象」と呼びなしてゐる。彼は政治的にはメシチェールスキイやパベドノスツェフに接近し、哲學的にはアポルロン・グリゴーリエフ、ストラーホフ、レオンチエフ、ヴラヂーミル・ソロヴィヨフ等と歩調を共にしてゐる。當時まだ若い哲學者であつたソロヴィヨフの神祕主義は、ますます強くドストエーフスキイを捉へてゐる。ストラーホフは、ドストエーフスキイに就いての回想錄の中に次のやうに書いてゐる。

「一八七九年の六月、ドストエーフスキイはソロヴィヨフと一緒にオプチナ修道院（トルストイが最後の家出のとき訪れたのもこの修道院である＝譯者）を訪れ、そこに二人は殆んど一週間ばかりも滯在した。この訪問の反映を讀者は『カラマーゾフ兄弟』のうちに見出すであらう。すでに一八七八年にドストエーフスキイは屢々、ソロヴィヨフと宗教的問題をテーマとして談話を交してゐる。ドストエーフスキイは宗教的世界觀とロシヤ國民のクリスト教的傳統とを、非國民的非國粹的虚無主義者や、ナポレオンたらむと空想してゐる超人達、ラスコリニコフ、ピョートル・ヴェルホヴェンスキイ、スタヴローギン、キリーロフ、イワン・カラマーゾフなどに對立させてゐる。「神

はない、故に一切は許される」と云ふ公式は、ドストエーフスキイの考へでは無神論者から成長したものである。ピョートル・ヴェルホヴェンスキイの無神論からは、徒刑囚のフェーヂカが成長し、イワン・カラマーゾフの無神論からは、民衆の屑であり廢人であるスメルジャーコフが成長した。ドストエーフスキイは容赦なき殘忍さをもつて『未成年』の中でウェルシーロフを描いてゐるが、この男の魂は永久の否定によつて荒んでゐる。このロシヤのヨーロッパ人（ウェルシーロフのこと＝譯者）はシュペングラーの言葉で語つてゐる。一九二〇年から二一年にかけて流行した此の哲學者よりも遙か以前に、ウェルシーロフは「ヨーロッパ諸民族の最後の夕陽」を豫知してゐた。そして「ヨーロッパの空に響く埋葬の鐘の音」を敏感に聞きつけてゐた。（『未成年』）

同じくドストエーフスキイは異常な力をもつて、フリードリヒ・ニーチェの先驅者の姿を想像してゐる。それは、神に反抗して自ら神とならんが爲めに自殺したところのキリーロフ（『悪靈』）である。すべてこれらの非國粹派や無神論者に對して、ドストエーフスキイは、手に聖書を持つたソーニャ・マルメラードワ（『罪と罰』）、修道院を巡禮しつゝあるマカール・イワーノヴィチ（『未成年』）、無神論を否認したシャートフ（『悪靈』）、それからザドンのティーホンとオプチナのアムヴローシイ（ドストエーフスキイがソロヴィヨフと一緒に訪れたオプチナ修道院の長老）とを一身に具現したやうなゾシマ長老を對立せしめてゐる。またこれらの非國粹派や虚無主義者やその門弟たち（たとへばスメルジャーコフの如き）に對するにドストエーフスキイは、信神家の老婆をもつてし、「奇蹟とパンと權威」の公式を振りかざす大審問者に對するに、すべてを赦す溫順なクリストをもつてしてゐる。

十一

一八八〇年の六月八日のプーシキン記念祭に於けるドストエーフスキイの講演は、新らしい氣分の片影であつた。その講演に於いて、彼は知識階級の漂泊者たちに「傲慢なる人よ、神妙になれ！」と云ふ恐ろしい言葉をもつて呼びかけてゐる。この藝術家はその宗教的テーマの中に、中世紀の宗教家に見る法悦と恍惚感とを取り入れ、自分の祖先から受けついだ何ものかを取り入れてゐる。

彼の娘エル・ドストエーフスカヤは、上述の書に於いて、ドストエーフスキイの民族的出生の獨特さを暗示したが、更に最近に至り（一九二三年發行『文學思想』第一號）リュビーモフの興味ある論說『エフ・ドストエーフスキイ』（彼の出生に就いての問題）が發表された。この論文に於いて、ドストエーフスキイの父は僧侶階級の出身でボドリスクの神學校を卒業し、その後陸軍醫

科大學に入學したことが記されてゐる。リュビーモフの假定に依れば、エム・ドストエーフスキイ（文豪の父）の鄕里は、一七九五年すなはち彼が六歳の時に、ロシヤに併合されたポドリスク縣であつた。ポドリアの全住民はロシヤに併合された當時は、ウニア派（ローマン・カトリック敎とギリシャ正敎とを合同しようとした一派）の敎義を信じてゐた。エム・ドストエーフスキイが元々その仲間であつたウニア派の僧侶たちは、ポーランドのもしくはポーランド化された地主と小ロシヤの農民との中間を占めて、むしろ前者と近く接觸してゐた。

リュビーモフはドストエーフスキイが南ロシヤの出身であることは疑ひなきものと考へてゐる。その祖先の生涯は、信仰と民族性のための精神的および物質的戰ひのうちに過されてゐる。十六世紀から十八世紀に至る西南ロシヤの歷史に關する文書を深く熱心に研究したら、或る系圖によつてドストエーフスキイ家の樣々な代表者たちの生活と活動との多少完全な鳥瞰圖を與へることが出來るであらう。このドストエーフスキイの祖先は、長い年月に亘つて自己の宗敎と民族性とを保持することが出來たのであるが、後に至つて宗敎的妥協を餘儀なくせられ、疑ひなきポーランド化によつて從來の同族との鞏固な關係を失つたものである。

ドストエーフスキイの南ロシヤ出身、全然失はれてはゐないが早く打ち消された彼の民族的特質と同感、彼の代々の祖先が世襲的におこなつて來た正敎のための倦まざる戰ひ、ロシヤの西南地方で幾世紀かの間相互的鬪爭にあつた西方ラテン文化と東方正敎文化との混融せる影響――これらは恐らく、偉大なる作家の深い多角的な活動の或る方面を解釋し說明する上に役立つであらう。（前揭『文學思想』）

十二

もし前期に於いて社會小說の創造者が飢餓と窮迫との間にあつて社會的不公正に關する呪ふべき問題と社會的改造に就いての夢想とに到達したとすれば、第二期に於いては、死の恐れと徒刑囚の間に伍しての陰欝な孤獨と新しい革命的時代への恐怖とを體驗しつゝ、ドストエーフスキイは、革命と無神論と虛無主義と社會主義との熱烈なる否定に到達したと謂はれよう。死の掌中にあつたエリアザルであり、地下室の大罪人である彼は、過去および將來の革命を呪ひ、凡ゆる階級の革命家を呪つてゐる。何故なら、それらの革命家たちは、宗敎を一掃しつゝ、物質的、經濟的關係の領域に於いて革命を實現しようとしたからである。それ故に彼等はすべてドストエーフスキイの考へによれば、非國粹派であり、またいづれも破滅に運命づけられてゐた。

小說『惡靈』の材料の中で農奴の息子であるシャートフは、十二月黨員（デカブリスト）の貴公子チャーツキイの

限りなき苦惱を嘲弄してゐる。彼はチャーツキイに就いてから云つた、「あいつは貴族で地主だつたのだ。あいつにはその結社のほかに何ものもなかつた。だからあいつはモスクワの上流社會に失望してゐる。まるで此の生活のほかにはロシヤに何もないかのやうに。あいつはすべて我國の進歩的な人たちのお多分に洩れずロシヤの國民を見そこなつたのだ。だからあいつにはロシヤの制度への呪ひでなく、ロシヤ國民に對する呪ひが強いのだ。ロシヤの國民や、その信仰や、その歴史や風習や價値や、またロシヤ國民のた大なる人口のことを、あいつは單に年貢の臺帳か何かに就いてのやうに考へてゐやがる。やはり十二月黨員（デカブリスト）も詩人も教授たちも、アレキサンドル二世（農奴解放をおこなつた皇帝＝譯者）以前の改革者もみな同じやうに考へてゐたのだ。あいつはパリーで暮すために、そしてクーゼンの說を拜聽してチャアダーエフ流か、でなければカガーリン流のカトリック主義で終るために、年貢を重課したのだ…」。同じシャートフは斯うも云つてゐる、「私は賭けをしてもいゝが、十二月黨員（デカブリスト）は、きつと直ぐにもロシヤの國民を解放するであらう。だが、それは土地なしの解放だ。その爲め國民はきつとすぐに彼等の首をひねるだらう。そしてそのことによつて、ロシヤを更生させてゐるのはひとりモスクワの社會ばかりでないことを、彼等に證明してびつくりさせるだらう。」

ドストエーフスキイは一八四〇年代の人々に對しても、これに劣らず容赦しなかつた。たとへ父ヴェルホヴェンスキイに於てはグラノーフスキイを、カルマージノフに於いてはツルゲーニェフを、（ふたりとも『惡靈』中の人物）遠慮なしに嘲笑してゐる。我々は『惡靈』の中で四〇年代の人に就いて書いた次の一節を見出す、「何ぴとも自分が知らぬものを愛することは出來ない。ところが彼等はロシヤの國民に就いて何ごとも知らなかつた。彼等は、また彼等とともに貴方も、ロシヤ國民を見そこなつたのだ。特にベリンスキイに至つては、もう云はずとも彼がゴーゴリへ宛てた手紙でも分る」と。こゝでシャートフが云つてゐるベリンスキイの手紙は、一八四九年にペトラシェーフスキイ結社の會合の席上で、ベリンスキイの弟子であつたドストエーフスキイ自身、非常な神經的な興奮をもつて朗讀した手紙である。更に六〇年代の無遠慮な否定者の虛無主義者に對しては、もつと强い憎惡の情をもつて攻擊してゐる。ドストエーフスキイは彼等のうちに前代の子供たちを見てゐるのである。すなはち『惡靈』の中のステパン・トロフィーモヴィチ・ヴェルホヴェンスキイはグラノーフスキイのことであり、その息子（むすこ）のピョートル・ウェルホヴェンスキイはニェチャーエフのことである。

ピョートル・ウェルホヴェンスキイ、イワン・カラマーゾフ、ラスコーリニコフは、唯物主義の毒

蟲によつて害はれ、彼等のうちにはロシヤの肉體を散々に引き裂いてゐる惡靈が住んでゐた。ドストエーフスキイは、虛無主義者バザロフ（ツルゲーニエフ作『父と子』の主人公）に於いて「ノズドリョフとバイロンとの合ひの子」を見てゐる……雜階級革命家はやはり貴族革命家と同じく非國粹的である。

ドストエーフスキイは西歐に於ける第四階級の代表者たちにも少なからぬ憎惡の念をもつて對してゐる。一八七一年パリ・コムミューンのことに就いて、ドレスデンからストラーホフに送つた手紙の中で、彼は宗教の問題を看過したコムミューンの破滅に關して意地惡く喜んでゐる……彼はコムミューンの破滅の後も度々豫言して、「第四階級は近づいて、しきりに扉を叩いてゐる。もし開けなければ扉を壞すだらう」とか、「誰も考へ及ばないやうなことが間近に迫つてゐる」とか、彼は不安のうちに叫んでゐる。

ドストエーフスキイは死の數ケ月前、一八八〇年十月二十八日附の『ノーヴォエ・ヴレーミャ』に於いて、フランスに於ける社會主義運動に就いてのユブネルの記事を讀んで自分の備忘錄にかう記してゐる、「世界の終りが來た。世紀の終りは、まだ嘗てなかつたやうな戰慄をもつて現れるだらう。ロシヤはそれに準備しなければならぬ。動かずにじつと眺めて待たなければならぬ。ただロシヤを同盟に引つぱり込まないやうに願ひたい。あゝ考へても恐ろしい！　さうなるとロシヤの最後だ！　全く最後だ！　我邦には社會主義はない。全くない。たゞ「ピョートルの巢」から出た若干の雛鳥だけがゐる。だがロシヤの健全な分子は動かないであらう。しかもこの分子は無數である。』

世の終り、ロシヤの最後、最後の始まり、に就いてのドストエーフスキイの陰鬱なる豫言には、西歐の運動に對する恐怖、ロシヤの運動に對する恐怖、新しい生活樣式の創造に對する恐怖、沈滯とビザンチン的忍從の哲學とがみなぎつてゐる。ドストエーフスキイの書いた凡ての作品には、恐ろしい幻影のやうに又くるしい惡夢のやうに例の情景が浮んでゐる――。最後の階段……十字架……そして死に運命づけられたものゝ頭が。

十三

ビザンチン的藝術家の最も好きな態度は、殘忍な否定者と虛無主義的革命家を最後の階段に導いて、彼等をして「一切は許される」と云ふ公式の完全な破滅を體驗せしめることである。かくしてドストエーフスキイは、ラスコーリニコフ、イワン・カラマーゾフ、シャートフ、スタヴローギン、ウェルシーロフなどを、完全な破滅に導いてゐる。また彼はその小說の中で、ベリンスキイやチェルヌィシェーフスキイや、ドブロリューボフの如き無神論者たちの事業を完全な破滅に導かう

としてゐる。彼はこれらの否定者が最高の實踐的理想主義の人々であつたことを見なかつた。もつと適切に云へば、見ようとしなかつた。ドストエーフスキイ自身はその宗教的肯定と共に、彼等の理想主義にまで到達することが出來なかつた。

先生よ、あなたの名に對して
恭々しく膝を屈することを許し給へ！

このやうにネクラーソフはベリンスキイのことを書いた。ツルゲーニェフも亦その回想錄の中でベリンスキイに就いて同樣のことを書いてゐる。

まだ今のところ人々は彼を十字架に釘づけなかつた、
だが時は來る……彼は十字架に上るだらう……
地上の諸王にクリストのことを記憶せしむべく、
怒りと悲哀の神は彼を遣はした。

斯樣にネクラーソフはチェルヌィシェーフスキイのことを、ロシヤ文學とロシヤ社會性の此の偉大なる苦行者のことを歌つた。彼等はいづれも「神は存在しない」ことを肯定した。だがこれらの献身的な社會人は、この否定から「故に一切は許される」と云ふ斷案までは極めて遠いと云ふことを知つてゐた。この斷案に到達したのはスメルジャーコフばかりでなく、ドストエーフスキイ自身も然うだ。人類の集團から小部屋の哲學に逃れた『死の家』のゴリャンチコフにも比すべき極端な個人主義者であり、孤獨者であるドストエーフスキイ自身も、この斷案に到達してゐる。彼は、犯罪を抑制してゐる神への恐怖のほかに、社會的集團とつながつた深い有機的感情のあると云ふこと、人々との結合の意識は、ヒロイツクな愛他主義と義務の遂行とに滿ちた高尙な性格を創造するものであると云ふことを忘れてゐた。彼は革命家のうちからニェチャーエフを選んでゐるが、このニェチャーエフの行動は革命的民情派（ナロードニク）の著名な代表者側から激しい反抗を招いたものである。ドストエーフスキイはレフ・トルストイがウェイマールやソフィヤ・バルヂーナやウェーラ・フィグネルなどと同じく、その姿を永久に傳へたところのリゾグーブのやうな明るい人格の傍を素通りしてゐる。彼はまたグレーブ・ウスペンスキイが書いてゐるところの、「嚴格な修道女の面影」をもつた少女の傍を素通りしてゐる。溫和なクリストの名に於いて、クリスト教的道德の名に於いて革命家を札附にした藝術家は、自分の同志であるストラーホフを事々に全く非クリスト教徒的行動によつてひどく憤激せしめてゐる。「眞實な善の動き、本當の心からなる溫情の火花は勿論、本當の悔悟の瞬間でさへも、一切を和げることが出來る。もし私が何かそのやうなものをドスト

エーフスキイに於いて見たならば、私は彼を赦し彼のことを喜んだであらう。だが單なる上品な人間への見せかけ、單なる頭だけの文學的人道主義――おゝ、これは何といやなことよ！」斯樣に哲學者ストラーホフは自分の友人のことを一八八三年レフ・トルストイに送つた手紙に書いてゐる。ドストエーフスキイは、神を見出し神の實在を證明し、そして攝理論にまで到達した。が、併し彼は、人々から全く孤立した人間として、自分自身の病的な體驗につながれた人間として殘つた。死の恐怖と革命に對する恐怖とは、ドストエーフスキイを因循と柔順の說敎に、運動の否定に導いた。この說敎は、彼の藝術作品の根本特質たる力學性（ダイナミーズム）、彼の嵐のやうな熱烈なばく進的な作中人物と全く矛盾するものであつた。ロシヤ藝術家の何びとも、このビザンチン人（ドストエーフスキイ）のやうに革命的な無神論的な思想に取つての材料と衝擊とを與へたものはなかつた。

十四

ドストエーフスキイの藝術を二期に分つことは幾分人爲的である。これを最後まで引つぱつて行くことはできない。第一期に於いても彼は宗敎問題を提出してゐる。なぜならこの「神の受難者」は、たゞ此の問題に立ち還つたからである。それと同じく第二期に於いても、彼の前には社會組織の呪ふべき矛盾がはつきりと鮮かに現れてゐる。彼は依然として都會の藝術家である。彼は凡ての毒素と人間精神を腐蝕する否定とを持つた現代都會の地獄を通つて、自己の宗敎的肯定に到達した。マカール・デーヴシュキン、ゴリャードキン、ポルズンコフ、プロハルチン、オルドゥイニンを初め、ラスコーリニコフ、イワン・カラマーゾフ、ウェルシーロフ、キリーロフ、シャートフに至るまで各主要人物に於いて、我々は「知識階級のプロレタリヤ」の病的神經質的體驗を透して都會精神を感得する。三十五年間に亘る彼の藝術には、一つの特質がはつきりと區別される。この特質は既にストラーホフもチェシーヒン・ウェトリンスキイも、その他の人も認めて居り、ペレヴェルゼフも輝かしい說明を與へてゐる。ドストエーフスキイのすべての作中人物には、遺傳的黑痣（あざ）のやうに、彼等の精神的分裂すなはち二重性が我々の目を打つのである。第一期に於いても第二期に於ても、我々を驚かすのは、各作中人物の二重性格、彼等の內面的二重性と矛盾性とである。

小說『二重人格』は打ちひしがれた小役人で位階持ちの或る相談役のことを書いたものであるが、この人物の精神には大ゴリャドキンと小ゴリャドキン、謙遜なる者と橫暴なものと二人の人間が住み込んで鬪つてゐる。一八四六年に書かれた此の小說は、その後の凡ての作品に對する序曲のやうなものである。內面的二重性と精神的分裂の爲めに惱まされ、また不調和に滿ちた體驗と

氣分と行爲とイデオロギー的構成とのためにひどく打碎かれた個性――これがそれ自身、精神的衰退と荒廢の藝術家たるドストエーフスキイのヒーローである。ペレヴェルゼフがその著『ドストエーフスキイの藝術』（一九二二年に改訂版發行）の中でこの『二重人格』の謎のやうな人物をドストエーフスキイの全藝術の首頭に立てたと云ふことは正しい。『二重人格』はこの藝術家に取つて特色的なペテルブルグの片隅の住者である小役人を描いたもので、この人物の心には前にも記した如く、全く反對な二つの魂が住み込んで互ひに戰つてゐる。それは小ゴリャドキンの傲慢な横暴な心と、大ゴリャドキンの謙遜な溫順な心とである。打ちひしがれた人間の二つの魂の不調和は、個性の全き破滅と發狂とに導ひた。ドストエーフスキイは二重人格者ゴリャドキンの產みの親であり、ゴリャドキンはラスコーリニコフの親であり、スタウローギンはイワン・カラマーゾフとその兄弟との親である。凡て彼等は、二重人格者であり、その精神的父親（ドストエーフスキイのこと＝譯者）の本當の子である。

ラスコーリニコフは、自分がナポレオンであるか蚤であるか、そのいづれであるかを決することが出來ない。ウェルシーロフの息子の未成年は、或る時はロスチャイルドたらむことを夢想し、或る時は自分のプロレタリヤ的資格を主張してゐる。イワン・カラマーゾフの體驗に於いては、彼が、彼の心の別な人格を象つてゐる惡魔と話しをする時の彼の錯覺のうちに、驚くべき力をもつてその二重性が現れてゐる。同じやうな二重性を未成年者の父のヒステリックなウェルシーロフも深刻に體驗してゐる。神經發作の瞬間に鎭靜具を彼に被せたとき、彼は結婚式の際に彼を祝福した聖像をつかんで眞つ二つに割つた。彼は凡ての人の爲め、また自分のために、やはり二つに裂かれた自分の精神的人格の象徵的な像を與へた。完全な破滅にまで移つて行つた此の分裂、この兩極性を、ドストエーフスキイは更にイワン王子とグリーシュカ・アツレーピエフ（プーシキン作『ボリス・ゴドゥノフ』の中の一人物、王子と伴つて終に王位に登る＝譯者）とを一緒に織り込んだやうなスタウローギンの永久忘れがたい性格のうちに特殊の力をもつて描寫した。この分裂をスタウローギン自身くるしく感じてゐるが、レビャードキン大尉の姉妹である彼の半狂亂の妻も、この分裂を敏感に洞察してゐる。一九二一年から二二年に初めて發表された『スタウローギンの告白』は、人間的破滅の驚くべき記錄である。スタウローギンの生活には、泥棒の巢窟と修道院とが、偉業への衝動と十歲の少女の誘惑とが絡み合つてゐる。この少女をその母がスタウローギンの目の前で打擲する。彼はそれが理由なしに打擲されてゐることを知つて居り、またこの體刑を阻止することが出來るのに彼はそれを欲しない。體刑のあとでスタウローギンは、この不幸な

少女を凌辱するが、彼は、凌辱のあとで少女が自殺することを知つてゐながら、少しもそれを阻止しようともしない。ピョートル・ウェルホヴェンスキイもスタウローギンの名によつて行動し、徒刑囚のフェーデカも彼のためにレビャードキナを殺害してゐる。心の一面は、すべての醜惡、すべての罪惡に深く憤激してゐるが、他の一面は、殺人者に手をのばしてゐる。サデ/ズム的の暴虐、性的不能、そして最後に自殺、痛みを感じないやうに豫め石鹸を塗つた繩で首をくゝつたスタウローギンの厭ふべき自殺――これがこの恐ろしい分裂の結果である。

十五

二重性と矛盾とは、ドストエーフスキイの作中人物のイデオロギーの上にも刻印を捺してゐる。それらの人物はすべて、その見解の異常な廣さと不安定とに惱んでゐる。この廣さと不安定から、無拘束なミイーチャ・カラマーゾフと絶えず動搖してゐるシャートフとが成長した。イワン・カラマーゾフが教會裁判に就いての論文を書いた時、それは教會人にも無神論者にも等しく氣に入つた。

すべてこれらの人物は、精神的不調和と分裂との代表者であり、またプシブイシェーフスキイやアンドレーエフやソログーブの藝術に於ける頽廢者の輝かしい先驅者である。彼等はその素晴らしい辯證法に於いて、全然反對な解決への論證を展開してゐる。

彼等に於いて「思想」は試合刀でもあり、蛇でもある。彼等は何れを力强く論證してゐるか、神の實在か又は無神論か、革命の否定か、それともその肯定か、容易に斷言できない。すべてこれらの殉教者と受難者は、ある時は從順であり或る時は謀叛し、或る時は謀叛人であり或る時は臆病な造物であり、或る時は横暴なるナポレオンである。彼等は、女性に對する關係に於いてもサディズムとマゾヒズムとの要素を持つたその發作的な戀愛に於いて、その根本的特質が驚くほど類似してゐる。ちようどグルーシェンカ（『カラマーゾフ兄弟』）とナスターシヤ・フィリッポヴナ（『白痴』）との特質の類似が我々を驚かすやうに。病的な殘忍性、神經質的な昂奮、ヒステリー、デカダン性、發作、狂氣――これがドストエーフスキイの出資によつてその二重人格者のために造られた貧民病院の孤立した陰鬱な住者たちの死亡診斷書である。

精神的分裂と二重性格の同じやうな特質を、ドストエーフスキイは自身のうちにも感じてゐた。さればこそ內面的不調和のために苦しみ、常に圓滿な調和を空想した。そして自分の讀者に向つて、「君は僕によつて救はれることを欲するのか」と問ふことの出來るプーシキンの調和せる性格を崇拜した。自己の二重性を訴へた某婦人への手紙（一八八〇年）の中で、『二重人格』の作者は

答へてゐる。「……それですから貴女は、私に取つては親身の方です。と申しますのは、全生涯わたしの内にあつた二重性が貴女のうちにもあるからです。これは大きな苦痛ですが、同時にまた大きな歡樂です。」

この歡樂の苦痛を、陰鬱なそして孤獨なドストエーフスキイは、既にトゥーシャルの寄宿學校に於いて、まだ未成年時代の陸軍技術學校に於て、それから青年時代に於いても體驗してゐる。

十六

この分裂と精神的矛盾から、人および藝術家としてのドストエーフスキイに對する評價の上にも矛盾が起つてゐる。彼の友人も敵も、彼の博大な精神のうちにソドムの罪惡とマドンナの面影とを見た。

一八八一年二月十四日、ペテルブルグのスラヴ慈善協會でストラーホフは、友人ドストエーフスキイに就いての追憶に於いて、敬虔な心持で次のやうに云つてゐる、「彼はその顏の表情と言葉とに於いて、柔和な明るい修道士に似た瞬間があつた。さうだ、彼はクリスト教徒であつた。彼は先づ第一に希求しなければならない理想を知つてゐた」と。ところがそれから二年たつた一八八三年に同じストラーホフは、レフ・トルストイへの恐ろしい手紙に於いてドストエーフスキイをスウィードリガイロフやスタウローギンや『地下室手記』の主人公と同じやうに取り扱つて、彼がクリスト教徒たることを完全に決定的に否定し、彼を殘忍な不道德な利己主義的な人間として描いてゐる。この手紙は一九一二年の『現代社會』誌上でストラーホフとトルストイとの交信錄中に發表されたものである。アンナ・ドストエーフスカヤは此の手紙を讀んで立腹し、ストラーホフが傳へた事實を否定してゐるが、我々は別にこれらの事實をこゝに引用すまい。問題の主眼は彼の親友と戰友とがドストエーフスキイに對する關係に就いての事柄である。ストラーホフはトルストイに對して、ドストエーフスキイの傳記を書きながら彼の心に高まつて來る嫌惡の情と如何に戰つたかを告白してゐる。「とても和解の點を見出すことが出來ない」とか、又は「明朗でなければならない苦のドストエーフスキイに就いての追憶が、たゞ彼を重壓するばかりなので泣きたくなる」とか訴へてゐる。この和解の點を見出すことが不可能なことは、他の人々も同じく痛感してゐるところである。レフ・トルストイは、ある時は彼を「悍馬」と名づけた。

以上に評價したが、ある時は彼を「悍馬」と名づけた。

「ロシヤ人は博大であるが、私は縮まるだらう」とドストエーフスキイは誰かの事を云つたが、これは彼自身にも全く當てはまる。クリスト教的博愛と寛大とに就いての彼の說教のうちには、

屢々熱狂的な、迷信的な、同時に冒瀆的な「人間は呪はれてゐる」といふ聲が侵入してゐる。彼がビザンチン流の正教の神に就いての表信のうちには、屢々神の實在に就いての最も無遠慮な否定が感じられる。また彼の革命に對する否定のうちには、革命の肯定と現存制度の××に對する挑戰的公憤の響きがある。たゞこの場合いつでも、『悪靈』の人物の一人がピアノを彈奏してゐる時のやうに、「マルシェリエーズ」の主調の中に「わが愛するアウグスティン」の主調が侵入してゐる。虚無主義の否定者たるドストエーフスキイその人の心にも、虚無主義者と一緒に、懺悔した虚無主義者のシャートフや、ラスコーリニコフや、イワン・カラマーゾフなどが巣喰つてゐた。

ペレヴェルゼフはその著『ドストエーフスキイの藝術』に於いて、この藝術家の二重性とその作中人物の二重性とを社會的根據に歸して、斯う言つてゐる。

「ドストエーフスキイは都會の詩人である。だが都會全體でなく都會の片隅の詩人である。そこには窮迫せる都會の小市民が住んで居り、恐るべき貧苦と殘忍な戰ひを戰つて居り、自分たちの足もとから地盤がなくなつて行くのを感じてゐる。そこには一旦落ちたら再び浮き上る望みのない都會のどん底が口を開いてゐる。このどん底と彼等との距離は僅かに一歩の差である。そこではどん底が彼等と並んで居り、その聲が聞え、その息吹きが感じられる。微々たる小役人の世界、凡ゆる種類の敗殘者の世界、彼等は既に片足をどん底に踏み込んで、絶望しつゝそこから脱け出ようともがいてゐる——これが同時にドストエーフスキイの姿である。」

こゝではドストエーフスキイの社會主義的態度が幾分か硬化されてゐる。社會の上層と下層との間に、飛躍と零落との間に永久動揺せる孤獨な知識階級のプロレタリヤの體驗を描寫したドストエーフスキイは、彼が屬してゐた社會の精神的希求と體驗とを反映した作家である。然るにペレヴェルゼフはドストエーフスキイの心理的分裂を説明するに當つて、彼の個人的特質を充分檢討しなかつたのみでなく、彼の病的傾向をも檢討しなかつた。一八六七年ドストエーフスキイはヂネヴァに出發するに際してアポルロン・マイコフへの手紙にかう書いてゐる、「君は私が如何にして、又如何なる原因で出發したかを御存じだらう。主な原因は二つある。第一は、自分の健康を救ふと共に生活をも救ふことである。癲癇の發作はもう毎週のやうに繰り返してゐる。この神經と腦髓の解頽をはつきりと感じたり意識したりすることは堪へ難いものである。實際、判斷力は解頽して了つた。これは事實だ。私はそれを感じた。神經の解頽は時々私を狂亂の狀態にまで導いた。第二の原因もしくは事情と云ふのは外でもない。私の出發に際して一切のものが既に清算されてしまつたので、債權者たちは此の上期待する何物もなかつたからだ。」

債權者のことに就いては最早充分だと思ふが、債權者よりももつと恐ろしい、もつとうるさいものは、一週に二度も繰り返された癲癇の發作であつた。こゝに云ふ「狂亂の瞬間」は、ドストエーフスキイの全藝術に刻印を捺した一つの特徴であるが、ストラーホフにはそれが解らなかつた。ストラーホフは、彼が一八八三年にレフ・トルトストイに送つた手紙にも見える如く極めて聰明な人ではあつたが、また極めて鈍感であつた。自分でも云つてゐるやうに癲癇で惱んだドストエーフスキイは、幾人かの同じ發作的なヒーローを提供した。(スメルジャーコフ、ムイシュキン、父カラマーゾフの妻の一人、『女主人』の中のムーリンその他)

一八四六年にドストエーフスキイと知り合ひになつた醫師ヤノーフスキイは、ドストエーフスキイが彼のところから醫學上の書籍を借りたこと、特に腦や神經系統の病氣について又精神病について説明した本を借りたことを語つてゐる。だが醫學の本は、發作的な病氣に就いて、癲癇病の特質に就いて何を語つたか？　チェシーヒン・ヴェトリンスキイはその著『同時代者の回想錄、書簡および日記に於けるドストエーフスキイ』(一九一二年モスクワのスイチン書肆發行)に於いて、エヌ・ポポフの普通心理學の講義のうちから癲癇病的性格の定義を引用してゐる。そこには

「長いあひだ癲癇を患つた者は、ちよつとした詰らない原因からでも極度に怒りつぽい性格になることが極めて多いことを、實際の觀察は示してゐる。この種の人々は、精神病にもひとしい程の激情の狀態に陷る。それと共に、この種の病人の氣分は、益々陰鬱に沈痛になる。彼等は周圍の人たちを敵愾心をもつて眺めるやうになる。周圍の人たちに對して驚くべき殘忍性を現はし、疑はしい人間、信用し難い人間になつて了ふ。その際彼等には、極めて屢々僞善と宗教に對する強い欲求が認められる。それらの欲求は、それ以外の特質ならびに道德の感情の遲鈍と不思議な對立を爲してゐる。通常そこには激しい動搖が認められる。最初は顯はな原因もないのに、これらの病人たちは臆病なおづ〳〵した者になり、いやな程親切になり、偶像崇拜と思はれるほど忠實な者になる。時には彼等に深刻な絶望の狀態が見られることもある。」ポポフは更に、癲癇病者の性格に於ける最も著しい特質として、「感情および智力の方面に於ける事象の非連絡性」を擧げてゐる。

この病症鑑別は、ドストエーフスキイが讀者を惱ますことを好んだとの理由で、彼を詰り、「殘忍なる天才」と云ふ評論を書いたミハイロフスキイに取つて大いに參考となるべきものであつたらう。またこの病症鑑別に就いては、幾多の論文に於いてドストエーフスキイのサディズムを暴

露したゴーリキイにもこれを記憶させる必要があつた。

ドストエーフスキイの二重性、彼の氣分、彼の評價の激しい動搖、彼の感情および智力の方面に於ける非連絡性、彼の見解の矛盾――これらは凡て、或る程度までは彼の癲癇患者としての性格によつて説明される。

十七

現代都會、その都會の社會的矛盾、社會的破局（カタストロフ）の切迫、ドストエーフスキイが屬してゐた社會的環境――これらは、その小説のための內容と樣式とを見出し、またヒーローとテーマとを發見することに於いて此の藝術家を助くることが多かつた。それ故これらの小説は、現代都會人の持つ病的な神經質的な精神に對する解剖の深さと徹底さの點で專問の心理學者や精神病理學者をさへ驚かせてゐる。實際、解頽しつゝあるデカダン的な精神をもつた「病める世紀の病める子」は、ドストエーフスキイの小説の中から我々を覗いてゐる。またデカダン象徵派がドストエーフスキイをその族長と仰いでゐるのも偶然でない。ローザノフ、メレシュコーフスキイ、ヴォルインスキイ、アンドレーエフ、アルツィバーシェフ、アンドレイ・ベールイ、ソログーブなど、みなドストエーフスキイから流れを引いてゐる。

我が國の作家にして社會評論家たる、ウスペンスキイ、コロレンコ、ゴーリキイ、ミハイロフスキイ、プレハーノフ等は、この「悍馬」（ドストエーフスキイのこと＝譯者）の藝術を好まなかつた。……反動者流は好んでドストエーフスキイの『作家の日記』や彼の『悪靈』を引用した。反動政治家パベドノスツェフの如きは、一八八一年ドストエーフスキイが死んだ翌日、エヌ・アクサーコフへの手紙に於いてこの藝術家の死を惜んだほどである。政府の要路者を代表者とした一八八〇年代の反動勢力は、好んでドストエーフスキイの民族主義とビザンチン主義とのうちに、またその悲痛と忍從の宗教のうちに、自分達の支柱を見出した。それから二十五年後の一九〇六年の社會的反動は、その當時の革命が壞滅した後に於いてドストエーフスキイの神秘主義のうちに支柱を見出さうと試みた。このことは、一九〇六年ドストエーフスキイ全集の記念發行に際してのブルガーコフの序文のうちに明かに表明された。このことは更に、ドストエーフスキイの『悪靈』や『二重人格』と血屬的關係にある雜誌『道標』（一九〇八年）に於いてヨリ明白に表明された。更に一九一七年の十月革命後に於ける知識階級的神秘主義の新しい波は、再びドストエーフスキイの『日記』と『悪靈』との中に、その氣分の證しを求めてゐる。ドストエーフスキイの誕生百年祭は、この藝術家の神秘的なビザンチン的な民族主義的な相貌を復活する試みであつた。

然し藝術家としてのドストエーフスキイは、その社會評論やその日記以上に高く屹立してゐる。彼は、社會的不公正の恐るべき光景を描いた。彼は、貧民が如何に虐げられ、踏みつけられ、搾取されてゐるかを示した。忍從の傳道者たる彼は、その輝かしい作中人物によつて、人間的資格へ、また人類同胞のための積極的な戰鬪へ、人々を呼び寄せた。民族主義者である彼は、ロシヤ人の精神に潜む全世界的同胞愛と全人類的幸福への先天的傾向を豫言的な言葉で祝福した。これはドストエーフスキイの精神の別な相貌であり、別な人格であつた。深い人類的な、深い人間的な人格であつた。虐げられ踏みつけられ打ちひしがれた現代都會の貧民たちは、ドストエーフスキイの作品に於いて、人間のための惱みと、偉大なる興奮と、火のやうな愛の力を感じた。これらの虐げられた謀叛的な民衆は、モスクワの貧民病院の近くにあるトゥルーブナヤ廣場の傍に、この虐げられ踏みつけられた人々の藝術家のために、人類的悲痛から全人類的同胞愛に呼びかけた此の藝術家のために、花崗岩の記念碑を建てた。

いつも熱烈な「眞實の火」に燃え、その際往々にして雷雨と嵐の息吹きに囚はれた偏頗なドストエーフスキイは、戰鬪最中、自分に對しても、同じ偏頗な態度を高らかに要求した。それで或る社會的集團は、彼に於いて社會的藝術家と世界同胞愛の豫言者たる全人を見、他の集團は彼に於いて神祕家と民族主義者とを認めて祝福すると云ふ狀態である。そこでゲーテの言葉が的中する。

總ての人は混沌たる悲劇の中に自己のものを見出すであらう、
各人は自分の心に荷つてゐるものを見出すであらう。

だが、混沌として錯綜せる藝術の周圍には、この混沌たる悲劇の周圍には、常に火のやうな戰ひが沸騰した。この火のやうな戰ひは、藝術家ドストエーフスキイの嵐のやうな心の中にも沸騰した。この戰ひの靈感によつてこの藝術家は悲劇的破局の時代に接近するものとなつた。ドストエーフスキイの死後二十五年祭が一九〇六年に於ける十二月叛亂の壞滅と契合し、また彼の誕生百年祭が一九二一年と契合したことは偶然でない。少々反語的に聞えるかも知れないが、ドストエーフスキイは我々と同時代の藝術家の中で最も現代的である。彼の藝術を客觀的に研究するにはまだその時期に達してゐない。ソヴェート・ロシヤは、ドストエーフスキイの道を行くべきか又は行くべからざるか、と云ふ問題の提出は、まだ餘りに傾向的であり、餘りに政論的である。だが今は嘗て以前になかつたほど豐富なる資料が蓄積されてゐる。そして此の資料は、彼の驚くべく豐富なる藝術の科學的文學史的研究のための基礎を準備してゐる。

ドストエーフスキイは、一八八一年一月二十八日、テロリスチツクな戰鬪の盛んな最中に死んだ。ちようど同年の三月一日（アレクサンドル二世が虚無黨の兇手に倒れた日＝譯者）とアレクサンドル三世の卽位から一ケ月前である。彼はウワーロフの「正敎・獨裁・國民性」の公式が一世を支配したニコライ一世の時代に文壇に現れて、同じ公式が再びアレクサンドル二世の晩年に復活した時に世を去つた。アレクサンドル三世と、彼の協同者にして師博であるペベドノスツェフとは、この有名な公式を、その凡ての力に於いて復興し、これを國家生活の「堅固なる基礎」として標榜すべき運命を擔ふ者であつた。

ドストエーフスキイの様式と方法

ウェ・ペレヴェルゼフ

一

ドストエーフスキイは、階級的農奴制の瓦解と資本主義擡頭と云ふ事情の下に、都會の小市民によつて創造された文學様式の天才的代表者である。從つてドストエーフスキイの藝術の社會的根據は、資本主義發展の事情の下に崩壞しつゝある小市民階級である。

この社會集團の特質は、ドストエーフスキイの獨特な様式のうちに刻みつけられてゐる。ドストエーフスキイの様式には、深刻な悲劇の刻印が捺されてゐるが、それはこの様式を生み出した小市民階級が、事實、悲劇的狀態にあつたからだ。資本主義の發達と共に小市民階級は二重の壓迫に陷つた。一方からは、階級的無權利の壓迫が彼等に迫つた。この壓迫は社會的に虐げられた階級に向けられたものである。他方からは資本主義的壓迫が彼等を押えつけた。この壓迫は、小市民を小ブルジョアジイに、すなはち金融資本階級の上層と都會の下層との間に浮動しつゝ、經濟

的に極めて薄弱なる集團に變じて了つた。かやうに小市民は、一方の壓迫からもぎ離れ、階級的抑壓の恥づべき束縛を放棄しつゝ、同時に他の壓迫すなはち資本主義的競爭の壓迫に陷つたのである。この壓迫は、少數の僥倖者に對しては社會的ピラミッドの上層への門戸を開放したが、多數のものはそのために社會のどん底へ押し沈められた。斯く階級的抑壓の軛（くびき）を脱するが早いか、貧苦の軛を架けられることは、全く悲劇的な狀態である。この狀態が小市民をしてもつと恥辱の少い別な出口を求むべく痙攣的に悶えしめたのである。

恥辱と抑壓と屈辱の感情は、崩壞しつゝある小市民の精神に湧き返つて、結局名譽のためのヒステリックな雪辱戰となつて爆發したが、この戰ひは、明かにその無効果なのと絶望的なために痛痛しい病理學的形態を取つて、極めてしば〳〵破局（カタストロフ）に終つてゐる。この悲劇的な破局がドストエーフスキイの凡ての藝術に、悲劇の刻印を捺して非常に沈痛慘酷なものにし、彼の天才を「殘忍な天才」にして了つたのである。

二

ドストエーフスキイの藝術を一貫する主題は、自己の人間的品位を踏みにじられた小市民の名譽のためのヒステリックな戰ひであり、この戰ひは、いつも陰慘な結末をもつて終つてゐる。彼の藝術の基調も、名譽のための病理學的戰ひの樣々な現れから構成されてゐる。そしてこの戰ひは、粗野なくだらない形態をとつてゐる。誰からも侮辱されない、ほんとうの全き人間として自己を感ずるがためにはドストエーフスキイのヒーローは、自ら誰かを侮辱しなければならない。もし私が他人を侮辱し、踏みつけ、苦しめることができるならば、それは私が人間であることを意味する。もし私にそれが出來ないならば、私は人間でなく、くだらない存在である。自分で他人を踏みつけ苦しめ辱しめないかぎり、私は他人から虐げられ踏みつけられた受難者である――これが名譽のための雪辱戰の病理學的現れの一つである。然しこれは、まだその初まりに過ぎない。名譽の熱に襲はれた個性の最も無邪氣な現れに過ぎない。他人から虐げられ踏みつけられた者とならないためには、自分が人を虐げ踏みつけるだけでは不充分である。單に人を辱しめ、他人の自愛心を平氣に踏みつけるだけではまだ淺い。人は、すべての法則とすべての法律的障壁と道德律とを踏み超えたとき、初めて完全な意味に於いて獨立し、一切の屈辱と抑壓との上に立つことが出來るのである。そこでドストエーフスキイのヒーローは自分に一切のことが許されて居り、自分は一切のことを爲し得る、と云ふことを證明するために、犯罪を敢てしてゐる。勿論犯罪は必然的に刑罰を伴ひ、暴虐は必然的に悲痛を伴つてゐる。然しそれは既に辨償された悲痛で

ある。この悲痛は、人間の品位を辱しめない正當の應報である。このやうな悲痛は、それを逃れずに、從順にそれを忍ばなければならぬ。それどころか、その悲痛を人間の高尚なる品位の特徴として、それを求め且つそれを愛しなければならぬ。かやうにドストエーフスキイの作に於ては、人を辱しめ苦しめ踏みつけようとする病理學的衝動は、自ら苦しみ自ら屈辱を忍從しようとする同じやうな病的衝動と同居してゐる。つまり人を虐げんとする虐げられた人、人を苦しめんとする受難者、悲痛を求めてゐる暴虐者、屈辱と刑罰とを求めてゐる凌辱者と罪人――これがドストエーフスキイの凡ゆる藝術を通じて認められる中心人物である。これが、階級的無權利と資本主義的競爭との二重壓搾機に絞められてゐる小市民の姿である。

三

通常、精神病理と犯罪と死とをもつて終つてゐる此の小市民の陰慘な運命は、『貧しき人々』から『カラマーゾフ兄弟』に至るまで、ドストエーフスキイの凡ゆる作品の內容を成してゐる。

ドストエーフスキイに取つて特色的な人物のアンサンブルは、すべて處女作から決定してゐた。それは第一には、ヒステリックな短氣と、同じくヒステリックな柔順との間に平等に分裂してゐるマカール・デーヴシュキン、それから彼と音信を交してゐる多少誇張されたヒステリックな謙遜な性格を持つたワーレンカ・ドブロシェローワ、それに暴虐者の特質を多分に持つたワーレンカの凌辱者で漠然と描かれたブイコフ氏――これ等の人物のアンサンブルは心理的に深化しつゝ、また様々に結合しつゝ作品から作品へと移動してゐる。短氣から從順へ、從順から短氣へと、ヒステリックに動搖してゐる貧しい暗いデーヴシュキンの姿は、次第に發展しつゝまた心理的に複雜化しつゝ、つひにラスコーリニコフやイワン・カラマーゾフにまで成長を遂げて、非常に複雜な精神的教養を持つた半罪人、半苦行者となつてゐる。ドストエーフスキイの處女作『貧しき人々』に於いて中心の地位を占めてゐる此の人物（デーヴシュキン）は、彼の多數の作品に於いてもやはり中心人物となつてゐる。たとへば、『二重人格』、『ステパンチコヴォ村』、『地下室手記』、『賭博者』、『罪と罰』、『永久の良人』、『未成年』、『カラマーゾフ兄弟』等は、この二重性の人物を中心にしてゐる。それに對して、凌辱者（ブイコフ氏）の曖昧な姿は、ワルコーフスキイ、スウィドリガイロフ、ヴェルホヴェンスキイの如き本質的な暴虐者や罪人にまで成長を見せてゐる。加ふるに、多くの作品に於いては中心人物すなはち主人公の役割がこの人物（ブイコフ氏）に移つてゐる。たとへば初期の作品『女主人』、それから『虐げられし人々』、『惡靈』等に於いて、ドストエーフスキイはこの犯罪的性質を注意の焦點に立てゝゐるのである。最後に謙遜なワーレンカは、ワー

シャ・シュムコフやソーニャ・マルメラードワの如き一團の殉教者と、ムイシュキン公爵や長老マカール・ドルゴルーコフおよびゾシマの如き苦行者の源を成してゐる。小說『弱き心』と『白痴』に於いてはこの性格が中心的地位を占めてゐる。

四

ドストエーフスキイはその藝術に於いて、沒落しつゝある小市民に取つて典型的な方法を再現した。それは實生活の問題をうまく解決し得る何か確實なものを交る〳〵第一線に押出しながら、自分の敵とする現實に對抗する方法手段である。ところが此の確實なものは小市民の間には見出されなかつた。彼等は地下室に追ひ込められて、その中からの出口を發見することが出來ず、自分たちの天才的な藝術家をして地下室の天才たるべく運命づけて了つた。もしドストエーフスキイが、崩壞しつゝある頽廢的な小市民の世界からその基調と人物とを汲み取つたとすれば、そして社會的地下室が彼の藝術の主題を決定したとすれば、同じくこの地下室は彼の作品構成の特質とその文體をも決定したと謂ふことができる。ヒステリックな緊張、痙攣的な焦燥、陰慘な破局（カタストロフ）——これらは、ドストエーフスキイの藝術を育むだ社會的根源に固有の特質であるが、同時にこれらの特質は、ドストエーフスキイの作品の特色たる嵐のやうな主題の發展を生み出した。力學（ダイナミー）性（ズム）、緊張した事件、しかも凡ゆる種類の突發事で人目を眩惑せしむるやうな紛糾錯雜せる混沌たる事件の旋風——これがドストエーフスキイの小說構成の特質である。この特質は先づ第一に、ドストエーフスキイに於いては、時間を構成的に使用することに於いて現れてゐる。彼の作品の筋は、特に短い時間の切れ目に於いて發展してゐるが、これはロシヤ文學の他のクラシックには何ぴとにも見られないところである。彼等に於いては幾年間にも引き延ばされてゐる事柄が、ドストエーフスキイに於いては、僅か數日の間に起つて數日のうちに解決されてゐる。彼の作品の力學（ダイナミー）性は、事件の壓搾と、それの絕え間なき進展と、その悲劇的な破裂によつて强調されて居り、またその事件の陰慘な性質は、その事件を黃昏時（たそがれどき）と夜陰とに集中することによつて强調されてゐる。そして彼の作に見る事件の混沌性は、それを年代記的に物語らずに、最初から讀者を事件の中樞に引き入れ、凡ゆる偶然事の堆積とも思はれるやうな、まだはつきりしない、ごたごたした出來事の渦中に投り込む特殊な手法によつて倍加される。また葛藤といふ葛藤は、ドストエーフスキイの作ではいつも複雜であり、もつれ合つてゐる上に、その發展の迅速なことによつて讀者の興味を唆り、心を捉える。彼はこの發展を妨げ又は阻止する一切のものを好まない。躊躇逡巡と細かい叙述とは彼に於いて禁物である。彼の作では行動と身振（ゼスチュア）りと會話とが總ての上に卓越し

てゐる。事物の描寫の中でも、彼は風景の枠づけを用ゐることが極めて稀れである。それは自然美の背景が小市民的地下室や都會の下層と全く關係がないからである。彼の作に於いて我々が出遇ふのは、都會の裏通りや貧民窟の不健康な空氣に飽滿した世態描寫である。唾だらけの「家具づきの室」、黴くさい居酒屋、特に夕暮や夜分に疎らな街燈の薄暗い光に照らされた汚ならしい横丁――これがドストエーフスキイの最も好んで描く世態である。

五

作品の構成を特色づけてゐる混沌たる力學性は、その文體に取つてもまた特色的である。作品中の話手や主人公の談話は、如何にも慌たゞしく、痙攣的にいら〳〵して居り、言葉と言葉とが互に急速に重り合つてゐる。それが或る時は、不整頓な文章の體を成してゐるかと思ふと、或る時は短い切れ〳〵な文句となつて落ちてゐる。ドストエーフスキイの斯うした慌たゞしい文章學には、生活のために苛まれた都會の地下室の撚の戻つた舌もつれのする人間の切れ〳〵な談話が感じられる。この慌たゞしい文章學によつて刺戟された不安な病的な氣分は、さらにその詩的語義學の暗い特質によつて強められてゐる。ドストエーフスキイは、その豐富な形容と隱喩と比較とを都會の裏街の陰氣な不愛想な世界から汲み取つてゐるからである。彼の作に於ては、街燈は「葬式の松明のやうに陰氣に散らついて」居り、時計は「喉を緊められたやうに」喉聲を揚げて居り、「室は戸棚か櫃に似て」居り、風は「施しを願つてゐる五月蠅い乞食のやうに」唸つてゐる。

六

かやうな樣式をもつてドストエーフスキイはロシヤ文學に入つて來た。ロシヤ文學史上に於ける彼の意義は極めて偉大である。彼がその創作の道を始めたのはちようど地主がロシヤ文學を支配して、貴族的樣式の不同調を文學に附與した時代であつた。新しい非地主的の言葉も辛つと生れたには生れたが、それはまだ「文學的殿堂」の玄關先におづ〳〵と小さくなつてゐるだけで、貴族的樣式の作家たちが氣樂に住んでゐた金殿玉樓に入ることは出來なかつた。「プーシキン派の巨星」やゴーゴリ派に對して、非地主的文學の未熟な新進の代表者たち、たとへば今では忘れられてゐるポレウォイ、グレーチ、パーヴロフ、ヴェリトマンその他の人たちは、文壇の微々たる下部を形ちづくりつゝ消滅した。然しドストエーフスキイの口に於いて新しい言葉は未曾有の力を見出した。彼によつて新文學は「ロシヤ小說の客間」のうちに自分の席を要求しながら、古い貴族的樣式と公然の競爭に入つた。ドストエーフスキイは、その藝術によつて、ロシヤ文壇に於ける貴族地主の文學とブルジョア民主的文學との戰ひを開始した。この戰ひは、十九世紀の末に後者

の斷然たる勝利をもつて終つてゐる。ドストエーフスキイこそはこの勝利に於いて主なる役割を演じたのである。彼はその天才的創造によつてこの戰鬪の終局を豫め決定して、新樣式のクラシックとなつた。ドストエーフスキイに取つては、彼の運命に落ちかゝつた歷史的使命が全く明白であつた。彼は階級的競爭者と意識的に戰つた。彼はまだその文壇生活の初期に兄弟に書き送つてゐる、「私は熱心に書いてゐる、私は自分が全ロシヤ文壇を相手に裁判沙汰に及んでゐるかのやうな氣がする」と。彼はそれが地主文學との訴訟であることをよく知つてゐた。彼は又、ストラーホフへ宛てゝ書いてゐる。「御存じの通り、これはみな地主の文學ではないか？　地主文學は既に云ふべきことの總てを云ひ盡して了つた、特にレフ・トルストイの文學は素晴らしいものであるが、併しこの最高峰の地主文學は最後のものであつた。地主の言葉に代るべき新しい言葉はまだ一度だつてなかつた。レシェトニコフたちは何も語らなかつた。だが、とにかくレシェトニコフたちは藝術界に於ける何か新しい言葉の必要なことに就いての思想を表明してゐる。たとひ醜い形に於いてなりと地主の言葉ならぬ新しい言葉を。」この手紙の筆者こそ、地主の言葉ならぬ新しい藝術の言葉を表明しようと努力したのである。たゞに新しい言葉を表明するばかりでなく、古い言葉の陳腐さを示さうと努力したのである。ドストエーフスキイは、熱烈な論爭家である。彼の藝術作品はたゞに新しい樣式を確立したばかりでなく、古い樣式を力づよく否定した。彼の作品は地主的貴族的樣式の不同調に對する擬狂詩（パロディー）と貴族文學者に對する諷刺とに飽滿してゐる。彼はレルモントフとゴーゴリの樣式を大膽に嘲笑し、またグラノーフスキイとツルゲーニェフとをその小說の慢畫的（カリカチュア）役割に取り入れてゐる。

七

その形式と內容とに於いて極めて民主的であり、社會的反抗に飽滿し、社會的に虐げられ踏みつけられた人々に對する深い理解と深い同情とに一貫してゐるドストエーフスキイの藝術は、その中に社會的に進步的なエネルギーの强烈な爆彈を藏してゐる。一八四〇年代および六〇年代の急進的な評論家、たとへばベリンスキイやドブロリューボフやピーサレフらが、ドストエーフスキイを社會的無權利と抑壓とへの鬪爭に於ける力づよい協同者として、その作品を熱烈な同情をもつて迎へたことは偶然でない。「若き詩人に名譽と光榮あれ！　彼の詩神（ミューズ）は屋根裏や穴倉（あなぐら）の人々を愛してゐる」と、ベリンスキイは『貧しき人々』に就いての評論の中で叫んでゐる。ドブロリューボフも、ドストエーフスキイを高く評價して、「彼は若き天才のエネルギーと淸新味とをもつて、彼を驚かした我々の貧しい變則的な現實社會の解剖に着手し、この解剖に於いて自分の高尙な人

道的理想を表明した、」と言つてゐる。然しドストエーフスキイの藝術を一貫する社會的民主々義のうちには、高尚な進歩的契機（モメント）と並んで反動的な契機が同居してゐる。ドストエーフスキイの口をもつて語つた虐げられ踏みつけられた人々の世界は、憤激と破壞の火に燃え立ちながら、これによつて疑ひもなく×××役割を遂行した。然し虐げられた人々の、この破壞的憤激の陰には創造的な力が潜んでゐなかつた。崩壞しつゝある小市民階級の破壞的精神は、創造の精神ではなかつた。それは著しく革命的靈感を減殺した。なぜなら効果なき反抗は自づから疲勞と從順とに終つたからである。社會的公憤の靈感はそのアンチ・デーゼたる社會的從順の靈感に變じ、革命的興奮は反動的姑息に變つた。反動的の弦線はドストエーフスキイの藝術に於いて革命的弦線のやうに矢張り極度の緊張にまで張りつめられて、病的な切れ切れの不調和な印象を與へる。

八

ドストエーフスキイの藝術に見るこの二重性と矛盾とは、また彼に對する批評家たちの二重的な評價の原因ともなつた。社會的昂揚の時代には、ベリンスキイやドブロリューボフやピーサレフの如き急進的批評家たちは、ドストエーフスキイを高度に緊張した一種の革命的流れとして高く評價しつゝ彼の缺陷には氣づかなかつた。それに反して、社會的沈滯の時代に此の缺陷が露はになつて、ドストエーフスキイの藝術に響いてゐる反動的の弦線が、たとへば一八八〇年代に見るが如き反動時代を背景として特に高らかに響いた時、トゥカチェフやミハイロフスキイの如き當時の急進的評論家は、ドストエーフスキイを革命的エネルギーの硬化した人として貶しつゝ、彼が永久に公憤と革命的爆發の精神に滿たされてゐることには氣づかなかつた。

この兩派の批評家たちは、いづれも同等に正しかつた。兩者は實際、ドストエーフスキイのうちに潜んでゐた眞の相貌を見た。が同時に、兩者は同樣に正しくなかつた。なぜなら、彼等はドストエーフスキイの一面だけを見て、彼の二重人格に氣づかなかつたし、從つて、彼の複雜な矛盾した性格の全貌を理解することが出來なかつたからである。ドストエーフスキイに對する批評的意味づけは、辯證法的發展の道程を、すなはちヘーゲルの三段階（トゥリアーダ）を完全に通過してゐる。この辯證法的段階に於ける最初のテーゼ（正）は一八四〇年代および六〇年代の批評であり、この時代の批評に取つてはドストエーフスキイが「人道的天才」であり、進歩の動因であつた。辯證法的段階のアンチ・テーゼ（反）は一八八〇年代の批評であり、そこではドストエーフスキイが「殘忍な天才」であり、反動の動因であつた。最後のシンテーゼ（合）は、現代のマルクス主義的批評に於いて實現されてゐる。このマルクス主義的批評は、ドストエーフスキイその人に於い

て、從順に傾いてゐる謀叛者、謀叛に傾いてゐる從順者、反動に傾いてゐる革命家、革命に傾いてゐる反動家を見てゐるのである。

九

ドストエーフスキイによつて天才的に語られた新しい「非地主的の言葉」は、ロシヤ文學に於いて非常な反響を見出した。彼の新しい言葉は十九世紀の末には大きな多聲的コーラスとなつて、地主文學の弱々しい聲を打ち消してゐる。ドストエーフスキイに對してかすかに調子を合せてゐるアリボフやバランツェーヴィチの如き多數の和聲のほか、このコーラスにはアンドレイ・ベールイ、ソログーブ、アンドレーエフ、レーミゾフらの如き特殊な色調を持つた強い諧調が入り込んでゐる。それらの諧調によつて、合唱の根本的メローディーは更に新しい色調を加へて清新な強い獨特な抑揚を響かせてゐる。ドストエーフスキイは新しいロシヤ文學の基礎を置いた人と謂はれよう。彼はこの新興文學に於ても、貴族時代の文學でプーシキンが占めてゐたと同じやうな中心的地位を占めてゐる。貴族時代の作家は、すべて多少の程度に於いてプーシキンの眷族であつたが、ロシヤ文學のブルジョア時代に於ける作家たちはすべて、多少の程度に於いてドストエーフスキイの親族である。

ドストエーフスキイの特質

ソロウィヨフ・アンドレーエウィチ

一、他の諸文豪と比較して

一

ドストエーフスキイの名は普通トルストイ、ツルゲーニェフ、ゴンチャロフの名と一緒に記憶されてゐる。また何人もドストエーフスキイが四〇年代作家の「光輝ある群」の第一線に立つべき權利を有することを否定する者はあるまい。だが、ドストエーフスキイを、場所や時代や天才の角度から、また文學上何れもゴーゴリから出發してゐるといふ共通性の上から、彼の同時代作家と比較することが出來るとしても、若し我々が一旦作品の精神、意義、樣式等に移るならば、斯かる比較は極めて困難であり、また牽强附會を免かれないと思ふ。凡て是等の點に於てドストエーフスキイは專ら自分自身と自己の個人的生活の不可思議な事情とに負ふところが多いからであ

る。この事情こそ彼の不可侵的所有であつて、はつきりと輪廓づけられた彼の個性も、その病的・精神病理學的天才も、ロシヤ文學に比類なき彼の思想と空想との獨創性も凡てその中に表明されてゐる。批評家ストラーホフがドストエーフスキイに送つた手紙の中の次の言葉はその儘承認せらるべきものである。「作品の内容に於て、思想の豐富さと複雜さに於て、貴下は明らかに我邦の第一人者である。トルストイその人も貴下に比べては單調である。貴下の凡ての作品に特別の强烈な色調のあるといふことは此の事と矛盾しない。」だが、凡ての人に認められながら、まだ何人によつても全く明瞭に公式化されたことのないドストエーフスキイの全生活、全活動の特質とは抑々何であるか、或種の比較はこの問に對する解答を我々に與へるであらう。

二

ゴンチャロフの作品に於て、特にツルゲーニェフの作品に於て先づ第一に我々の眼を打つものは驚くべき形式の洗練である。凡てが鍍金され、艶出しされ、ワニスを塗られ、磨きをかけられてゐる。一言一句各々その所を得て、ふつくりと圓滑にされてゐるばかりでなく、寶玉のやうに彫琢されてゐる。一の無用な冗漫もなく、また倦怠や天才の不均衡の認められるやうな一のページもない。各作品が何れも天金入りの製本を要求してゐる。各人物が、偶然刹那的に現はれた人物さへもが、ツルゲーニェフの作に於ては大理石像のやうに一點一劃と雖も加へるところがない。幾度も考へてはまた考へ直し、書いてはまた書き直して、少しもあせらず、少しも媚びることなく、充分成功の確信がついてから初めて讀者大衆に與へられる。斯樣に書くことは結構であり、また斯樣に書くことの出來る藝術家は幸福である。だが、之が爲には何よりも先づ資力と忍耐と內面的規律とが必要である。ドストエーフスキイにはその何れもがなかつた。彼があせらず、期限に束縛されずに書いた作品は一生中僅か二種しかなかつた。それは處女作『貧しき人々』と最後の作『カラマーゾフ兄弟』とであつた。其他の作品は何れも止むに止まれぬ要求から書いたといふよりは、寧ろ困つた擧句の果に勞銀取りの爲に書いたのである。彼はシベリア苦役中も外國滯在中も借金で首が廻らなかつた。それ故に極めて僅かな例外の外、ドストエーフスキイには最後まで持堪えた完成された作品はない。時として百ページにも亘つて、言葉の羅列としか思はれないやうなものもある。たゞ最後に至つて突然天才が疲勞に打勝つて全力を示すことがある。丁度電光が雲を裂いて、幻想的な不可思議な光輝で一時に全景を照らすやうに。だが、普通それは餘計な細目であり、互ひに積み重ねられた無數の個別的な葛藤であり、主題の頻繁な變化であり、新しい主人公や女主人公の不意の登場である。凡てそれが目まぐるしい程慌しく、同時に創造力の緊張

と發作と危機とを孕み、電光の如き天才の閃光と傷ましい懊惱とをもつて伴はれた。それ以外何うすることも出來なかつた。ドストエーフスキイは金を貯へることが出來なかつた。屢々小說の代りに白紙を賣つた。その度毎に「惡黨のやうな發行者」は樣々な難題を持掛けて自己の利益を擁護した。ドストエーフスキイの手紙を開いて見るがいゝ。その主旨は唯一つ「金、金、金」といふことに盡きる。一定の日限までに必ず一定量の小說を書き上げなければならなかつた大作家の精神に如何なる悲劇が演じられたか、少しでも考へのある人は諒解するであらう。ドストエーフスキイはクラエーフスキイやステローフスキイの如き人々（發行者）の手に落ちてからは、容易にその束縛を脫することが出來ず、漸やく晩年に至つて彼等の手から拐ぎ離れた。だが彼が如く貧困と苦役と癲癇と、憂鬱でないまでも精神病、つまりヒステリーの烈しい徵候があつたにも拘らず、自己を最大限に表現することの出來た天才の力は果して何んなでなければならないか？

三

ツルゲーニェフ、トルストイ、ゴンチャロフなどは書きたいといふ要求があつたから書いたのだ。それは他の人々が飲んだり、食つたり、眠たりするのと同じやうな避け難い「有機的」要求であつた。文學は彼等に取つて一生の大事ではあつたが、若し彼等に天才が無かつたら、彼等は文學に從事しなくとも氣樂に暮らしたであらう。要するに彼等は書けるから書いたのだ、書きたいから書いたのだ。何といふ羨ましい運命であらう。ところがドストエーフスキイに取つて、文學の仕事は要求といふよりは必要であつた。彼は度々自から稱して文壇のプロレタリヤだと言つた。たとへ上達と成功とは比較的容易に得られたとはいへ、この自意識は全く眞實であつた。彼の天才が如何に偉大であつても、不斷の焦燥は彼の仕事を損ひ、彼を苦しめ、彼の偉大なる作家的精神を惱ました。彼は或は憎惡の情を以て、或は絕望の念を以て、屢々次のやうに繰返した。「あゝ、たとへ一篇の小說でもいゝから、ツルゲーニェフやトルストイなどが書いてゐるやうに書けたら……」と。そこには如何程の屈辱、如何程の眼に見えない自尊心の苦惱があつたことか。ドストエーフスキイに於いては一生の勞苦によつて漸やく獲得することの出來た物質的保障を、生れながらにして與へられた他の幸福な作家達に對する羨望と嫉妬は如何許であつたか。彼は數百ルーブリ、數十ルーブリの前金を低頭平身して哀願しなければならなかつた。そして註文の原稿を約束の時日に屆けない爲に叱責を受けながら、癲癇、發作其他の病苦にも拘らず、急いで書き上げなければならなかつた。ドストエーフスキイの生涯——それは天才と市場との、悲劇に充ちた戰鬪であつた。

四

だが、それと同時にドストエーフスキイは熱烈に文學を愛した。文學以外に彼は賃仕事も職業も探さなかつた。たとへ貧しい文學者ではあつたが、彼は文學者たることを誇りとしてゐた。偶偶彼に何かの官職に就くこと、又はそれに類したことを勸めると、立腹するほどであつた。たゞ窮迫が餘りに甚くなると、時々彼の口から咒ひの言葉がうつかり漏れることがある。然しそんな場合にも彼は自己の地位を固く守つた。玆に此の文壇プロレタリヤの精神的悲劇を充分に特質づける興味ある手紙の斷片がある。それは『ザリャ』（曙光）の編輯者カシピリョフが期限までに七十五ルーブリを送金しなかつた時のことで、ドストエーフスキイは到頭爆發して次のやうに書いてゐる。「彼は私が單に辭令の爲に自分の窮乏のことを彼に書き送つたとでも思つてゐるのか。私が饑えてゐる時、電報料の二ターレルを得る爲にズボンを質に入れた時、私は何うして物を書くことが出來やう。私は、私の飢餓は何うにでもなるがいゝ。だが、私の妻は赤子を養つてゐるではないか。若し彼女が自分の最後の毛織の袴（スカート）を自分で質屋に持つて行つたら一體何うなるんだ。こちらでは雪が降つて二日目になるんだ。嘘は吐かない、新聞を觀るがいゝ。彼女は風邪を引くではないか。こんな事まで彼に打明けるのは私に取つて恥辱だといふことが、彼には解らないのか。私が妻の困窮の事を彼に書き送つた後で、私を斯んなにおろそかにするのは、私ばかりでなく私の妻をも侮辱するものだといふことが、彼には解らないのか。さうだ、侮辱したんだ、侮辱したんだ……。彼は恐らく斯う言ふだらう、『彼奴なんか何うにでもなるがいゝ、彼奴の窮乏などは何うでもいゝ。彼奴は哀願するのが至當だ、要求する權利はない』と……」

『貧しき人々』や『死の家の記錄』や『罪と罰』の作者が、斯んな事を書かなければならなかつたとは何といふ悲慘事であらう。「私は鈍くなる程働き過ぎた、頭がまるで馬鹿になる程」――斯ういつた文句は絶えず繰返されてゐる。それでも兎に角ドストエーフスキイは自己の文學的勞働を棄てなかつたばかりでなく、棄てようとさへ思はなかつた。

五

だが市場との苦闘に就いては是位にして、他の問題に移らう。ストラーホフはドストエーフスキイへの手紙に書いてゐる、「敏捷なフランス人かドイツ人が貴下の十分の一の内容を持つてゐたら、地球の兩半球に名を轟かしたであらう。そして第一流の明星として世界文學史の上に輝いたであらう。私の考へでは、もつと創造力を弱め、解剖の鋭鋒を鈍らして、二十の人物と百の場面の代りに、一人の人物と十の場面に縮めるのが創作の祕訣ではないかと思ふ。」ストラーホフの指摘

した此の缺點は全く適切である。何故なら、文學的天才の本質は、廣義に於ける表現力の最少限の消費をもつて最大限の印象を讀者に與へることにあるからだ。だがこの缺點は、一部は仕事を急ぐことから來て居り、一部は他の原因から來て居る。といふのは、ドストエーフスキイの天才が全く特殊な天才だからだ。彼はその天才を支配することを晩年まで研究しなかつた。彼の天才は不均等で、氣短かく、激し易く、極度に神經質的な我儘な天才であつた。簡單な手紙を書くのにもドストエーフスキイには靈感が必要であつた。でなければ彼は二行も書けなかつた。彼は自分の主題を最初から一擧に突貫して奪取する。そしてイワン・カラマーゾフやラスコーリニコフやスヴィドリガイロフの如き最も複雜な性格を一氣呵成に描いた。忍び足でこつそりと彼等に近寄ることがなかつた。心理的解剖の偉大なる名人ドストエーフスキイは、細目の描寫に於ては決して名人でなかつた。彼はトルストイのやうに作中人物の委曲に亘つて細かに觀察したり研究したりすることは出來なかつた。またツルゲーニェフのやうな性格描寫は出來なかつた。けれども作中人物と共に生活し、共に苦しみ、惱み、興奮する一事に至つては、何人も彼に及ばなかつた。尤も靜觀の力は彼に缺けてゐた。それ故に創作は彼の精力を甚く消耗させた。ゴンチャロフが驚くべく聰明な、理解ある、同時に驚くべく飽き足れる眼光で人生を觀てゐる時、ドストエーフスキイは全身神經と緊張と苦痛と疲勞とに惱んでゐる。トルストイはその穿鑿的な天才的眼光を人間精神の深奥に注いで、何事も知り拔かなければ止まない天才の緩慢さを以て徐ろに正邪曲直の判決を下してゐるが、ドストエーフスキイは呪詛するか祝福するか、愛するか憎むか、どちらかである。而もそれがいつも情熱を以て伴はれる。彼の天才の熱烈さも過敏性も、また苦しきまでに愛し、苦しきまでに憎む彼が胸中の永久の沸騰も、そこから來るのである。

ちよつと見ると、是等の點に於ては、ドストエーフスキイが遺傳的に受けた個人的性格が、今日で言へば彼のヒステリックな性質が、原因を爲してゐるやうであるが、そこには後に至つて更に一つの事情が加はつてゐる。それは「一八四〇年代作家の大多數が農村の出身者であつて、虛弱なる地主のタイプに屬してゐるのに、ドストエーフスキイは雜階級、勤勞階級の代表者であり、コレラ病患者のやうな神經質な都會の子であつた。も一つは四〇年代作家の大多數が何れも生活を保障された人々であつたのに、ドストエーフスキイは彼等の中で唯一人新興プロレタリヤ知識階級に屬してゐた」といふ點である。始終いら〳〵して居り、始終混亂して居る此の知識階級のプロレタリヤに、實生活や市場と頑强な絶望的戰ひを戰つたところの此の都會の子に、自分の作中人物を靜觀したり、翫味したり、描寫したりする餘裕はなかつた。生活が彼に落着きを與へな

い。生活の物質的方面とその精神的疑問とが彼を惱ましてゐる。彼は恰も美や趣味や歡樂を故意に避けてゐるかのやうである。彼は如何なる藝術的裝飾をも我慢することが出來ない。生活――それは恐ろしく眞面目な、恐ろしく困難な、剩へ殘忍なものである。生活の何處に接吻したり愛撫したり又は接吻や愛撫を描いたりするところがあらう。生活――それは課題であり、本分であり、義務であり、戰鬪である。そしてその後では手も足も血塗れになるのが落ちだ。それ故にドストエーフスキイの作品に於て我々は人を魅するやうな自然の描寫も、心を惹くやうな戀愛や逢引や接吻の場面も、魅惑的な女性のタイプも見出さない。ドストエーフスキイは凡てそれ等を主義に於て否定する。小說『惡靈』に於てドストエーフスキイは作家カルマージノフなる人物の名の下にツルゲーニェフを戲笑(からか)つてゐる。それはツルゲーニェフが「例へば接吻を描くのに、それが凡ての人間の間に行はれてゐるやうにでなく、先づ道具立からして、周圍にゐにしだか、又は植物學でも調べなければ分らないやうな或る特別な草を生やし、其上それには必らず誰も見たことのないやうな或る菫の色調を與へなければならず、そして興味の中心たる一對の男女が其蔭に坐つてゐる樹木は橙色でなければならぬ」といふ風に描かうとするからである。ドストエーフスキイの斯かる嚴肅主義(ピューリタニズム)は明かに人生に對する、餘りに眞面目な、餘りに思慮深い態度から來てゐる。人生はドストエーフスキイには何よりも先づ宗教的問題として考へられてゐた。人生は彼の凡ての作中人物を苦しめたやうに彼自身をも苦しめたか何うかといふことは何うでもよい。「人生の何處に興味ある一對の男女の接吻を描くべきところがあらう……。」是こそ疑ひもなく惱める都會プロレタリヤの人生に對する見解である。

六

都會の子たる特色は題材の選擇に於ても見られる。貴族であるツルゲーニェフ、トルストイ、ゴンチャロフは先づ第一に貴族を描き、それからその補足として農民を描いた。第三階級、市民、小市民、雜階級には、彼等は殆んど手を觸れなかつた。時偶觸れることがあつても、それは主として「排擊」するためであつた。ドストエーフスキイはきらびやかな社會を知らなかつたし、從つてまたそれを作品にも登場させなかつた。官吏、知識階級、都會プロレタリアートの社會が彼の世界であつた。「彼は好んで貧苦と淫蕩とに支配されてゐる都會の裏町や貧民窟に讀者を引入れてゐる。恰もヂッケンスのやうに都會生活の暗い詩に浸つてさへゐる。彼は自然美の描寫に沒頭しない代りに、極めて屢々讀者の前に竦然(そつ)とするやうな別種の恐ろしい光景を展開する。それは特にペテルブルグに特有な夜の街路の光景である。其所では天氣の惡い秋のじめ〳〵した日に、又

は冬の吹雪の夜に、溫い屋根の下に住んでゐる人々が溫い室の中で嵐の吠聲に耳を澄してゐる時、住居を持たない虐げられた敗殘者のみは見すぼらしい襤褸を引かけ、濕つぽい雪に蔽はれ、冷い風に晒されて、半ば狂的な幻想に耽りながら、汚泥や氷雪や寒氣や暗闇の中に彷徨いてゐる。』

七

ドストエーフスキイの特性を押し詰めて行くと、結局彼は疑ひもなく精神病者である。狂人ではないが精神病者には違ひない。兩者は私の考へでは同一でない。幼年時代に彼は錯覺に苦しみ、後には癲癇で惱んだ。だがこの外に彼には明かに性格上の懷疑とヒステリイとの徵候があつた。懷疑が何であるかは誰でも知つてゐる。これは自己と自己の力と人生とに對する苦しい不信であり、自己を初めとして凡てのものに對する疑惑である。概し人生に對する恐怖であり病氣氣ある。「ヒステリイ」が何であるかに就いては、誰よりもよく、最も偉大なる精神病理學者であつたドストエーフスキイ自身が語つてゐる。その詳細に就いては『カラマーゾフ兄弟』に讓り、私はドクトル・チーヂュの叙述に依るヒステリイの解釋を引用しよう。それは「精神的機能の均衡が不確かなこと、非常に昂奮し易きこと、精神的機關の異常に强烈な反應、その刺戟の急激な交代が特徵になつてゐる。斯種の病人の性格に於ては、氣分と激情、同情と反感との雜然たる混合、或は愉快なる、或は威嚇的な、或は眞面目な、或は低級な、或は哲學風な觀念の混亂、そして精力に充ちてゐながら直ぐに消失する欲求の混迷が何より目立つてゐる。だが斯種の病人には他に自愛心といふ顯著な特質がある。彼等は最も純眞な利己主義者(イゴイスト)である。何時も唯自分の事のみを最も生々した興味を以て語つてゐる。一般の注意を自分に惹付け、興味を喚起しようと努め、又自分の個性で、自分の病氣で、自分の惡癖ですら他人を面白がらせようと努力する。」この描寫に於いて我々はドストエーフスキイ其人を見ない譯に行かない。彼の不均衡不齊一な天性、內面的規律の缺乏、我儘、其他歡喜と絕望、同情と反感、極度の熱中と冷淡、斯ういつた反對な感情の、原因もない急激な交替を其所に見るのである。斯樣な性格を以て一生を送らなければならない人は何と恐ろしいことであらう。それに其人が若し天才的で、貧窮で、そして赤子の如く純眞であるならば猶更のことである……

二、悲劇の意義

一

ドストエーフスキイの文學的活動は、大別して徒刑前と徒刑後との二期にすることが出來る。

前期は主して、虐げられ踏みつけられた人々や、概して人類的悲痛に献げられ、一八四〇年代の運動によつて發展した人道的原理の觀點から、その悲痛に對する反抗に献げられてゐる。後期に於いてはドストエーフスキイは、その主なる注意をロシヤ人の「我儘な氣質」の研究に集中した。そしてこれがためには、彼の傑作『罪と罰』、『悪靈』、『カラマーゾフ兄弟』が献げられてゐる。

ドストエーフスキイは自己の文學的出處を決定して、「我々は凡てゴーゴリの『外套』から出た」と云つてゐる。勿論『罪と罰』や『カラマーゾフ兄弟』が『外套』から出たわけではないが、兎に角『外套』は『貧しき人々』、『二重人格』、『虐げられし人々』などに取つては靈感の動機となり得たのである。『外套』よりもヨリ重要なことは、虐げられた人々の權利を擁護した時代の一般的な博愛的氣分であつた。それ自身病的な不幸な、そして一生貧乏したドストエーフスキイは、誰にも增して深く我が國の社會生活の地下室や屋根裏をのぞくことが出來た。まだどこかに自分自身の品性の火花が燃えてゐる虐げられた人々の心理をのぞき込むことが出來た。何がための暴虐だ？　何がための屈辱だ？　これが彼の文學的活動の前期のヒーローたちを惱ましてゐる問題である。デーヴシュキンもゴリャードキンもイワン・ペトローヴィチも、すべて同じやうに、人間相互の一般的な冷淡の陰氣な鐵網の前に立ちながら此の問題を力づよく自分に課してゐる。「何のためだ？　私にはこの地上に居所がないのか？　幸福の一片は私の運命にだつて落ちるべきではないか？」斯樣にこれらの襤褸くづの小役人、襤褸くづの文學者たちは、概しておづ〳〵と、然し發作の瞬間のみは勇敢に、自問してゐる。絶望の惱みと、不滿の爆發と、人々に對する燃ゆるやうな憎惡と、燃ゆるやうな愛情とをもつて、彼等は自ら問ふてゐる。彼等が全く地下室に去つて、そこから人々に復讐するだけの力を持つやうなことは、極めて稀れである。却つて復讐のたびごとに自分を苦しめ自分の心を鞭つだけである。そこにドストエーフスキイは、生活を熱望しつゝある現代人プロレタリヤの深刻な心理學を持つてゐる。それは或ひは貴族的特權によつて、或ひは强者の横暴によつて、或ひは運命にまで嵩じた一種の本然の力によつて、生活から無殘にも押しのけられたプロレタリヤの心理學である。だが、彼等の運命にふりかかつたこれらの屈辱をどうすればいゝか、それを如何に受け入れるか。生きんがためにはこれらの打擊を喜んで迎へる忍從の幻想的な建物を建設すべきであるか、それともこれらの打擊を斷乎として打ちくだくべき戰ひを敢行すべきであるか。ドストエーフスキイの小說は凡てこの幻想的な建物である。そこには、人間の凡ての問ひに答へながら、凡ての疑問を解決しながら、謙遜なる愛か、それとも傲慢なる謀叛か、そのいづれかの運命を豫定しながら、人間の生ける神が生活することが出來る。だが、

それは何うでもよい。神はゐてもゐなくても關はないから、とにかくどんな建物でも建設されなければならぬ。なぜなら、人を殺すことは出來ないから。なぜなら各々の人間には、最も大きなものにも最も小さなものにも、富者にも貧者にも、永久の徒刑囚にもインクに汚れた小役人にも、同樣に幸福と生存とに對する神聖なる權利があるからだ。

二

人間の悲痛は如何なる意義を持つか？　その中に概して意義があるかどうか？　意義があるとすれば人間の悲痛と同情の神とを如何に調和すべきか？　これがドストエーフスキイの天才を惹付けてゐる問題である。そこで彼が見出した第一の事實は、この悲痛が全き墮落と頽廢とに導くと同時に、最高の道德的淸淨に導くと云ふことである。墮落は淸淨と同じやうに、やはりドストエーフスキイを引きつけた。或ひは淸淨以上に引きつけたかも知れぬ。彼は墮落のどん底に沈んでゐる人を最も多く理解し、最も多く愛した。ドストエーフスキイの批評家の一人は、かう云つてゐる。

「美の世界がどんなに魅惑的であつても、それよりももつと魅惑的な何ものかゞある。それは人間精神の墮落である。人間精神のかすかな調子の整つた音響をかき消してゐる不可解な人生の不調和である。數千年に亘る人類の運命は、この不調和の形式の中を通過してゐる。もし我々が世界の文學を一瞥するならば、その中の何ぴとの視線も、我々がいま解剖してゐる作家（ドストエーフスキイ）の視線ほどに徹底した深刻さをもつて、この不調和の原因を凝視したものはないと云ふことを見出すであらう。それ故に彼の混沌たる全作品の中に見るやうな完全さと充實味とを、我々は何ぴとにも見出し得ない。その中には冒瀆的な何ものかゞあると同時に、宗教的なものがある。彼は自然界の中から、それを再現するための、一つの光景も選ばない。彼の興味を惹いてゐるのは、たゞこれらの光景を結合してゐる接目（つぎめ）だけである。だが冷やかな解剖家である彼は、その光景の中を凝視して、何故にこの美しい世界の全貌がこんなに毀損されて居り、また不公正であるかを知らうとしてゐる。この解剖とともに、彼は自分のうちに、總ての惱める人に對する最も熱烈な愛の感情を何ぴとも及び難いほど結合した。あだかもこの美しい世界を毀損した魔の手が特に深く彼自身を毀損したかのやうに、彼の內面的世界を動かした。そして他の何ぴとにも增して、彼は自分が擔つてゐる凡ての悲痛をはつきりと感得して自分の隱れたる本質の理解へと近づいた。彼の作品の深い主觀性と熱烈さとはそこから來るのである。彼は我々に外部から呼びかけてゐるのではない。我々が他の凡ての人と同じやうに沒頭することの出來る彼の興味を彼と

共に分つやうに内部から呼びかけてゐる。彼の聲はどんな遠方からでも我々の耳にとゞく。我々がそれに近づいて行くと、誰も他の者がゐないところに、一人きりの不可思議な存在が見られる。彼は人間性の堪え難い苦痛に就いて、その苦痛を忍ぶのは全く不可能であると云ふことに就いて、またその苦痛から逃れるために何らかの道を見出す必要に就いて我々に語つてゐる。彼の凡ての作品に見る痛々しい悲痛の調子はそこから來るもので、その中には各部の外的調和は缺けてゐる。そして彼が展開してゐる醫し難い悲痛の世界は、その不可解な原因に就いて、またその到達し難い目的に就いての思想と共に編み込まれてゐる。

ドストエーフスキイには悲劇的感情が特に強く發達してゐた。その作品の中軸として彼が殺害事件を選んだのも、そのためらしい。この殺害に於いて彼は、惱み拔いた人間精神の最も恐ろしい最も邪惡なる現れを見た。またその中に、堪え難い個人的苦痛に對する人間精神の極度の反抗と、その我儘な自我の極端な現れとを見たのである。彼は、殺人者を注意ぶかく凝視しつゝ、彼のうちに、限りなく虐げられた、また限りなく我儘な人間を見出した。殺人者は無政府主義者（アナーキスト）となつた奴隷であり、そしてその無政府主義に於いて人間個性の神聖を踏み越えてゐる奴隷である。（たとへばラスコーリニコフは思想の奴隷であり、スウィードリガイロフは肉慾の奴隷であり、ヴェルホヴェンスキイは思想の奴隷であり、スメルジャーコフはその社會的境遇の奴隷である……。）

三

人生は苦痛である。人生には、この苦痛を必要とするところの、この美しい世界の明朗な喜ばしい相貌を毀損するところの惡い要素がある。だがこの場合、幸福に對する人間の欲求はどうなることだらう。ドストエーフスキイが最初、この幸福の欲求に同情して、そこに何か美しい優しいものを見てゐたことは、彼が最後まで不幸な人々を憐れんだことゝ同じく、疑ひなき事實である。然し、結局彼は、苦痛が必要であること、たゞそれのみがその苦悶の炎で精神を淨めつゝそれを聖者の域にまで達せしむると云ふ斷案に到達した。

しかるに彼は、衆人の幸福が全ロシヤ知識階級の欲求の根本とされ、中心とされた時代に生活した。彼の作中人物の殆んど凡てが、衆人の幸福を保證するやうな社會制度や國家組織に對する、自分自身の理想を創造してゐる。これは、各人が自ら、國家と國民との運命を支配すべき使命を有するかの如く考へた時代であつた。それはロシヤの民情派（ナロードニキ）社會主義革命運動の時代であつた。ラスコーリニコフを取つて見よう。彼の理論によれば、社會の餘計者は舞臺から片づけられねばならぬ。彼等と彼等の生活と彼等の個性は、建て物のための單なる建築材料に過ぎない。彼等の上

には無限に高く超人が立つ。すなはち一切の事が許され、殺人さへも許されてゐるところの英雄が立つてゐるのだ。彼自身、自分に取つての神である。彼は自分の命令を自分から受けてゐる。彼は他人の生死に對する權利を持つてゐる。半ば發狂したキリーロフは、もつとそれ以上に進んでゐる。彼は長いあひだ自己の神すなはち我儘な自我を求めて、終にそれを見出すことが出來た。彼は人々に、この神を敎へ込まうと思つてゐる。彼はスタウローギンに云つた、「そのとき新しい生活が來る。そのとき新人が來る。その時一切のものは新しくなる。その時になつたら歷史は二つの部分に分れるだらう。すなはちゴリラから神の滅亡までと、神の滅亡から……」スタウローギンは冷い薄笑ひを浮べながら直ぐにその後を引き取つて云つた、「ゴリラまで」と。キリーロフは冷靜につゞけた、「神の滅亡から大地と人間との物理的變化までだ。その時人間は神になるだらう。そして肉體的に變化するだらう。世界も變化するだらう。一切のものが變化するだらう、思想も感情も」と。

衒學者であり馬鹿者中の馬鹿者であるシガリョフさへ、人間の幸福の建設に就いての問題に頭を突つ込んでゐる。「彼は、問題の究極的解決として、人類を二つの不同な部分に分けることを提案した。而して人類の十分の一は、個性の自由を獲得し、殘りの十分の九に對して無限の權利を持つ。が、その十分の九は、個性を失つて家畜の群れに類するものにならなければならぬ。そして、無限の服從に於いて幾度かの更生によつて、原始樂園時代のやうな原始的無邪氣さに到達しなければならぬ、尤も勞働はしなければならないけれども。」

四

この種の粗野な社會改造案と一緒に、ドストエーフスキイに於いては、一つの偉大なる問題が結合されてゐた。それは人間の使命は何に存するか？　自由にか、それとも隷屬にか？　と云ふ問題である。この問題はドストエーフスキイの凡ての判斷思索の中軸である。彼は自由を恐れると共にまた隷屬を憎んでゐる。彼は、この矛盾から脫することが出來なかつた。自由は人間を壓迫しないが、結局、自由が伸張されるやうな何ものもないと云ふことを彼は知つてゐた。個性はその自由の名に於いて、打算や利益に對抗し得るばかりでなく、神そのものにも對抗することが出來る。自己の自由、自己の我儘を假令ひ野蠻な無批判な形式に於てでも實現することは、人間の最も深い要求である。それがラスコーリニコフやスヴィードリガイロフの場合のやうに、殺害または冒瀆に訴へることがあつても。だが、こゝに、その實在の抽象化に於いて、個性は神又は神性の觀念とぶつつかる。そこでドストエーフスキイは、人間の孤獨から來る恐怖に陷つた、そし

て再び人間を、良心と苦痛と信仰との束縛のもとに引き渡さうとしてゐる。然るに是等の束縛はその實際の肯定を神に於いて有するところのものである。それがため無限の自由に向つて邁進してゐる個性は、それが彼に取つての主なる障礙であり、彼の欲望に取つての主なる躓きの石であることを感じてゐる。それがため、宗教的問題が常に第一義的の地位を占めてゐる。一切のものは皆この問題を中心として動いてゐる。ドストエーフスキイから見れば、これらの問題は一八六〇年代および七〇年代の嵐の如き運動の中心でもあつた。すべての運動の中心には、神があり、神についての問題があり、人生の意義についての問題がある。ドストエーフスキイに取つての此の最も貴重な最も眞面目な思想を、イワン・カラマーゾフは殆んど反語的に表明してゐる。

だがこれらの問題は最も深くドストエーフスキイ自身のうちに宿つてゐた。彼はそれらの問題を檢討するに當つて、天性ヒステリー的であり無批判的であるにも拘らず、驚くべく嚴正なる論理を見せてゐる。神は存在するか？　と彼は自ら問ふてゐる。トルストイは、何らかの神が存在することを知つてゐるが、たゞ如何なる神であるかを知らないだけである。然るにドストエーフスキイは何も知らない。彼はたゞ、苦しさうに考へ、そして求めてゐる。同情深き神の觀念と人間の苦痛とは調和さるべきか？　と彼は自ら問ふてゐる。彼自らその心の奥に於いてこれらの觀念を調和することができないのは明白である。だが彼はそれを調和しようと熱烈に願つた。イワン・カラマーゾフは云つてゐる。「私は南京虫だ。何のために凡てがこのやうに作られてゐるかゞちつとも理解できないと云ふことを、謙卑の情を以つて自認する。おゝ私の憐むべき地上のユークリッド流の智力によつて、私はたゞ苦痛があると云ふこと、その責任者は存在しないと云ふこと、一切のものは互ひに直接生み合つてゐると云ふこと、總てのものは流動し、平等化されてゐると云ふことだけを知つてゐる。だが私がそれを知つてゐると云ふこともユークリッド流の譫言に過ぎない。それによつて生きることを私は承認出來ない。責任者がないと云ふこと、それを私が知つてゐると云ふことが私に取つて何であらう？　私には因果應報が必要だ。でなければ私は自滅する……」

人間の苦痛に關する問題は、ロシヤの作家に於いてもヨーロッパの作家に於いても、ドストエーフスキイに見るが如き大きな驚くべき問題となつてゐない。彼には、彼の地上の憐愍には應報が必要であつた。しかもどこで何時と云ふ當てもないやうな無限の中に於いてでなく、この地上に於いて應報が必要であつたと云ふことによつて、彼はあだかも個性の我儘を辯解してゐるかのやうである。神に對するこの謀叛を辯解してゐるかのやうである。この謀叛は、彼の凡ての作中人

物に取つて特色的であり、また必要であるが、併し彼はどこまでもこれを固持することはしなかつた。彼はそのヒステリックな天性によつて、人間の自由に對して頭(かうべ)を垂れると同時に、またそれを憎んでゐるが、神に對しても、冒瀆的に對してゐるかと思ふと、また絶えず神の答へを求めつつ、神を呪ひつゝ、或ひは神の前にひれ伏しながら宗教的に對してゐる。人間の自由に對しても彼は同じ態度を取つてゐる。これ以上神聖な何ものもないが、またこれ以上恐るべき嫌惡すべき何ものもない。それは何故かと云ふに、ドストエーフスキイの心には、無政府主義者(アナーキスト)と同時に隷屬と自卑と自滅との歡樂を認識し得る奴隷が宿つてゐたからである。

彼は自由と信仰との恐怖を、たとへ最後までそれらの魅惑から脱することが出來なかつたとは云へ、堪え忍ぶことが出來なかつた。

五

ドストエーフスキイは、ロシヤ國民に對する見解に於いてスラヴ主義者と最も近い。この見解を、彼はプーシキンに關する有名な演說のうちに餘蘊なく述べてゐる。彼はその演說に於いて、自分の空想を自由に走らせた。彼はロシヤ國民が抱神者であると云ふ思想を鮮かに熱烈に表明してゐる。ドストエーフスキイはプーシキンの記念祭に於ける此の有名な演說に於いて、先づ第一にピョートル大帝の改革に憑據してゐる。この改革は初めは最も卑近な功利的意味に於いて起されたと云ふことを容認しながら、同時にピョートル大帝はその思想を段々發展させて行くうちに、疑ひもなく或る隱れたる感覺に從つたと云ふこと、そしてその感覺は大帝を單なる卑近な功利主義よりは疑ひもなく遙かに遠大な將來の目的に引きつけたものであると、ドストエーフスキイは考へてゐる。然るに彼は、この目的が何であるかをも暗示することなく、「或る隱れたる感覺」の豫言的內容をも暗示せずに、直接次のやうな斷案に移つてゐる。すなはち、「ロシヤ國民も單に一つの功利主義から大帝の改革を受け入れたのではない。ロシヤ國民は疑ひもなくその豫感によつて直ちに卑近な功利主義よりも遙かに高尙な遠大な或る目的を直感し、この目的を同じく無意識的に、併し直接に全く生々と直感して、改革を受け入れたのである。」「當時、我々は一度に最も生活的な結合に向つて、全人類的結合に向つて邁進したではないか？我々は敵愾的(それは當然ありさうに思はれたが)でなく友誼的に、充分の愛をもつて我々の心に他國民の天才を受け入れた。我々は本能によつて、殆んど第一歩から差別を融和したり、赦したりしながら、特に民族的差別をせずに凡てのものを一緒に受け入れた。そしてそのことによつて、偉大なるアリアン人種の全民族と結合せんとする我々の準備と動向とを證明した。實際ロシヤ人の使命は全ヨーロッパ的であり

全世界的である。本當のロシヤ人となること、全きロシヤ人となることは、(結局このことに注意して貰ひたいが)恐らく全人類の兄弟となること、もし欲するならば全人となることを意味する。」

ドストエーフスキイは、更にロシヤがこの二世紀のあひだに成し遂げたことに就いて、またロシヤは恐らく自分自身によりも遙かに多くヨーロッパに奉仕して來たと云ふことに就いて語つてゐる。ロシヤは、愛のために、自己のクリスト敎的柔和のために奉仕した。そして最後まで奉仕するであらう。なぜならヨーロッパは既に精神的に滅亡して、そこにはたゞ聖なる墓碑と聖なる死人とが殘つてゐるだけだからである。それ故に人類のクリスト敎的更生の使命は、全然我々の掌中に存するのであると。

ドストエーフスキイは、讃美歌のやうにその講演を結んでゐる。すなはち、「以上に述べたことは自負心と見えるかも知れない。我々の貧弱な國が、我々の粗野な國がさう云ふ運命を果して擔つてゐるのか？　我々は人類に於いて新しい言葉を表明すべく豫定されてゐるのか？　斯う考へる人があるかも知れない。だが私は、經濟的榮譽に就いて云つてゐるのではない。また劍や科學の榮譽に就いて云つてゐるのでもない。私は單に人間の同胞愛に就いて語つてゐるだけである。ロシヤ人の心が凡ての國民の中で、全人類的結合に最も多く使命づけられてゐると云ふことだけを語つたのである。そしてその痕跡を私は我が國の歷史の中に、又我が國の才能ある人々に於いて、特にプーシキンの藝術的天才に於いて見るのである。我が國土が貧弱なら貧弱でもよろしい。だが、この貧弱な國土を『クリストは祝福しつゝ奴隷の姿で巡歷した』ではないか？　なぜ我々は彼の最後の言葉を理解することができないのか？　彼自身、馬槽(うまぶね)の中に生れたではないか……。」

如何にも卓拔な言葉である。だが我が國の貧弱さに對するその侮蔑も卓拔である。後に至つてドストエーフスキイは、この思想を說明する一文を書いたことがある。その中には、私の考へによれば、彼の演說の祕密が隱されてゐる。その演說の本當の裏面が、またその演說の人を眩惑させるやうな感動の原因が隱されてゐる。それは次の通りである。「我が貧弱な不しだらな國土が經濟的および政治的に西歐のやうにならない限り、高尙な希求を包有することが出來ないと斷定するのは愚の骨頂である。精神の根本的道德的寶玉は、少くともその本質に於いては、經濟力と闘るところはない。我々の貧弱な不しだらな國土は、その上流階級のほかは、みな一人のやうに結束してゐる。八千萬の全住民は、精神的に結合してゐる。かう云ふことは勿論ヨーロッパのどこにもないことであり、又あり得ない。だからこの一事を以つてしても、我々の國土が不しだらだと云ふことは出來ない。嚴密な意味に於いてさへ、我々の國土が貧弱だと云ふことはできない。」

彼は更にかうも云つてゐる、「我々は今日の如き我々の經濟的貧弱さに於ても愛の力を包有することが出來ると斷言する。今日の如き貧弱の時代でなくとも、たとへば拔都（バツー）の侵入後にあつたやうな、或ひはロシヤが國民の一致結合によつて救はれた內亂時代の破壞後にあつたやうな貧弱さに於いても、愛の力を包有することが出來る。」

これはもはや民族的神秘主義である。これはスラヴ主義者のホミャーコフ、アクサーコフ、ダニレーフスキイの思想であつて、しかもそれが二乘され三乘されたものであり、病的に感激した想像力の幻想的な光輝で照明された思想である。

ドストエーフスキイの小市民性と國際性

エル・ヴォイトローフスキイ

一、トルストイとドストエーフスキイ

『復活』の主人公ネフリュードフがカチューシャ・マースロワの事件で辨護士のファナーリンと相談してゐる最中、その室內へ辨護士の妻君が急いで入つて來た。この場面を無抵抗主義者のトルストイはどう描いてゐるか？

「部屋の中へ、背の低い、恐ろしく醜い、獅子ツ鼻の、骨ばつた、顏の黃色い女が急ぎ足で駈け込んで來た。それは辨護士の妻君で、自分の醜いのを氣に病むやうな樣子が少しも見えない。彼女は頗る獨特な化粧をしてゐただけでなく、何だか知らぬがビロードや絹物や黃淡色や綠色やをごて〳〵と着飾つてゐた。が彼女の薄い髮の毛は、捲上げられてゐた。かうして彼女は勝ち誇るやうに應接室へ飛び込んで來たのである……。」

こゝでトルストイは、ファナーリン夫人に對する嫌惡の情を少しも隱してゐない。彼女の家庭も何だか厭な小市民的なものである。そこでは一切のものが薄つぺらで、慌たゞしく、ごて〳〵してゐる。彼女を見ただけでもトルストイは、堪らない憎惡を起し、それが忽ち無抵抗主義の誓ひと戒律とを突き破つて、ファナーリンにまで素町人と云ふ侮蔑的な刻印を捺してゐる。一生のあひだ數々の門閥的肖像畫や階級的傳統とともにカレーニンやボルコンスキイらの間に住み慣れてゐるトルストイに取つて、下卑た身振りと、ごて〳〵した衣物を着飾つた獅子ッ鼻の女は、家長的生活の緩やかな流れを荒々しく破壞する醜い社會の具現と思はれたのである。無抵抗主義の戒律に反して、階級的憎惡心はトルストイに、雜階級者への深い嫌惡の情を注ぎ込んでゐる。ネクラーソフに對し、特にドストエーフスキイに對する彼の態度もそこから來るのである。『カラマーゾフ兄弟』が出て間もなく、ゲ・ルサノフのところでトルストイと次のやうな會話が行はれた。

「あなたは『カラマーゾフ兄弟』をお讀みになりましたか？」

「仕舞ひまで讀み通すことが出來なかつた……。實際ところどころ素晴らしい點もある。だが全體としては、全體としてはひどいものだ。一種の作爲された文體、絶えず新奇な性格を探さうとするあの焦りかた……。」

「この小説の缺點は、十五歳の少女を初め凡ての主要人物が一つの言葉で、作者の言葉で語つてゐるところにあると思ひます、」と私は云つた。

「彼等は作者の言葉で語つてゐると云ふだけではない、」とトルストイははげしく叫んだ。「彼等は何だか不自然な、無理に作られた言葉で話して居り、作者自身の思想を表明してゐる。」

（ゲ・ルサノフ著『ヤスナヤ・ポリヤーナへの旅』――一八八三年）

それから二十七年を經て、ちようど臨終の二週間前にトルストイは、ブルガーコフとの談話で話しが『カラマーゾフ兄弟』に及んだ時、ドストエーフスキイに對する自分の態度を、より鮮明に決定した。

「これは何と非藝術的な作だらう。」とトルストイは云つた。「たゞもう非藝術的と云ふほかはない。主要な人物はまるで爲すべきことを爲してゐない。だから月並にさへなつてゐる。それらの人物が爲すべきことや期待さるべきことをやらないだらうと云ふことは、小説を讀みながら前もつて分る。驚くほど非藝術的だ。すべての人物が一律の言葉で語つてゐる。」（ブルガーコフ著『トルストイの許で』）

「不自然な」そして「作爲された」ドストエーフスキイは、トルストイに對して、ちようどごて

ごて着飾つたファナーリン夫人と同じやうな、厭ふべき非藝術的な印象を與へてゐる。これは全く當然のことで、つまりドストエーフスキイは正眞正銘の反トルストイであり、トルストイは正眞正銘の反ドストエーフスキイであるからだ。この兩作家の有機的な本性は斯樣なものであつた。

トルストイは全く完成された、固定した、夢のやうに緩やかな家長的生活のうちに浸つてゐる。そこでは堅實に愛し、確信を以つて行動し、自分自身の土地を確つかりと踏みしめてゐる。然るにドストエーフスキイに於いては、物狂ほしい事件の交替と限りなき雜踏とヒステリーと破局とがあるのみだ。

トルストイの『アンナ・カレーニナ』と『戰爭と平和』の作中人物は三百人にも達してゐるが、すべては彼等自己の地位と自己の役割とをちやんと心得てゐる。彼等は決して迷ふことがない。また如何なる突發事件も許さない。然るにドストエーフスキイになると、矛盾の深淵で終始してゐる。彼の作中人物が何を語り何を爲すかは決して分らない。或ひはトルストイが云つたやうに、「彼等が爲すべきことや期待さるべきことをやらないであらうと云ふことは、小說を讀みながら前もつて分る。」

トルストイ作中の人物性格は、はつきりとしてゐる。一人の惡漢もない。が、ドストエーフスキイ作中の人物性格は夢幻的であり、虛僞であり、そして永久に假面を被つてゐる。ドストエーフスキイ自身、彼のヒーローが如何に行動するかを知らない。事件の慌たゞしい疾走の中では彼等の名前さへも縺れ合つてゐる。

トルストイのヒーローは、堅實に永く愛し合つてゐる。しかも、健康な美しい女を愛しつゝ美しい廣大な莊園の中に住んでゐる。が、ラスコーリニコフは、墓のやうな部屋の中に住んで、不具な娘に戀してゐる。つまり彼女が不具であるがために彼女に戀してゐる。

「病める彼女は全く虛弱い娘であつた。乞食に物を施すことを好んだ。そして修道院のことをいつも空想した。この事を私に話し出すと直ぐに涙に咽んだ。さうだ……さうだ……私は覺えてゐる……よく覺へてゐる……彼女はそのやうなお馬鹿さんであつた。あのとき私は何のため彼女に愛着したのか全く分らない。多分彼女がいつも病人であつた爲めだらう……假りに彼女がもつと、ちんばであり或ひは佝僂であつたら、私は恐らくもつと彼女を愛したであらう……（彼は物思はしげに微笑んだ）その通りだ……まあ謂はゞ一種の春の幻想であつた……」（『罪と罰』）

トルストイは主人公の一つの事實も一つの思想も見落さなかつた。その誕生から墓に至るまで多くの卷を重ねて主人公の運命を注意してゐる。或る作品の如きは、十年づゝも推敲した。もつ

と長くかゝつたものもある(『ハジ・ムラート』)。さう云ふ作品は一年に十六ページづゝしか出來なかつた。然るにドストエーフスキイの『伯父の夢』の中に百ページに亘つて描かれてゐる事件は僅かに三十分の間に起つた出來事である。ドストエーフスキイは、四年間に『祖國雜纂』と『現代人』とに十二種の長篇を掲載したほかに、幾つかの短篇も下書きした。

トルストイの作中人物は、いつも美しい着物を着てゐる。彼等は洗練された言葉と立派な經歷と保證された收入とを持つてゐる。しかるにドストエーフスキイの作中人物は、大部分貧者であり淫賣婦であり、罪人である。彼等は粗野な大道の言葉をもつて語り、いつも金錢に窮して居り、宿を持たないことも屢々である。けれども彼等は、トルストイの作中人物に對して、新しい社會的環境と新しい言葉の人々であると云ふ特徴を持つてゐる。このことをドストエーフスキイはよく知つてゐた。一八七一年に彼が貴族文學のことに就いてストラーホフに送つた手紙にかう書いてゐる。

「御存じの通り、これはみな地主の文學ではないか。この文學はもはや云ふだけのことを云ひ盡して了つた。特にレフ・トルストイの文學は素敵だ。だがこの最高峰の地主文學は最後のものであつた。地主の文學に代るべき新しい言葉はまだ一度もなかつた。レシェトニコフ等は何も云はなかつた。が、とにかく、藝術上に於ける何らかの新しい言葉の必要性に就いての考へを表明した。たとへ醜い形に於てなりと。」

ドストエーフスキイは、ネクラーソフやサルツイコフやオストロフスイとともに、地主に代つて出現した新人の闡明者である。ドストエーフスキイの藝術は、資本主義的精神の要求に對する應答であつた。そしてすべての作品が都會の穴倉と市街の憂鬱と不安とに充滿してゐる。トルストイの作中人物の世界は莊園である。靜かな平和な貴族の莊園である。が、ドストエーフスキイの作中人物の領分は、大きな六階建ての石造家屋である。そこには雜階級者と官吏、娘と淫賣婦、夢想家と罪人、貧民と狂人とが一杯すし詰めになつてゐる、そしてそれらの人々は、常に惱ましい矛盾と重苦しい惡夢のやうな恐怖の精神に囚はれてゐる。彼等の背後には、一家代々の地所もなければ遺產もない。朝から晩まで彼等はパンと金とを求めつゝもがいてゐる。彼等に於いては總ての事が刹那的であり偶然的であつて、絕えず不安な夢に飽滿してゐる。今日は窮迫と絕望との搾木にもがいてゐるかと思ふと、明日は幸福なる不意の偶然事が彼等を眩惑するやうな高さにまで持ち上げることもあり得る。偶然と金錢とが巾を利かすところでは、一切のことが可能であり、現實的であり、また一切のことが許される。

ドストエーフスキイのヒーローたちに取つては、金錢は盲目的に無批判に働くところの粗野な然し强い力である。或る時は人殺しのペトルーシャや女中のマーシャの手に落ちたり、或る時は突然馬鹿者のバリザミーノフの手に渡つたりする。ドストエーフスキイに於いては、金錢は資本主義の空氣である。この空氣は目立たない毒藥のやうに彼の作中人物の血管にこつそり入り込んで、彼等を永久の不安で滿してゐる。金錢の渴望で、黃金を約束する恐ろしい可能性の渴望で疲れた彼等は、絕えず謀叛し發狂し、偶像と障壁とを破壞し、倒れては又飛び起き、そして再び憐むべき惡夢の深淵に沈んでゐる。

かやうにドストエーフスキイに於いては、市民の資本主義的心理が、ラスコーリニコフやスタヴローギンやカラマーゾフの心理が、ものくるほしい混沌たる對立の世界で鍛錬されてゐる。

二、資本主義的樣式

ドストエーフスキイは純然たる雜階級者であつた。典型的な餞ゑたる知識階級の彼は、自ら「文壇のプロレタリヤ」と稱してゐた。そして度々手紙の中で訴へてゐる。「私は貧乏ゆえに金のために急いで書かねばならない。從つて健康を害することになるのだ」。

この金錢の重苦しい經濟的支配は、ドストエーフスキイをしてプーシキンの當時に見るが如く金力に關する問題に直面せしめた。そして彼を資本主義的對立の澱(おり)の中に浸した。彼は貧苦と金錢との革命的意義をよく理解してゐた。このことをペレヴェルゼフはドストエーフスキイの藝術に於いて最もよく評價してゐる。

ドストエーフスキイはその文學的事業の上に、その思想の上に、またその日常生活の上に、都會の緊張した壓迫を病的に感じた。それは屈辱と罪惡と不意の變化とが層々相重つた壓迫であつた。彼はこの重苦しい混沌たる對立の世界を、その小說のうちに刻みつけたのである。彼は資本主義的生活の一切のリズムと、金錢の非人格的な無限の支配とを、天才的に捕捉した。この支配は、內部的にも外部的にも、またフランス人をもロシヤ人をもマレー人をも、職業や才能や年齡の差別なく一つの經濟的相貌の下に、劃一的に均(なら)してゐる。この特殊の資本主義的樣式(スタイル)がドストエーフスキイの作品に於いては、題材と人物の如何に拘らず獨自の生活を營んでゐるやうである。もつと適切に云へば、ドストエーフスキイの各人物は、この資本主義的樣式に圍繞されつゝちようど地球がその大氣(アトモスフイア)を背負つてゐるやうに至るところに此の樣式を擔つてゐる。

このことは、ドストエーフスキイのヒーローたちの精神生活に於いて、彼等が常に恐怖と期待

との二重壓迫の下に生きてゐることによつて明かである。あだかも彼等は今にも發覺すべき或る恐ろしい犯罪をおこなつたかのやうである。斯樣な感じを持つてゐるのはラスコーリニコフやスタウローギンばかりでなく、ラゴージンも、ナスターシヤ・フィリッポウナも、アリョーシャも、イワン・カラマーゾフも、ムイシュキン公爵も、ドストエーフスキイの作中人物はみな、このやうな不安な緊張の狀態にある。

これを單に都會の影響のみに歸することは出來ない。都會は綜合し、機械化しつゝ自動の特質を附與する。これはちようどトルストイが『復活』に於いて、人間が通行人に變じたことを、魂のない機械の疾走のやうに認めたところの特質である。だが、ドストエーフスキイのヒーローが呼吸してゐる補充的空氣は、蓄積の渴望から、果しない成長への欲求から、發展しつゝある競爭の恐怖から生じたものである。そこでは飛躍と力との感情が、或るおずおずした驚駭の情と結びついてゐる。この狀態を我々は、ドストエーフスキイの總ての小說に於いてばかりでなく彼の個々の感情にも認めるのである。ドストエーフスキイに於いては、感情と云ふ感情は、すべて限りない成長に向つて驀進してゐる。が同時にまた、自分自身を蝕み且つ否定してゐる（大ゴリャドキンと小ゴリャドキン）。これに依て彼の作中人物の感情と云ふ感情はみないづれも資本主義的精神の生活に參加して、自ら成長し向上しつゝ、自分自身の獨特な生活を營んでゐるかのやうである。ラスコーリニコフの心理學的興味は、あの氣味惡い、魂を燒きつくすやうな欲望のうちに存する。その欲望は結局、彼の意圖を支配して殺害を斷行せしめ、同時に自身を破滅に運命づけてゐる。ラスコーリニコフは宿の女主人の不具な娘を愛してゐる場合でも、なほ自分がかの不可解な衝動の支配下にあるやうに感じてゐる。「私はあのとき何で彼女に愛着したのか全く分らない。たとへ彼女がもつと跛者であり、佝僂であつても、私は恐らくもつと彼女を愛したであらう……。」

これがドストエーフスキイの作品に於いて絕えず震動してゐる生物學的な基本の絃線である。彼は永久的不安と永久的誘惑と恐怖との支配のもとに、人生を、あたかも周圍の世界とばかりでなく、自分自身との絕え間なき戰ひであるかのやうに描いてゐる。この二重性の哲學、告白と秘密との此の永久的相尅は、そこから來るのである。

ドストエーフスキイの文學的樣式の單調な躁急な特質もこの單調な社會心理的調子から來るのである。トルストイにはドストエーフスキイの總ての作中人物が一つの言葉、すなはち作者の言葉で語つてゐるやうに思はれた。これは一面に於いて眞實である。ドストエーフスキイの言葉は

資本主義時代の言葉である。すべての印象派と象徴派と未來派とは、その源をこの資本主義時代から引いてゐる。わがロシヤのモダン派がドストエーフスキイに對してあれほど深い牽引を感じたのは無理もない。またブルジョア・ヨーロッパが擧つて、ラスコーリニコフやカラマーゾフに就いて話すことを、一種の儀禮と考へるのも偶然ではない。

ヨーロッパの讀者がドストエーフスキイの小説の中で魅惑を感じてゐる點は、その題材でもなければ抱神者としてのロシヤ國民の理念でもない。つまり、資本主義的殿堂の不安な空氣を甚しく漲らせてゐるあの重苦しい秘密に、あの暗い精神の崩壞に引きつけられてゐるのだ。自己の民族的相貌を熱烈に愛し、自己の舊約的舊信仰を誇りとするこの作者は、資本主義的偶然事の不可思議な戯れによつて、國際的様式（インターナショナル）の影響に對して最も敏感な最もなびき易い作家となつてゐる。ドストエーフスキイの此の國際性のうちにこそ、家長的なトルストイに取つてあれほど餘所々々しく、あれほど作爲的に、あれほど非藝術的なものに思はれたところのものが含まれてゐるのだ。この點に於てドストエーフスキイは、神秘的な「二重人格」の抱擁から脱することが出來なかつた。この「二重人格」はブルジョア・ヨーロッパの否定に對する答へとして、ドストエーフスキイをブルジョア様式の創造者にして了つた。ドストエーフスキイの作品に於ける、スラヴ精神の深さと地獄のやうな情熱とに魅せられた貧しいヨーロッパの小市民は、自分が「リャムシン流の詐欺師」（『惡靈』に誘惑された阿呆者であることに氣づかない。この詐欺師はその本質に於いてロシヤの雜階級者（ドストエーフスキイ）の巧みな指で完成された、フランスのマルセーユと安價なドイツのポルカとの合の子に過ぎないのである。ブルジョア・ヨーロッパに見るドストエーフスキイへの熱烈な興味は、フロイドに對する流行熱と同一の出所から來てゐる。この二つの熱中に於いて、ブルジョア的マキアヴェリズムへの秘密な貢献が表はれてゐるのだ。

と云つて私は、之によつてドストエーフスキイの名に侮蔑的な言葉を與へようとしたのではない、彼のすべての作中人物は、すでに私が指摘したやうに同じ處方箋によつて作られてゐる。つまり恥づべき小市民的スウィードリガイロフ主義とヒロイックな衝動との合ひの子である。ドストエーフスキイ作中の人物性格はみなさうである。と云ふのは、ブルジョア的文化の精神と様式とがさうであるからだ。勿論リャムシン自身も、彼の國際的詐欺も、すべてのブルジョア的小市民性もドストエーフスキイの革命的性質に取つては甚だ厭ふべきものであつた。けれども新しい意識と新しい文學的様式との探求に於いて、ドストエーフスキイは自分の意志を外にして國際的様式に向つたのである。この様式は、その當時ブルジョア・ヨーロッパ生活の最高段階への移行を意味し

てゐた。私がこんなに長くドストエーフスキイの國際的特質に留意したのは、今でもまだ半可通な「マルクス主義者」を少なからず見受けるからである。彼等は、ドストエーフスキイがロシヤ社會の最も偉大なる「謎」の一つであることを確信して居り、またこの「謎」の解決に苦まない限り、ロシヤ文化のために貢献することは出來ないと確信してゐる。ところが此の民族的「謎」の解説は最も國際的なものである。

勿論ドストエーフスキイは自ら純粹のスラヴ主義者を以て任じ、そのことに就いては度々『作家の日記』の中に表明した。勿論『作家の日記』も、著しい程度に於いてドストエーフスキイの藝術的性格に對する社會評論的註釋となつてゐる。彼はその靈感の燃燒に當つては僅かな讓歩も許さなかつた。彼の友人や同志も屢々彼の容赦なき論爭的鋭鋒の打擊を蒙つてゐる。このはげしい論爭的熱情のうちに、彼自身のバイブル式な世界愛の教義に對する最も強い反駁が含まれてゐる。グロスマンの公平な言葉によれば、まだ死滅せぬパリサイ主義への最も破壞的な反抗に滿ちたこれらの熱烈な忿怒に溢れたページを讀むごとに、聖書の中の怒れる豫言者や罪を責むる先驅者たちの在りし日の面影が自づと思ひ出される。恐らく『作家の日記』はドストエーフスキイのすべての藝術作品にも增して「偉大なる怒りの書」と名づけても過言でなからう。たゞ惜しいことには彼の怒りは屢々的を外れて必要な點に向けられてゐない。この關係から云ふと、彼の『日記』の最後の數行は極めて教訓的である。

ドストエーフスキイは、その死の數日前に『作家の日記』の一月號を書き終つた。そしてオ・ミルレルの話しによると、ひどく興奮してゐたと云ふことである。それは、この號の『日記』の主題は彼に取つて非常に重要なものであつたのに、檢閲局は屁理屈をこねてそれを毀損することを敢てしたからである。特にドストエーフスキイは次の言葉の運命を危ぶんでゐた。

「さうだ、我が國の農民には信服を表することが出來る。なぜなら農民はそれに相當するからだ。灰色の粗服（農民のこと＝譯者）を呼んで、彼等の窮乏に就いて、彼等に何が必要であるかに就いて、彼等自身に問ふて見るがよい。さうしたら彼等は諸君に事實を語るであらう。そして同時に、我々もみな初めて眞實のことを聞くであらう。」

ドストエーフスキイの死後四十年を經て、農民たちは「自分たちの窮乏に就いて」語つた。そして彼等は幸ひにして、故文豪が期待してゐたとは全く異つた答へ（ソヴエート政權の意＝譯者）を得たのである。

藝術家及び思想家としての
ドストエーフスキイ

ア・ルナチャールスキイ

一

ドストエーフスキイが藝術家であり、而も偉大なる藝術家であるといふことを、今更疑ふやうな大膽な人は恐らくあるまいと思ふ。だからドストエーフスキイを例に取るならば、最近我邦で藝術家に就いて、他の見解を壓倒しないまでも兎に角騷々しく振舞つてゐる或種の見解が不成立なものであることを證明するのは、いとも容易なことである。

我々は屢々この講堂に於て（譯者註。本文はドストエーフスキイ記念祭の時の講演である。）藝術理論家達から、「藝術に於ける形式と內容とは不可分である」といふことを聞いた。その說く所に據ると、形式と內容とを互ひに區別することは陳腐である、藝術作品はその形式と契合する、藝術家は何よりも先づ「その作品

の造型者である」、藝術家たることはつまり形式の極致を探求することであると。

若しこの觀點からドストエーフスキイを觀るならば、彼は薄弱な藝術家である。彼の作品には、何等の完全な形式もない。却つて彼の作品の大部分は未成品であり、未完成であり、外觀的には洗練されてゐない。然しこの弱點はその藝術的內容の偉大さによつて完全に償はれてゐる。

我邦では大して勢力を持たないこの見解に就いて、天才的なマヤコーフスキイは曾て警句を言つたことがある。「或人に取つて、藝術上の形式と內容とは、「軍服と將軍」のやうなもので、何うでもよい」と。この定義に於て我々の考へは一見可笑しなものに見えるか知れないが、實際に於ては眞實に近い。藝術家の作品には、將軍なしの軍服のやうなものもあれば、制服を着た將軍のやうなものもあり、また軍服なしの將軍のやうな作品もある。

或藝術家はその作品の爲に最も華麗な最も優美な色彩と形式とを使つて、この豪華な衣裳をマネキンに被せたものもあつた。勿論其樣な作品は多くの外面的の美と外面的裝飾とを持つてはゐるが、要するにマネキンである。それは巧者な裁縫師の手で刺繡されたフロックを着たマネキンであり、また其樣な綺麗に刺繡されたフロックの外何にもそれ以上のものを與へることの出來ない裁縫師に過ぎない。一言でいへば、將軍なしの軍服である。

だが藝術家の中には疑ひもなく、數世紀に亘つて人間の縱隊を指揮しながら、而も自分は殆んど裸體で歩いてゐる「將軍」を持つところの藝術家もある。ドストエーフスキイの如きは卽ちそれである。彼は身裝のことなど殆んど考へない。彼の「將軍」は極めて屢々頭髮を亂したまゝで歩いてゐる。が、それでもドストエーフスキイは偉大なる藝術家たるを失はない。

ドストエーフスキイは誰でも知つてゐる通り四年間懲役に服したが、實際に於て彼は殆んど一生涯懲役にあつたと言つてもいゝ。彼の一生は恐るべき貧苦に伴はれた。彼は屢々、極めて屢々、パンのために、小說の一章々々を、全く推敲もせず、剩へ必要なほど完成もせずに、次から次と出版者の手に渡さなければならなかつた。この事に就いて彼は常に手紙の中で訴へてゐる。斯かる事情に於て、ドストエーフスキイが水晶の如き形式を、例へばプーシキンが我々に子守歌を歌つてゐるやうな形式を持合はさず、或はそれを探求しなかつたと言つて、彼を責める譯には行かない。然らば斯かる未完成の、未成品の、そして形式的に不完全な作品が、兎に角藝術の最高峯を占めてゐるといふことは、何うして之を說明すべきか。

チェーホフは或手紙の中で、自分と同時代の作家のことを大體次やうに言つた。「我々は形式の方面に於ては極めて巧者である。我々は凡ての事を極めて樣式的に描寫することが出來る。我々

は句、章、其他を如何に構成すべきかを知つてゐる。だが、我々に一つ無いものがある。最も主なるものが缺けてゐる。それは神である。換言すれば、我々が信じ得るところの、我々が無制限に献身的に愛し得るところの何物かが無い。我々は凡て困厄時代の子だから。」

私はこの場合驚く程適切な使徒ポーロの言葉を思ひ出す。「たとへ全世界の言葉を話し得るとも愛なくば喧騒なる銅鼓と選ぶところなし」と。玆に愛といふ語の下に意味されるところのもの、即ち生ける深き感情を多く廣く持つだけ、さういふ人は藝術家たることが出來る。たとへその作品の形式は不完全でも、その魂に力強い内容があるならば、さういふ藝術家は永久に測り知られぬ名聲を得ることが出來る。反對に若し單なる形式、つまり美しく高らかに響く銅鼓のみであつたら、さういふ藝術家は流行作家に過ぎない。彼は單に一時的名聲を博するに止まる。彼の爲に文學史は僅に一ページを割愛するかも知れないが、世界文學のパンテオンには斯かる作家は入らない。

ドストエーフスキイにはチェーホフが言ふところの「神」があつた。彼には、自己の體驗を自己の意識の三稜鏡（プリズム）を通して屈折させる、全く獨特の作風があつた。彼は、我々に取つて藝術家といふよりも、豫言者であり社會評論家である。それほど、自己の「神」に滿たされ、自己の思考形式に囚はれてゐた。藝術家と豫言者とは彼に於て不可分的に融合してゐる。

ドストエーフスキイは特に自己の事を、自己のために、自己を通して書いてゐるところの抒情的藝術家であつた。彼の凡ての小說物語は、彼自身の體驗を盛つた一つの火の流れである。それは祕められた自己の魂の連綿たる告白である。それは自己の內面的眞實を告白せんとする、熱烈なる欲求である。そして、これが彼の藝術に於ける第一の根本的契機である。第二の契機は、讀者に働きかけ、彼等を說得し感動させて、彼等の前に自己の信仰を告白せんとする不斷の欲求である。ドストエーフスキイの藝術に見る此の二つの特質は、彼に固有するもので、抒情詩が感動させられた魂の聲を意味する以上、他の抒情詩人に見ないところの特質である。

斯樣にしてドストエーフスキイは偉大にして幽玄なる抒情詩人である。けれども抒情詩人は必ずしも藝術家でなければならぬといふ譯ではない。彼は自己の體驗を、樣々な方法で例へば社會評論的形式に於て、說敎に於て、表明することが出來る。だが、ドストエーフスキイは自己の體驗を、告白を、直接の形式にでなく、抒情詩的・叙事詩的形式に表現してゐる。彼は自己の告白を、自己の魂の熱烈なる呼聲を、事件に就いての物語の中に盛つて、小說と物語とを書いてゐる。

彼の作品に接觸しつゝ、吾々は形式美の要求を全然拒否しなければならぬ。ドストエーフスキイは外面的の美を一向に考慮しない。彼の小說と物語とを見るがいゝ。その中の辭句は極度に無

技巧である。主要人物の大多數は同じやうな語法で話してゐる。

彼の小說構成を、その中の章の構成を見るがいゝ。それは非常に珍奇である。ドストエーフスキイに於ては小說の章の構成に際し、何處までが自由意志の役割で、何處からが單なる偶然の働きであるか、この問題を解決するだけでも興味がある。彼の小說は屢々最も奇怪な形式を取ることがある。だから、地質學者が唯或るエトナやフジヤマが如何にして生じたかを研究するやうに、ドストエーフスキイの小說を解剖するのも興味がある。

例へば、我々が最近記念祭を擧行したばかりのダンテと比べて如何なる差があるか。ダンテに於ては凡ての事が、全體から細部に至るまで、建築學的である。凡てが一定の計畫と確りした建築學的意志とに從つてゐる。

ドストエーフスキイの作品に於て我々は美しい叙景を見出さない。彼は自然の傍を平氣に通り過ぎてゐる。一言で言へば、私が既に述べたやうに、彼の作品には、外面的の美が無い。けれども何より重要なことは、ドストエーフスキイに於て我々は形式の如何を問はずに、內容の天才的な點に留意するといふことである。彼は彼に取つて不要な此の形式を避けてゐる。彼は急いで我我に働きかけ、我々を感動させ、我々の前に表白しようと驀進してゐる。是れが、ドストエーフスキイの藝術に於ける最も根本的なものを決定する最初の二つの動力である。だが、若し是等の特質のみに限られてゐるとすれば、ドストエーフスキイには、彼が爲して居るが如き叙事詩的藝術作品に於て吾々を惹付け、吾々を囚へるべき衝動は無かつたであらう。

ところが、彼に於ては自己の內的眞實を表白し表現しようとする凡ての欲求の上に、更に一つの根本的動機が高まつてゐる。それは生きんとする大きな、際限のない、强い欲求である。この熱烈な生活への欲求に對しては、凡てが跡方もなく拭去られる。丁度人が、一生中に體驗するよりももつと多くの資料が生の爲に費消されることを感ずると同じやうなものだ。この熱烈な、克服し難い生活への欲求がドストエーフスキイをして第一流の藝術家たらしめるのである。そして彼をして自身の中から偉大なる者と卑賤な者と、神と造物とを創造せしむるのである。

彼は自己のヒーロー、つまり彼の子であり、樣々な假面を被つた彼自身であるところの作中人物を生み出してゐる時のやうな緊張した生活を、彼自身の實際生活に於ては爲なかつたかも知れない。が、ドストエーフスキイはその凡てのヒーローと最も濃かな糸で繫がつてゐる。彼の血は彼等の脉管に流れてゐる。彼の心臟は彼が創造した凡ての人物の中に鼓動してゐる。ドストエーフスキイはそれ等の人物を單純に生み創造してゐるのではない。彼は苦痛の中に、心臟の急激な鼓

動と共に絶間勝ちな苦しい呼吸の中に、彼等を生み出してゐる。彼はそのヒーローと共に罪を犯し、彼等と共に湧立つやうな巨人的な生活を生活し、彼等と共に悔悟し、また彼等と共に自己の思想に於て天と地とを震動させてゐる。ドストエーフスキイには生きんとする欲求が最大限に固有してゐたから、人生の祕められた深奥を理解することが出來、豫言の能力もあつた。といふのは、若し我々が豫言といふ語に神託といふ概念を附與するならば、ドストエーフスキイの如く常に自己の內面的眞實を表明し、自己の最も深い體驗を告白せんとする魂は、最も多く神託の天分を具有するものだからである。斯樣な魂は人間及び人類の最も神祕的な運命を表現することが出來る。

ドストエーフスキイは生活的なものゝ可能性に就いて、卽ち如何にして彼は生活し得るかに就いての空想と幻想とに於て、その豫言的天賦を發揮してゐる。彼は益々新しい冒險を恐ろしい程具體的に自から體驗せんとする此の必要から、彼は何人にもまして我々を感動させるのである。

だが、ドストエーフスキイはそのヒーローと共に一切の事件を自ら體驗し、彼等の苦しみを自から苦しんでゐるといふことの外に、彼はまだ是等の體驗を味つてゐる。彼は自分の想像した生活を錯覺にまで具象化せんが爲に凡ての些事を絶えず觀察してゐる。是等の些事は、それを眞實の內面生活として味はふために、彼に取つて必要なのである。

も一つドストエーフスキイの藝術の特質を擧げなければならぬ。體驗に於ける「主觀」その物と體驗その物とが彼の興味を惹いてゐるだけ、彼はその作中人物を取卷いてゐる環境の叙述には餘り留意しない。彼は環境の傍を通り越しながら、急いで作中人物の思想の萬華鏡に、感情の音樂に讀者を引き入れようと努めてゐる。ドストエーフスキイを心理的作家と呼ぶのはそのためだ。

彼は『ステパンチコヴォ村』を書き初めてから、兄弟へ送つた手紙に斯う書いてゐる。「私は喜劇を書き初めた。仕事は進捗してゐる。だが喜劇の形式を放棄した。といふのは自分のヒーローと共に出來る丈長く生き、出來る丈多く彼等の事を物語りたいからだ。そして出て來たのは小說である。」ドストエーフスキイは短く書くことが出來ない。彼は故意に作品を引延ばしてゐる。それは彼がヒーローを創造しながら彼等と共に同じ生活を生活するからだ。その際ドストエーフスキイに取つては、彼のヒーローが何を爲てゐるかといふことが重要でなく、ヒーローが何を考へ、何を話してゐるかといふことが重要である。ドストエーフスキイは熱心な話家だ。彼の作には常に長い獨語と對話とが附物だ。だが、これでもつて彼は我々を人間精神に近づかしめ、その

奥底を覗かしめ、其所で何が爲されてゐるかを觀せしめるのである。

ドストエーフスキイは小説と物語を書いてゐるが、是等の小説物語は本質に於て劇（ドラマ）である。而も非常に舞臺に適した劇である。そこでは凡ての事が人間精神の體驗に基礎を置いてゐる。其他の事に就いてはほんの少しばかり傍を掠めるだけに過ぎない。人物の衣裳や舞臺に就いての彼の短い註はト書のやうなものだ。

それ故に、人間精神の體驗が何よりもドストエーフスキイの興味を惹いてゐる限り、彼を心理學者といふよりも、寧ろ彼の作品には心理學の材料を見出すことが多い。何故なら、心理學者といふ名の下には、普通人間精神を解剖し得るばかりでなく、この解剖から或種の心理學的法則を引出し得る人を意味するからである。

ドストエーフスキイが人間の心理を如何に取扱つてゐるかを理解する爲に、水の例でも取つて見よう。水に就いての完全な概念を人に與へて、水の凡ての性質を彼に會得せしめんが爲には、水と水蒸氣と氷とを示し、水の各成分を分解し、そして靜かな湖水、漾々たる河、爆布、噴水等が如何なるものであるかを、彼に示さなければならぬ。一言でいへば、水の凡ゆる性質、凡ゆる内的力學を示さなければならぬ。だが是だけではまだ足りない。恐らく、水の力學を理解せしめんが爲には與へられた可能性を飛越して、實際より百倍も壯大なナイヤガラを幻想的に想像させなければならぬ。そこでドストエーフスキイは、事實を超克して、人間精神をその測り知られぬ高さと説明し難い深さと共に明示しようと努めてゐる。丁度ミケル・アンゼロが人體を痙攣と苦惱のうちに扭ぢ廻してゐるやうに、ドストエーフスキイは人間精神を極度に誇張したり、又は痕跡なきまでに壓搾して汚泥と混じ、地獄の底に衝落したり、又は後で急に最高の天上に引上げたりする。この人間精神の飛躍によつて、ドストエーフスキイは、我々の注意を惹付けるばかりでなく、我々を囚へて、我々にまだ知られない新しい美を展開する。同時に疑ふべからざる精神の深奥を示しつゝ、我々の認識に極めて多くのものを與へる。

ドストエーフスキイは生きたいといふばかりではない。彼は生を樂しんでゐる、而も熱烈に、惱ましく、苦しいほど享樂する。彼の小説は凡て淫蕩の巨人的記録である。この事を彼自身よく解つてゐた。彼は人生の凡ゆる缺陷を歡樂のやうに味ひ試みてゐる。それが彼に悲痛をさへ與へることを彼自らも度々經驗した。

昨日はドストエーフスキイの遺した記録が發見されたが、その中に小説『悪靈』の中の、まだ印刷されたことのない二章が見附かつた、この二章は今に印刷されるだらうが、その中にスタヴ

ロギンの話した次のやうな言葉がある。「たとへ私の横面を毆つた男爵が、私の頭髪を掴んで私を扭ぢ伏せたとしても、私は恐らく何の侮辱も感じなかつたも知れない。」是等の章に於てドストエーフスキイは悲痛、犯罪、屈辱としての歡樂を最も明白に決定的に解剖してゐる。

度々述べられたやうに、性慾は藝術的創造の中心的動因である。同時に性慾は權勢慾や功名心の動因ともなる。この性的感情はドストエーフスキイの藝術に於て最も鋭く現はれてゐる。ドストエーフスキイは心の中にマドンナを抱きながら、安息日に淫猥な魔女と疾走した。そしてそこから彼はその魅惑的な筆を以て心の痙攣を描いてゐる。どんな小さな契機(モメント)でも、彼の心に歡樂として反映しなかつたものは一つもない。凡ての契機が幸福としてゞなく、又調和としてゞなく、最も悲痛なる體驗を含む淫蕩として彼の心に反映してゐる。

これ等の特質の現存するといふことが、ドストエーフスキイの「惡魔的なところ」である。これ程廣い、そして暗い翼の惡魔を有する作家が他にあり得るだらうか。勿論この點に於てバルザックも偉大ではあるが、然し彼はドストエーフスキイの如き極端な惡魔主義にまで達してゐない。

二

だが、ドストエーフスキイはこれだけには盡きない。これはまだ彼の全體ではない。何故ならドストエーフスキイは單に藝術家たるばかりでなく、思想家でもあるからだ。そして思想家としても彼は偉大である。然し、それは光明なる思想が彼に有るといふ意味ではない。若し然ういふ思想を彼に於て求める人があつたら、それはドストエーフスキイの最も弱い點に、彼の机の空つぽな抽出に觸れるやうなものである。思想家としてのドストエーフスキイには彼の魂の根底から流れ出すやうな特質のみが固有して居る。彼が表明する凡ての思想は、彼の魂の全體系に於て一定の大きさをもつてそれ〴〵の地位を占めて居る。

ドストエーフスキイは現實を歡樂に變ずることが出來る。彼は屢々その魅惑的な筆を穢らしい泥沼に浸して、この泥沼を享樂して居る。だが、それは決して彼がその泥沼を擁護してゐるといふ意味ではない。彼は寧ろ實生活の泥沼のために痛く苦しんでゐる。彼は、悲痛が贖罪的意義を有することを屢々考へた。凡ての人は苦しまなければならぬ。何故なら凡ての人は、その一つ一つの犯罪に於ける一つ一つの罪業のために責任を有するからである。犯罪は一般的であるが故に刑罰も凡ての人の上に落ちなければならぬ。これがドストエーフスキイの人生觀である。そのやうに考へながら彼は唯一つのことに對して反抗して居る。即ち無辜なる人の苦痛、特に小兒の苦痛に對して反抗してゐる。何人が無辜の人を苦しめることが出來ようか。これには神と雖も除外

することは出來ない。そこで彼はイワン・カラマーゾフをしてこれがために神に反抗させてゐる。けれどもドストエーフスキイは天上の世界をも限りなく愛する。それ等の世界は彼のために開かれて居る。彼は天上にも居つた。彼はレールモントフの魂と同じく、天上で天使が何を唄つてゐるかを聞いた。彼は實在の調和を理解し、直覺することが出來た。そこで生活の調和と贖罪への欲求とが彼を支配してゐる。それがまた彼をしてペトラシェーフスキイの仲間に走らしめ、ユートピヤ社會主義の魅力を感ぜしめたのである。彼はまた、人々は地上に於て新らしい王國を建設しなければならぬといふ思想を多分に持つてゐる。地上に於ける天國の理想、調和ある生活の理想は矢張りドストエーフスキイに固有する思想である。それ故に彼は……の壓迫と、またそれと密接に繋つた凡ての恐しい犯罪とを感じないわけにはゆかなかつた。彼は獨裁制を克服すべき唯一の道は、……手段であることを知つてゐた。彼が一旦この問題に就いて、「私は、集團的な全人である。この私の兩腕で以て大地を改造する。私は世界が何であらねばならぬかを世界に指令する」と言つてゐる時、それは何といふ限りない人間的驕慢であらう。だが、それと同時に彼に於ては謙讓の念も强かつた。自卑の念願さへあつた。何故なら彼は自卑の中に歡樂を見出したからである。この點に於て彼は或る種のマゾヒーズムの傾向さへ持つてゐた。

このパッシーヴな方面、卽ち悲痛への欲求、悲痛の中に享樂せんとする欲求、又は悲痛の中に忍從しようといふ欲求はドストエーフスキイに於ては獨裁制の壓迫の下に成長した。獨裁制はドストエーフスキイを懲役に遣はした。獨裁制の罪は作家の外面生活が斷たれたとか、彼に大きな肉體的及び精神的苦痛が加へられたとかといふ點に在るのでなく、寧ろドストエーフスキイの偉大なる魂の內部に、彼の傲慢な衝動と彼の人間的なものと彼の社會主義とを追ひ込んで、彼の魂をして、本質的に毀損された別な河床を求めしめたといふことが何より恐ろしい。

この河床は卽ち宗教であつた。それは啻にドストエーフスキイにとつてばかりでなく、ゴーゴリやトルストイの如き矢張り同じ獨裁制の下に不具にされた偉大なる魂にとつても同じことである。ドストエーフスキイの精神の流れは、謂はゞ頑强な獨裁制を廻避しながら、この河床に合流したのである。

徒刑はドストエーフスキイを卑屈にした。ドストエーフスキイは言つてゐる。「王の右手は私を罰したが、私はその手を接吻しようと思ふ。」また彼は親戚や「恩人」や「恩惠者」への手紙に於て、自分を忘れないやうに願つてゐる。自卑の調子に貫かれた是等の言葉や手紙を讀むのは殆んど忍びない位である。

縛られたプロメテウス――ドストエーフスキイは、決してプロメテウス流にゼウスを脅威しない。彼にとつて、反抗は寧ろ笑ふべき無力なものと思はれたのである。それ故にドストエーフスキイは忍從してゐる。そしてこの忍從を守ることに於て更に或る新しい誇りを求めてゐる。

ドストエーフスキイは堅實な正教の氣風を有する家庭の懷から既にキリスト教の前提を持つて生れた人である。今彼が自分の忍從を辨證しなければならなかつた時、キリスト教は彼にとつて最も適當な世界觀と思はれたのである。ドストエーフスキイは自己のキリスト教に最大限の獨特な革命性を引き入れてゐる。

獨裁制、それは暗い陰慘な地下牢のやうなものである。その中に入りながら諸君は薄暗い隅の方に誰かの肖像とその前に點つてゐる消えない燈明とを見附けるであらう。そしてこの板片に描かれた肖像の特徴を覗いて見たら、諸君はそれが痩せ衰へて哀愁に滿ちたキリストの顏か、またはその母の顏であることを見出すであらう。これが卽ち獨裁君主自身も祈つてゐるところの神と女神ではないか。ところで、それは一體何處から取つて來たのだらう。それは我々からだ。プロレタリヤからだ。それは約二千年の間苦しい鬪ひに於て、自分達の從順を實證すべき宗教を鍛え上げたところの下層社會から取つて來たものである。その宗教には幾許の怒りと復讐とそして人間精神の驚くべき毀損とがあることか。其處には唯世界の凡ての美に對する拒否と、同時に幸福に就いての幻想と、限りある或は限りなき歡樂に就いての幻想とがないばかりである。

ドストエーフスキイは現實社會とその頂點たる國家が彼の理想に矛盾するばかりでなく、キリスト教の理想たる教會にも矛盾してゐることを深刻に意識した。我々は『カラマーゾフ兄弟』の中で、或る修道士が「唯一の正しい權力は教會である。教會は何時か國家を呑み盡すであらう。そして教會のみが人間の精神と肉體とを統治するであらう。」と證明してゐる場面を想ひ出す。同じ考への人々によつて支持されたこの修道士は「さうなるだらう、さうなるだらう」と、叫んでゐる。曾てドストエーフスキイの遠い先驅者たるイスラエルとユダヤの豫言者達が、王の國の代りにエホバの國を待つてゐた如く、ドストエーフスキイがその勝利を期待してゐるところの此の教會は、今日の支配階級の教會ではない。それは虐げられ苛まれた人々の更生教會である。それは大訊問者の教會ではなく、眞のキリストの教會である。

原始キリスト教のロシヤ的出生は、その獨特の禁慾主義及びその獨特の矛盾と共に、ドストエーフスキイを强く惹きつけた。そして彼の燃ゆるやうな理想主義に恰好の地盤を與へた。同時に至高の權力に對する彼の卑屈な服從性を辨證した。

不節制と禁慾と自己犧牲とに優れた聖者、明滅する燈火の點つた瑩穴、殉教者と傳道師との偉大なる精神力、「罪を犯さざる者は懺悔せず、懺悔せざる者は救はれず」といふロシヤ式の深い表現、ドストエーフスキイに最も親近なる譬喩（放蕩息子、キリストの足に跪いた淫婦）凡てこれ等は懺悔と赦罪とに基けられてゐる。

だが凡てこれ等は珍奇な心理學的事實の集合に過ぎない。若し信仰が無かつたら、それは多少美しい考古學に過ぎないことを記憶しなければならぬ。ドストエーフスキイは信じてゐる。ドストエーフスキイは力の限り信じようと努力してゐる。然し一旦批評的思想が、不法に滿ちたこの世界の創造者と攝理者とに就ての概念の前に彼を立たしむるや否や、新たに精神的悲劇が始つて深刻な懷疑が彼を苦しめるのである。「私は神を受入れるが、彼の世界は受入れない。」といふイワン・カラマーゾフの公式は疑ひもなく神そのものを否定するものである。何故なら神は世界の媒介によつてのみ我々に知られてゐるからである。神はこの苦痛の世界を作つた創造者であるが、その世界に於てドストエーフスキイの魂は血の涙に咽びながら、肉慾に耽溺してゐる。斯かる神は彼にとつて正義として受入れられることは出來ない。

ドストエーフスキイは、イワンの口に注ぎ込んだ自分自身の批評から何を以て己を庇つてゐるか。それはアリーシヤが説いてゐるところのキリストによつてゞある。キリストは自ら苦しんだ。そしてドストエーフスキイはキリスト教の内部に藏されてゐる矛盾に逢着してゐる。それは神自身不完全であり、神自身受難者であるといふ思想である。キリストの仕事は事實上次のことを肯定してゐる。即ち神は世界を創造し、アダムを創造しつゝ誤つたといふこと。そしてこの過失を償ふために神は自分の獨り子を、實質に於ては自分自身を恥づべき刑罰に附さねばならなかつたといふ事實である。ドストエーフスキイはつまりこのキリスト教的妄誕の蔭に隱れてゐるのである。

獨裁制はドストエーフスキイの運命に破壞的衝擊を與へ、彼をこの道程に向はしめたが、彼の精神は屢々眞すぐにならうと努めてゐる。彼の柔和な、聰明な世界觀の根底には地獄の火が燃えてゐる。これこそ打鐘と共に福音を全世界に轟かすところの天才的な鐘の特質である。獨裁政治はドストエーフスキイを不具にするために凡てのことをなしたが、不具にされたドストエーフスキイは偉人として殘つた。

ドストエーフスキイは、たとへ神祕と宗教とキリスト教とを介したとは言へ、兎に角社會的調和の偉大なる探求者であるが、更に亦彼は愛國者でもあつた。ロシヤは彼によつて恰かも抱擁し

難い矛盾の大海の様に一つの限りない精神として描かれた。然しこの野蠻な、無知な、文明の尻尾に喰つ附いてゐるピョートル大帝や幾多の受難者の國は、ドストエーフスキイによつて世界に或る新しい光明なる偉大なるものを與ふべき大なる建設の力あるものとして描かれた。即ち彼はロシヤが苦痛の中に光明なる未來の人類の偉大なる目的を達成すべき此の困難なる偉業に飛躍するであらうことを確信してゐたのである。

祖國の神祕的本質に對する信仰は、本來東方に始まつて、その嵐のやうな表現を聖書の豫言者の間に見出したとは言へ、近世に至つて更に西歐から東方へ漸次移動してゐる。即ちフランスは大革命期に自ら稱して世界の光明、人類の救主と表明し、宮廷に宣戰して下層民に平和を布告した。ナポレオンのために掠奪されたプロシヤに於て、偉大なるフィヒテは宣言して、哲學者と詩人の國民、幽玄なるゲルマン民族は人類に救ひをもたらすであらうと言つた。更にまた見る影もなく破壞されたポーランドは、トヴィヤンスキイやミツケーウィチの口を以て、苦惱にあへぎながら正義を渴望して止まないポーランドの農民を新しいキリストと揚言した。最後にドストエーフスキイはプーシキンに關するその有名な講演に於て、或るスラヴ主義者に贊同しながら、而かも遙かに大なる完全さを以てロシヤ國民を選ばれた民族だと宣揚した。つまりドストエーフスキイによれば、ロシヤ國民はその呪ひの中から、その苦惱の中から、その鐵鎖の中から、かの小市民化した西歐が曾て見なかつたところの必要な最高の精神的資質を引出すことが出來るのである。

果して然らば、ドストエーフスキイの此の豫言に對して、今日の懷疑主義の如きは消滅すべきものである。事實上ロシヤは全世界のプロレタリヤ、即ち西歐及び東方殖民地の奴隷達の指導者たる任務を遂行した。勿論この事業は未だ始つたばかりであるが、然し始つたには違ひない。勿論この仕事は恐ろしい値を以て、即ち苦しみと惱みとを以て買はれたものである。然しドストエーフスキイは世界に奉仕するロシヤの使命が罪と流血なしに、飢餓と苦痛なしに實現され得ると假定したであらうか。否、否、薔薇のやうな美しい革命は、ドストエーフスキイにとつて勝ち誇る心の發作と希望とに對する嘲弄としか思はれなかつたであらう。彼にとつてロシヤの未來は、その中に苦痛も勝利も入つてゐるところの偉業に就いての考へと一緒に編み込まれてゐた。

若しドストエーフスキイが今日復活したら、彼は勿論我々が行つた偉業の必然性を我々に感得させるために、また我々が自分の双肩に荷つてゐる十字架の神聖さを我々に感じさせるために、充分正しい、充分輝かしい色彩を見出したであらう。そればかりでなく、彼は我々を敎へて、この偉業の中に歡樂を見出さしめ、この苦惱そのものゝ中に悅樂を見出さしめ、そして同時に恐怖

と歡喜とに滿ちた眼を以てどよめく革命の流れを凝視せしめたであらう。

死んだブロークはドストエーフスキイの精神を以て我々に先行すべく、ドストエーフスキイの豫言的門弟たるに恥ぢなかつた。彼は次のやうに言つてゐる「……の流れはお前の希望、お前の幻想を破壞する。また革命は多くの苦痛と汚泥とをもたらす。けれども注意して聞けよ。……は何を語つてゐるか。その轟音は常に偉大なるものゝことを叫んでゐる。」

ロシヤは今苦難多き、然し光榮ある道を前進してゐる。その背後には彼女をこの道に祝福しつつ、彼女の偉大なる豫言者達の姿が立つてゐる。そして彼等の中に於て最も魅力ある最も美しい姿は恐らくフョードル・ドストエーフスキイであらう。

ドストエーフスキイ評價の再檢討

ヴェ・ペレヴェルゼフ

一

藝術作品の評價に於いて、三つの契機が本質的意義を持つてゐるやうに思はれる。第一は、作品の內面的眞實と誠實とである。第二は、內容の獨創性と清新味と、それから從來知られなかつた新しい生活環境の再現とである。第三は、描寫された生活環境の大きさと價値とである。眞實と誠實――これは凡ての藝術の必要缺くべからざる要件である。藝術家は自ら、自分の作中人物の實在を信じてゐなければならぬ。彼等を自分の目の前に生きてゐるものとして見なければならぬ。そして生きてゐる者に對する如く、彼等に同情し、彼等と共に喜び、共に悲しまなければならぬ。でなければ、藝術家は我々をしてその作中人物の現實的存在の可能を信ぜしむることは出來ないであらう。そして彼の作品は、作爲された虛僞のものとして、我々の心の內に何らの反響

をも見出さないであらう。眞實と誠實とのない所には、藝術作品はない。藝術もない。たゞ藝術の假面を被つた贋物があるだけである。苦惱と悲痛なしに、また喜びと幸福なしに生れた作品は、矢張り眞の藝術とは言はれない。それは恰も兒童が人形に於けるが如く、それらの作品は時として兒童を樂しませるが、然し直ぐに飽かれてごみ溜に棄てられて仕舞ふ。藝術作品は、それが生きて居る間は人の心を動かすものであり、決して何らの結果なしに消滅するものではない。

ドストエーフスキイは偉大なる藝術家であること、彼の作品が現に生きて居り又今後永く生きるであらうと云ふこと、それらの作品が人の心を強く興奮させる魅力を持つてゐること、この魅力は今後永い間なくならないであらうと云ふこと——これらの點に就ては今更語る必要はないと思ふ。ドストエーフスキイは、その作中人物を決して僞造しなかつた。彼は作中人物を生きてゐるものとして見た。また彼自身それらの作中人物の內に生き、彼等の現實性を確信してゐた。彼の作中人物は人形でなく、玩具でもなく、それ自らが實生活であるから、創作の瞬間は彼に取つて同情と憎惡との最高緊張の瞬間である。「もし私に幸福な時があつたとすれば、それは、喜ばしい希望と幻想と仕事に對する熱烈なる愛との最中(まなか)に、私が自分の空想と共に生活し、自分が創造した人々と、恰も實際に現存してゐる肉親のものとのやうに生活した時の、あの長い長い夜である。私は、それらの人々を愛し、彼等と共に喜び、また悲しんだ。時には自分の不器用なヒーローの身の上を心からなる涙で泣いたことさへもあつた。」つまり斯うした眞實さと心を貫くやうな同感とによつて、凡ての眞實なる藝術作品は「嫋拗なる魔術師のやうに心を興奮させ、また心を苦しめる」のである。卽ちドストエーフスキイは、その創作に於いて極めて眞實である爲めに、また彼の作品の一言一句には生きた熱烈な僞らざる感情が浮動してゐるが故に、彼は我々の心を同感的に反響せしめるのである。ドストエーフスキイの作に見るところの藝術味と心を動かし苦しめる魅力とは、恐らく彼の敵ですら否定しないであらう。ドストエーフスキイの作品の偉大なる藝術的價値は旣に一般的に承認されてゐる。併し此の價値は、眞實と誠實とで購はれたものである。何故なら眞實な深い感情だけがそれに相當する反響を呼び起すことが出來るからである。

ドストエーフスキイの作品に對して、その內容の獨創性と淸新味とを認めることも矢張り一般的になつてゐる。ドストエーフスキイは、いまだ嘗てロシヤ文學になかつたところの人物性格を創造した。彼以前には殆んど何ぴとによつても語られなかつたところの精神生活を、我々の前に展開した。これが又、彼の作品に新しい價値を附與するものである。何故なら藝術作品は、その內容が獨創的であればあるだけ益々價値を加へるからである。もし同感と眞實との力が同等であ

り、藝術的表現の力と心を動かす力とが同等である場合には、新しい世界と新しい生活環境を我々の感情の對象としてゐる作品の方がヨリ高い。

二

ドストエーフスキイの作品を以上示した二つの原理、即ち眞實と獨創との觀點から評價しながら、我々はまだそれらの作品の價値に就て本質的には何も云つてゐない。この二つの原理から彼の作品を觀察しながら、我々はまだその價値がどうであるかを問ふてゐない。たゞその作品が概して何らかの價値を持つてゐるかどうかと云ふ問ひに對して、答へただけに過ぎない。眞實と獨創とは偉大なる藝術作品の必要缺くべからざる特質である。たゞ此の特質に於いてのみ、それらの作品は我々の注意と永い生命とを要求するだけの權利を持つてゐる。もしドストエーフスキイの作品が眞實と獨創とに於いて秀れてゐなかつたら、それは藝術作品とは謂はれないであらう、また我々の注意にも値しなかつたであらう。我々は今日それを讀んだり判斷することもなかつたであらう。斯樣にドストエーフスキイの藝術の眞實性と獨創性とを肯定しながら、我々は當然一般に承認されてゐる說を玆に表明しておく。それは、彼の作品が偉大なる藝術的價値を持つてゐると云ふこと、それらの作品はロシヤ文學への偉大なる貢獻であること、最後にそれらの作品が我々に取つて極めて偉大なる價値を持つてゐると云ふことである。だがそれは一體どんな價値であらう？　批評の領域に於けるこの最も重要なる問題に答へん爲めには、ドストエーフスキイの作品を更に第三の價値標準から觀察しなければならぬ。即ち彼の藝術に表現された生活環境の大きさと意義との觀點から見なければならぬ。ドストエーフスキイの作品に取り扱はれてゐる生活環境は、どんな廣さを持つてゐるか？　彼の作品には積極的の現象が描かれてゐるか、それとも消極的の現象が描かれてゐるか？　それらの作品は我々の內に如何なる思想感情を喚起してゐるか？　また如何なる實際的結果に導いてゐるか？　これらの問題に答へることによつて、我々は初めてドストエーフスキイの藝術作品が我々の爲めに如何なる意義と價値とを有し、もしくは有することが出來るかを明かにするのである。然しこれらの問題が提出されると共に、批評家の間には評價の上の一致が全く無くなるのである。

或る批評家に取つては、彼の作品は狹い特殊な生活環境を把握したものと思はれてゐる。またこれらの批評家に取つては、彼の作中人物も精神的に病的な人々であり、特殊な不具の人々であり、一種の「怪物または奇人」である。勿論これらの奇人を研究することは興味がある。が、この研究は何らの眞面目な意義も持ち得ない。また何らの廣い緊要なる全人類的問題をも解決しな

い。のみならず何らの思想的緊張をも、また人生への實際的關心をも要求しない。これらの人物にかまつてゐるのは專門的な精神病理學者の仕事である。ドストエーフスキイの藝術の評價に於いて斯うした態度を取つてゐるのは、ミハイロフスキイである。が、他の批評家に取つてはドストエーフスキイの作品は、豫言的、救世的な意義を持つてゐる。この種の批評家によれば、ドストエーフスキイの作中人物は特殊な人々であるかも知れないが、併し彼等は人類の前衞であり、人生に新しい道を開拓するところの人々である。また新人の先驅者たちでもある。これらの人物には未來の生活の曙光が燃えてゐる。我々は今でも、ドストエーフスキイの作品に於いて、我々に啓示されてゐる生活の全意義を把握することが出來ないと。批評文學に於けるこの見解の最も良き代表者は、メレシュコーフスキイである。が、ドストエーフスキイの評價に於いて今一つ注意に値する傾向がある。その代表的批評家は、ベリンスキイとドブロリューボフとである。この見解はドストエーフスキイの作品に描かれてゐる生活を特殊なものとは思はない。また彼の作中人物に於いても廣い社會層の代表者たちを見てゐる。そして彼の作品が廣汎な社會現象を解剖して我々の前に偉大なる社會的問題を提供し、我々からその問題の思想上および實踐上の解決を要求してゐると云ふ點に、特に重きを置いてゐる。ドストエーフスキイの評價に於ける凡ゆる異論は、これを以上三つの見解に總括することが出來ると思ふ。

三

本來、評價の正確さは、分析の正確さによつて著しく制約されるものである。然るにドストエーフスキイを批評する大多數の人々には、分析の方面が全く缺けてゐる。第一、ミハイロフスキイの評論もこの缺點のために過まつてゐる。然しミハイロフスキイは最初から斯る分析を望まず、ドストエーフスキイの藝術の或る方面には共鳴さへしてゐる。此點に於いては彼に過失はないだらう。何故なら作者はその仕事を或る任意の範圍內に當然制限してゐるからである。然るにミハイロフスキイはドストエーフスキイの藝術の或る特質を認めつゝ、その評價を彼の凡ての藝術に推し擴げてゐる。それ故に、內容から言へば、分析の部分が評價の部分よりも著しくなつてゐる。これは、たとへ特に大きな過失でないにしても、矢張り過失には違ひない。いづれにしてもこの過失はまだ評價に禍ひするまでには至らなかつた。ミハイロフスキイは謂はゞ飛びながら彼の目に映じた或る特質を基礎として、全創作の精神を敏感に洞察し、それを正しく評價する事が出來たからである。斯う云ふことは屢々あることで、我々はドブロリューボフに於いてもその好適例を見るのである。勿論分析的部分の內に、斯うした敏感のほか、本質的の誤謬が這ひ込んだ場合には別

問題である。さう云ふ場合には批評家は殆んど確實に評價を誤ると云つてよい。ところがミハイロフスキイにはさう云ふ場合が事實あつたのである。第一、彼がドストエーフスキイの藝術的活動を二つの時期に分けたと云ふことからして誤つてゐる。卽ち彼は第一期に於いては、主として犧牲者の羊がドストエーフスキイの興味を惹き、第二期に於いては、加害者の狼が彼の興味を惹いたかの如く見てゐる。これは勿論全く不當である。第一、羊も狼も、ドストエーフスキイの藝術的活動を一貫してゐる二重人格ほどには彼の興味を惹かなかつた。次にミハイロフスキイは、第二期に於いて、羊がドストエーフスキイに取つて第二義的のものに引き下つたかの如く見てゐるのは誤りである。最も多く完成された羊、たとへばソーニャ・マルメラードワ、ムイシュキン、マカール・イワーノヴィチ・ドルゴルーキイ、ゾシマ長老、アリョーシャなどはドストエーフスキイによつてその創作生活の最後の時期に創造されたと云ふことを認めないのは大きな不注意でなければならぬ。ミハイロフスキイがドストエーフスキイの作中人物の心理を殆んど理解し得なかつたことに就いては、その評論『慘忍なる天才』の內に散在する幾多の個別的批評が證明してゐる。たとへば彼は、ドブロリューボフが『二重人格』の主人公ゴリャードキンとオピスキンとを一列にならべたと言ふことを詰つてゐる。つまりミハイロフスキイは、この二人の主人公を區別して、ゴリャドキンは羊であり、オピスキンは狼であると見てゐるのであるが、これがまだ誤つてゐる。何故ならオピスキンもゴリャドキンも二人ながら二重人格（分身）だからである。それ故にミハイロフスキイは『二重人格』に於ける「第二のゴリャドキン」の意義も解し得なかつたのである。彼は、ドストエーフスキイが單にそのヒーローを苦しめ、同時に讀者をも「過度の悲痛」によつて苦しめようとしたものだと考へて、これを「天才の慘忍性」だと說明してゐる。だが、もし彼が、ゴリャドキンが羊でなく、二重人格（分身）であると云ふことが分つたなら、彼は「第二のゴリャドキン」の內面的必然性をも解したであらう。さうしたらゴリャドキンに對するドストエーフスキイの態度を理解する上に於いても過たなかつたであらう。作者がオピスキンに對して嘲弄の態度を取つてゐることは別にミハイロフスキイを驚かしてゐないが、作者がたとへ悲痛の情をもつてゞはあるが、ゴリャドキンを露はに諷刺してゐることがミハイロフスキイを憤激させてゐる、つまり、惱み拔いた憐むべき人間を何の爲めに作者は嘲笑してゐるのかと云ふ點に就いて、ミハイロフスキイは不審を抱き、またもこれを「天才の慘忍性」だと說明してゐる。けれどもドストエーフスキイは、この惱み拔いた羊の心には狼の性が巢喰つてゐると云ふことを、餘りにもよく知つてゐた。ところがミハイロフスキイは、ドストエーフスキイの作中人物に於ける心理の二重性格を全く理

解しなかつた。またこの二重性の根底には、名譽の爲めの雪辱戰が横つてゐると云ふことも理解し得なかつた。それ故に彼は、ドストエーフスキイの作中人物が陷つてゐる苦悶に於いて「原因も目的」も知らないのである。それらの作中人物は、單に「純藝術の苦悶の祭司」としか彼には思はれなかつた。斯樣にして、ミハイロフスキイの評論の諸處に散在してゐる分析的批評の中から、彼がドストエーフスキイの藝術の特質を誤つて理解してゐたと云ふことが分るのである。それ故にオピスキンとドストエーフスキイとの類似に就いて彼の評論の、根本的な、そして實質に於いて正當な思想は、その價値の大部分を失つてゐる。と云ふのは、オピスキンは依然として不可解なものとして殘り、從つてまたオピスキンとの比較もドストエーフスキイの天才の本質を確實に理解させる上に助けとならなかつたからである。もしミハイロフスキイにしてオピスキンは分身（二重人格）であると云ふことが分つたら、自分の評論に『殘忍なる天才』と云ふ標題をつけなかつたであらう。

四

ドストエーフスキイの作品の解剖に於ける斯うした大きな缺陷は、ミハイロフスキイをして作品の意義を評價する上に於いても誤らしめたのである。ミハイロフスキイはオピスキンや、地下室の男や、その他の人物の慘酷さに於いてその原因も意義も認めず、また慘酷と自己暴虐との深い內面的關係をも理解せずに、ドストエーフスキイの作中人物の殘忍なる戰ひを「スペインの鬪牛」か何かのやうに見たのである。彼は斯る人物の現實性を否定はしなかつたが、それが「怪物であり奇人である」と云ふこと、そしてドストエーフスキイはその先天的な「天才の慘忍性」によつて此の種の人物を好んで探し求めたと云ふことを信じてゐた。彼の考へによれば、ドストエーフスキイは何らの眞面目な目的も求めず、單に「無用な慘酷さと無意義な藝術の筋肉遊戲」とに沒頭したに過ぎない。讀者はドストエーフスキイの作品に於いて、獨特の殘忍な、然し非常に緊張した藝術的歡樂のほか何ものも見出さない。そこには何らの教訓も何らの思想や行動の動機もない。かかる藝術家は困厄時代には至寶である。彼等は生きた仕事のない時には「神經の無意義な戰慄」のうちに歡樂を求め探してゐる。「つまり退屈まぎれの手細工」である。ドストエーフスキイによつて描かれた生活は、一般の興味を持つべく餘りに特殊であり、餘りに病理學的であり、餘りに無意味である。斯かる生活に關心を持つのは、書物を手にしてゐる精神病醫だけである。ミハイロフスキイは『祖國雜纂』の編輯局に送つた『局外者の手紙』の中で書いてゐる。「ドストエーフスキイの作風は、全く特殊なもので、個人的に彼にのみ屬するものである。彼が人間精神の深奥

に就いてどんなに說明しようとも、この癲癇病者は幸ひ今のところ殊殊な病理學的存在である。」

勿論ドストエーフスキイが、その作中人物の心理を、全人類に取つての典型的心理にまで持ち上げたのは、甚だ不當であつた。だが、ミハイロフスキイも極めて不當である。第一、ドストエーフスキイの總てのヒーローが癲癇病者または狂人だと云ふ譯ではない。次に、或る普通の、廣く普及されてゐる心理狀態が、極度の發達または最も劇しい表現にまで達したに過ぎない病氣もある。然し其の際さう云ふ病氣は、啻に特殊の興味を持つばかりでなく、一般的意義を受けるのである。それらの病氣には一般的な現象が浮彫のやうに鮮かに表はれてゐる。從つて、それらの病氣は此の一般的現象の典型的な代表となつて居り、この現象の性質と意義とを研究する爲めに最も有利である。ドストエーフスキイの作中人物は、つまりさうした病氣に惱んでゐるのである。これらの人物に於いては、一定の精神的傾向が病的な異常なる發達に達してゐる。從つて最も輝かしい深い表現を見せてゐる。彼等は假令病的な人々であつても、彼等の病氣は特殊でもなく、偶然でもなく、廣く擴つてゐる現象であり、本當の社會的病氣であり、また本當の社會的不幸である。この社會的病氣は、ドストエーフスキイの作中人物に於いてその頂點に達した。勿論ゴリャードキンや、ラスコーリニコフやイワン・カラマーゾフのやうな人物はさう度々出逢はないが、マカール・イワーノヴィチ・デヴーシュキンのやうな人物は、一歩ごとに出逢ふ人々である。だがゴリャードキンとデーヴシュキンとの相違は、前者に於いては名譽癖が後者に於けるよりも尖鋭的な形態を取つてゐるだけに過ぎない。それからルーチカ、オルロフ、ペトロフのやうな人物に至つては、ザラに見受ける人々である。そしてワルコーフスキイやヴェルフォヴェンスキイの如き「怪物」が前者と異つてゐるのは、單に病的タイプが後者に於いては頂點に達してゐると云ふだけに過ぎない。ムイシュキンは唯一の現象であるが、シュムコフやマルメラードフのやうな人物に至つては最早一個の社會層である。斯樣にして、ドストエーフスキイの作品に展開されてゐる生活は、それがミハイロフスキイに考へられたよりも遙かに普遍的なものである。これは啻に空間的の意味に於てばかりでなく、時間的關係に於てもさうである。幾多の歷史的事實は、さまざまな時代に於てドストエーフスキイの作品に描かれてゐるやうな精神的機能を持つた人々の可成り廣い集團が現れたことを證明してゐる。これらの事實は勿論ミハイロフスキイその人の注意を惹いた。彼はその社會評論的論文に於いてこれらの事實に就いて語り、その爲めに『獻身者と苦行者』と題する專門的な可成り大きな論文を書いたことさへある。その中で彼はこの問題に關する事實を集めて、これに自己の說明を與へたのである。そればかりでなく、ミハイロフスキイは自らドス

トエーフスキイの作品に於いて、自分の論文に述べたところと同じやうな精神の息吹きを感じた。彼は同じく献身者と苦行者のことを取扱つた『佛教に就て』と云ふ論文の中に書いてゐる。「我々が知つてゐる限りの總ての小説家のうちで、ドストエーフスキイは我々に興味ある現象に最も接近して居り、また最も深くこの現象に徹底することが出來た。」

五

藝術家としてのドストエーフスキイの注意を惹いた現象は、概して社會評論家としてのミハイロフスキイの興味をも強く惹いた。彼はその評論に於いて侮辱された名譽のために惱んでゐる人人の爲めに多くのページを割いて居り、また此のタイプの人々を意味する爲めの術語も多分彼によつて創造されたものである。それ故に彼がドストエーフスキイの藝術の特質を理解しなかつたといふことは、なほ一層不思議なやうに思はれる。この事は一部分ドストエーフスキイの社會評論家的活動によつて説明される。即ち彼が「人間精神の深み」をどん底まで汲み盡したと考へてゐる自己の藝術に對する個人的主觀的態度によつて説明される。斯る評價が人類に對する誹謗として、ミハイロフスキイを憤激させたと云ふことはよく分る。この憤激は更に、ドストエーフスキイが自分の作品に與へた誤れる評價を熱心に繰返したことによつて一層强められた。この憤激はミハイロフスキイがドストエーフスキイの作品を正しく評價し、またその實際の意義を理解することの障碍となつた。彼はドストエーフスキイの藝術に於いて、主觀的要素の蔭に最も重要な客觀的要素の潜んでゐるのを認めなかつた。彼はドストエーフスキイの誤まれる自己評價を訂正する代りに、またその作品の偉大なる眞意義を示す代りに、それらの作品を殆んど無價値なものと表明した。斯樣にしてミハイロフスキイは、誤まれる評價の代りに眞の評價を與へないで、別な誤謬を加へたに過ぎない。

それは兎も角ミハイロフスキイは、ドストエーフスキイが非常な力で描いてゐる生活環境の意義に對する評價に於いても、甚しく誤つた。彼は事實上大きな社會的變態と結合してゐる普遍的な現象を、特殊な偶然的な現象だと思つた。實際、問題が大きな社會的病氣に觸れてゐるところに於て、ミハイロフスキイは單に精神的現象のみを見てゐる。ドストエーフスキイの作中人物は、彼の頭腦に於いてたゞ精神病醫と精神病療養所に就ての觀念のみを喚び起してゐる。藝術家ドストエーフスキイは粗雜なる社會的機構の車輪の間に押し潰されて跛者(ちんば)になつた不具(かたは)な人々の廣い層を描いてゐる。つまり、發狂と犯罪との境界に立つてゐる人々の層である。この層の人々のために、彼等を産み出した社會は、原始的な慘酷さを以つて鐵格子のついた專門的腦病院や癲狂院や牢

獄やを作つてゐる。そして批評家ミハイロフスキイは「其處に彼等の道がある」と叫んでゐる。が決してさうでない。そこには道はない。ドストエーフスキイの作品によつて提出された問題は、また彼の口によつて實生活が語つてゐるところの問題は、そんなに單純なものではない。社會は既に夙うから此の問題に對して牢獄と癲狂院とを以つて答へてゐるが、然しこの解答が失敗であり野蠻であり無意義でさへあると云ふことも、極めて夙うから明白である。牢獄と精神病療養所の數は益々增加しつゝあるが、罪人と精神病者との數は少しも減じない。牢獄と精神病療養所とは社會の不幸を減少せしめずに、人生の不幸は愈々增長しつゝある。これらの不幸を絕滅するために設立された施設は、單にその不幸の增長を示すだけの役割りを勤めてゐるに過ぎない。だから問題は明らかに牢獄や療養所に存するのではない。勿論、罪人と狂人とは變態に違ひない。が、彼等を產み出した社會は果して常態と謂はれようか？　變態者に對して鐵格子の家を建造しつゝある社會、その鐵格子の家の爲めに變態者の製造を年々擴大しつゝある社會が現存してゐると云ふことは、不合理ではないか？　ドストエーフスキイは『死の家の記錄』の終りに書いてゐる。『この壁の中で幾何の青春が空しく亡びたことだらう？　こゝで幾何の偉大なる天才が空しく滅びたことだらう？　これらの人々は非凡な民衆であつたと云はずにはゐられない。それは、ひよつとしたら我が全國民の、うちで最も天分の豐かな、最も强い人々であつたかも知れない。ところが是等の力强い天才は空しく亡びたのだ……。だが一體これは誰の罪だ？　誰の罪だ？」これはドストエーフスキイの全藝術を一貫する疑問である。ゴリャドキンも亡びた。シュムコフも亡びた。ソーニャ、ラスコリニコフ、ムイシュキン、キリーロフ、イワン・カラマーゾフ、みな破滅した。その他マカール・デーヴシュキンを始め、破滅に近い者は幾何あるか知れない。これは一體誰の罪だ？　ドストエーフスキイが、假令自分で提出した問題を正しく解決することが出來なかつたにしても、ミハイロフスキイの仕事は、此の問題に正しき解答を與へ、誰の罪であるかを說明し、現存社會關係の不合理とその內面的腐敗とを示すことであつた。そして、牢獄と癲狂院とを建造しつゝある社會に向つて、「醫者よ、自らを癒せ！」と呼ばはることであつた。また彼の任務は、社會が健康を汲み取り、新しい生活に更生することの出來るやうな力を示すことであつた。つまり今後ラスコリニコフやキリーロフやカラマーゾフやまた彼等の小さな兄弟たちのやうな人々の「若さと偉大なる力」とが亡びないやうな生活を示すことであつた。もしミハイロフスキイがドストエーフスキイの作品を眞に理解したであらうならば、それらの作品の意義に就いて、またそれらの作品に描かれてゐる生きた現象の意義に就いて、自分の慘酷な、特に愚かしい評價

を敢てしなかつたであらう。そして彼は、ドストエーフスキイの藝術が大なる社會的意義を持つてゐること、その作品が社會經濟的および法律的關係の再檢討に就て、また古めかしい道德的規範の再吟味についての問題を提出してゐることを見たであらう。同時に彼はドストエーフスキイの作品が「無用な苦悶または無意義な藝術の筋肉遊戯」でないことを悟つたであらう。

六

「眞のドストエーフスキイ、つまり我々が知つてゐるやうな、神または惡魔の如き深さの大膽な體驗者は、『罪と罰』から始まつてゐる。それ以前に彼が書いた一切の作品、たとへば『貧しき人人』、『虐げられし人々』などは全く別な作家の手に成つたかのやうに思はれる。假令(たとへ)これらの作品が無くなつたとしても、藝術家として、特に思想家としてのドストエーフスキイの相貌は、何ら增減するところがないであらう。むしろ却つて、偶然的な傍系的な附加物から淨められたであらう。」

こゝに引用した斷片はメレシュコーフスキイの手に成つたものである。斯樣に彼はドストエーフスキイの文學的活動を本質的に異つた二つの時期に分割しつゝ、ミハイロフスキイの過誤を繰返してゐる。そればかりでなく、彼はドストエーフスキイの藝術に於ける間隙または飛躍をミハイロフスキイよりも遙かに鮮かに肯定したことによつて、その過誤をもつと深い本質的なものにしてゐる。ミハイロフスキイは、ドストエーフスキイが創作の重心を羊から狼に移したことだけを云つてゐるが、メレシュコーフスキイは『罪と罰』以前に書かれた凡ての作品を「傍系的、偶然的なもの」と表明し、眞のドストエーフスキイは此の小說すなはち『罪と罰』から始まつてゐると云つてゐる。メレシュコーフスキイの此の命題を、私は彼の研究の基本的誤謬と認める。この誤謬が彼をしてドストエーフスキイの作中人物の心理を片面的に理解せしめ、結局彼の作品に對して全く誤れる評價をなさしめたのである。こゝではメレシュコーフスキイの命題が誤つてゐることを證明する必要はない。それは既に以上に述べた解剖によつて證明されてゐるからである。私はただ、此の誤謬がメレシュコーフスキイの評論の上に如何に反映したかを示すだけに留める。

メレシュコーフスキイはドストエーフスキイの作品の優れた一半を放棄しつゝ、ドストエーフスキイの作中人物の凡ての悲劇を宗教的探求の悲劇に容易(たや)すく一括して仕舞つた。メレシュコーフスキイの考へによれば、これらのヒーローは歷史的基督教が宣言してゐる自己犧牲、自己否定の宗教に滿足することが出來ない。彼等の心には個人的生活の渴望と自己肯定の渴望とが燃えてゐる。この渴望の名に於いて彼等は、神人の觀念に自分たちの人神の觀念を對立しつゝ、歷史的基督教に

對して武裝してゐるのである。然し其處でも彼等は滿足を見出さない。と云ふのは此の觀念は既に疾うに異教時代の人類によつて體驗されたものだからである。で、彼等は自己否定と自己肯定とを一つに結合するところの宗教、つまり一つが他のものゝ爲めに滅ぼされないところの宗教が必要であると感じてゐる。然し自己否定と自己肯定とを結合するところの統一的宗教を彼等は見出し得ない。自己否定と彼等の精神的分裂は其處から來るのであるが、この分裂は結局宗教的不滿に歸着するのである。メレシュコーフスキイの考へによれば、彼等が體驗してゐる精神的悲劇は現代の全人類の悲劇である。たゞ彼等はその悲劇を大衆よりも深刻に體驗して居り、自己否定の極端から自己肯定の極端へと勇敢に突進しつゝ、大衆よりも惱ましく緊張してその解決を求めてゐるのである。彼等は屢々仆れ、屢々胸を碎いてゐるが、その代り彼等は新しい宗教意識に接近してゐる。彼等の勇敢と大膽さとは、新しい宗教的天啓への道であり、そして此の天啓のうちには彼等自身の救ひと我々全人類の救ひとが含まれてゐる。この觀點からドストエーフスキイの作品が如何に大きな意義を持つてゐるかは全く明瞭である。彼の作品に於いては自己肯定と自己否定との矛盾が、今日まで滿足な解決を得なかつた實在の根本的矛盾が、どん底まで汲み盡されてゐる。それらの作品には人類の最も眞劍な新しい問題、卽ち上述の矛盾を解決して一つのものに結合するところの宗教を見出すべき問題が特に鋭く提供されてゐる。そして最後に、それらの作品に於いては此の宗教に到達する道程が最も近く感じられる。ドストエーフスキイの作中人物は、この世界の「物理的變化」の必要、基督の「再臨」の必要を漠然と感じてゐる。メレシュコーフスキイは云ふ、彼等は誤つてゐない。世界の終りは近づいてゐる。基督再臨の時期は近づいてゐる。ドストエーフスキイの作中人物は、この未來の春を告ぐる最初の燕である。彼等は實際に病的であり又恐ろしく惱んでゐる。が然しそれは頽廢と死の苦痛ではなく、產みの苦しみであり、陣痛である。彼等の內には新しい宗教的意識が受胎し、それが苦痛と共に世の中に生れつゝある。その誕生の瞬間は彼等の最高幸福の瞬間であり、一般的幸福の瞬間であらう。もしミハイロフスキイに於いて、ドストエーフスキイの作品が精精病療養所の思想を產み出したとすれば、メレシュコーフスキイに於ては基督の再臨に於ける世界の奇蹟的更新の觀念を喚び起してゐる。もし前者がドストエーフスキイの作中人物の救ひを精神病醫に於いて見て居るとすれば、後者は彼等の救ひを奇蹟に於いて見てゐる。前者はドストエーフスキイの作品に於いて、狹い精神病理學的意義を見てゐるが、後者は世界的・神祕的・豫言的意義を見てゐる。何故なら再臨の奇蹟は全世界に關して居り、全く新しい生活の要件として死者の復活と來世の生活とをもたらすからである。

七

メレシュコーフスキイは、『貧しき人々』から『カラマーゾフ兄弟』に至るまでのドストエーフスキイの全作品の間に深い內面的關係を認めずに、彼の作中人物の精神的分裂の現實的な原因の理解に對する道を自ら斷つて仕舞つた。彼は形而上學的泡沫の蔭に陰欝に浮動してゐる貧苦と現實的屈辱との波を認めない。彼の形而上學的泡沫は、この波の表面に起つてゐることを知らない。ドストエーフスキイの作中人物の宗教的意識の二重性は、その本性の分裂の一つの現れであつて、彼等の全存在ではない。宗教的分裂は彼等に於ける根本的なものでなく、第二義的・副次的なものである。ドストエーフスキイは宗教的意識にまで成長しない二重人格ばかりでなく、凡そ如何なる意識にまでも成長しなかつた二重人格の陳列館を與へてゐる。たとへばデーヴシュキン、ゴリャドキン、オピスキンなどがそれである。彼は宗教的分裂を知らない多くの二重人格を我々に示してゐる。同時に宗教的分裂にのみ惱んでゐる二重人格なるものは全く考へられない。宗教的二重性は、必ず社會的境遇の二重性や、心理の無意識的傾向の二重性や、意識と意志との二重性や、一口で云へば個性の分裂の凡ゆる形態と結びついてゐる。そしてそれらの二重性は、宗教意識の分裂以前に存在してゐたもので、後者の爲めの基礎となつてゐる。凡てこれらのことがメレシュコーフスキイの注意から逸れて仕舞つて、彼は全然ドストエーフスキイの作中人物の宗教的混亂の靜觀へ去つて仕舞つた。そして彼は、これらの作中人物が高尙なる宗教的要求や普遍的世界觀の要求を滿足させることに於いて二重人格となつてゐるばかりでなく、更に人間の根本的要求を滿足させることに於ても、やはり彼等は二重人格であると云ふことを認めなかつた。メレシュコーフスキに取つては宗教的二重性が自己滿足的性質を受けて、自己原因、自己目的となつて仕舞つた。デルジャーヴィンの言葉を借りて云へば、「ひとりで滿足し、ひとりで光被してゐる」のである。斯樣にドストエーフスキイを理解する爲めには、彼の作品の一半を故意に放棄しなければならなかつた。でなければ、彼の全作品の間に深い論理的關係も認めず、またデーヴシュキンの性格とカラマーゾフの性格との內面的關係も認めずに、『罪と罰』以前に書かれたドストエーフスキイの凡ての作品を「偶然的な傍系的な」ものと見做さなければならなかつた。このことをメレシュコーフスキイが故意にしたか又は偶然にしたかと云ふことが重要な問題ではない。彼がこのことをしたと云ふこと、そしてそれが彼をドストエーフスキイの藝術に描かれてゐる生活的な現象の意義に對して全く誤れる評價に導いたと云ふことが、重要な問題である。

八

ドストエーフスキイの作品に展開されてゐる生活の中心が宗教問題だと云ふ事が、第一嘘である。彼の作中人物は、たゞに宗教意識に於いて分裂してゐるばかりでなく、社會問題に對しても道德問題に對しても分裂して居り、社會に就て個性に就て考へる時でも依然として二重人格である。彼等はたゞに思想上の二重人格たるばかりでなく、その感情に於いても亦その本能的衝動に於いても同じく二重人格である。最後に、彼等は心理的に二重人格たるばかりでなく、社會に於いて物質的に二重の地位を占めながら肉體的にも二重人格である。そして是等の二重性は互ひに絶えず結合してゐる。それ故に社會的分裂を清算しない限り、宗教的分裂を清算する事は不可能である。また物質的に更生しない限り、即ち社會に於ける實際上の地位が變らない限り、精神的にも更生する事は出來ない。ドストエーフスキイの作中人物は、たゞに宗教的不確實さと矛盾とに惱んで居り、その社會的地位の不確實さと矛盾とにも惱んでゐる。彼等は宗教問題に於いて信仰を求めてゐるばかりでなく、社會に於いても彼等を滿足せしめ得る堅實な地位を求めてゐる。要するにドストエーフスキイの作品は、宗教的・靜觀的な問題を提出してゐるのみでなく、社會的・實踐的な問題をも提出してゐるのである。メレシュコーフスキイがやつてゐるやうに、第一の問題と第二の問題、形而上學的問題と現實的問題とを切り離す事は出來ない。それらの問題は、同時に解決されなければならぬ。でなければ、その一つたりとも解決されないであらう。

自己肯定と自己否定、利己主義と利他主義とが、矛盾の名辭でなくなるやうな、さう云ふ物質的事情に人間を置かない限り、個性と世界、「自我」と「非我」とが調和融合するやうな宗教意識を創ることは出來ない。新しい物質的要件なしに、また二重人格者の社會的地位を易えることなしには、彼等に取つて何らの新しい宗教意識も考へられない。彼等の個性が他の個性と連帶責任を持てるやうな社會的地位なしには、彼等に取つて自己肯定と自己否定とを統一した宗教意識は不可能である。

次に、ドストエーフスキイの作中人物の悲劇が一般人類的悲劇であるかの如く見、或ひはまた、それらの作中人物が全人類の渴望を醫すべき新しい宗教の發見に向つて進んでゐるかの如く見るのは、誤つてゐる。何故なら、宗教的分裂は單に一つの現れに過ぎず、又このイデオロギイ的分裂は物質的分裂なしには、或ひは社會的地位の二重性なしには在り得ないからである。然し私は斯う考へる、メレシュコーフスキイも他の何れの批評家も、社會に於ける二重性すなはち境遇の不安定は單に一定の社會集團の運命ばかりでなく、全人類の運命であると肯定する勇氣はないと。ところが、重苦しい二重的な社會的境遇から逃れ出ようと云ふ問題を持つてゐない者に取つては、

その後半の問題すなはち二重的な宗教的意識から解放されようと云ふ問題も存在しない。何故なら彼等には此の二重性そのものがないからである。かゝる人物の標本をもドストエーフスキイは、ヴォルコーフスキイまたはゾシマ長老の如き人物に於てなりと與へてゐる。同時に私は、その傾向に於いてこれらの人物と甚しく異つてはゐるが、同時に宗教的意識の二重性に惱まされてゐない人物も、存在すると云ふことを附け加へて置く。

最後に、ドストエーフスキイの作中人物に於いて、自己肯定と自己否定とを調和融合してゐる如き新しい宗教が受胎してゐると云ふ説も誤つてゐる。事實上、ドストエーフスキイの作中人物に取つては、調和した圓滿な發達の道は凡て切り離されてゐる。彼等は社會に於いて無力であるが如く、宗教的領域に於いてもやはり無力である。彼等の社會的地位の不確實さが少しも未來の確實さを表示せず、却つてどん底への墮落で脅してゐるやうに、そのやうに彼等の宗教的意識の二重性は決して統一への解決を約束してゐない。ドストエーフスキイの作品には、斯る解決への暗示さへもない。彼の作中人物は社會と一致しようともしなければ、また自己の「自我」を社會的「客我」と一致させることも出來ない。彼等には、たゞ二つの道が開かれてゐるだけである。一つは「客我」を「自我」の犧牲に供してゐるオルロフの道であり、今一つは自己の「自我」を「客我」の犧牲に供してゐるマルメラードフの道である。宗教の領域に於いても、彼等に取つてはキリーロフの個人主義か、ゾシマ長老の自己棄却のほかには解決の道はない。ドストエーフスキイの作中人物は、「自我」と「非我」、利己主義と利他主義との統一の宗教から益々遠退いて行くばかりで少しもそれに近づかない。彼等は產みの苦しみで惱んでゐるのでなく、火の苦しみで惱んでゐる。彼等は救ひと更新とをもたらすのでなく、彼等自身が救ひを必要としてゐる。その救ひはたゞ強い調和的な人々のみが與へることが出來る。

九

それ故に、ドストエーフスキイの作品に於いて新しい天啓を求めたり、彼の作中人物に於いて世界を更新する新宗教の豫言者を見ようとするのは誤つてゐる。彼等が歩んでゐる道は、世界と人間との關係に就ての問題の正しい解決に導かずに、拔け道のない迷路に導いてゐる。彼等は出口のないところに行き詰つてゐる。彼等が歩んでゐる道は、どんなに遠くまで進んで行つたところで、「自我」と「非我」との統一を決して彼等に啓示しないであらう。このことに就て、或ひはこのことに就てのみドストエーフスキイの作品は語つてゐる。イワン・カラマーゾフ、キリーロフ、ゾシマ長老、彼等は此の道の終點である。これらの終點は、卽ち精神病院であり、自殺であり、

修道院である。人類はドストエーフスキイの作中人物から燈明の油を借りることはないであらう。却つて人類は、それらの人物が迷はないやうに、薄暗い小路で亡びないやうに、彼等の不確かな慄える炎で明滅してゐる燈明に油を注いでやらなければならぬ。メレシュコーフスキイは云つた、「終點と終點とは接觸し、肯定と否定とは融合する、そして彼等の死は光明であらう。」「それほど憂鬱な、平凡な、非神秘的なものに見える光は、實際に於いては神秘に滿ちた喜ばしい前兆の光であり、最後の分裂と結合との光であり、天と地とを結ぶ稻妻の光であり、電氣の光である。」人類の健全な創造的部分に於いては終點は常に融合してゐた。彼等の思想に於いても行動に於いても、メレシュコーフスキイにそれほど神秘的に思はれた此の悅ばしい光が常に燃えてゐた。ドストエーフスキイの作中人物に於いては、終點は互ひに隔離し、光も消失し、たゞ細かい火花のみが暗闇の中にちらついてゐる。彼等は健全な人々に向つて、終點と終點とが結合しない時は何が生ずるかを示してゐる。けれども健全な人々は勿論彼等から悅ばしき光を借りるのでなく、引き裂かれた終點と終點とを結合する任務を自ら引き受けるであらう。

メレシュコーフスキイは、ドストエーフスキイの作品に語られてゐる分裂の深さとその悲劇的意義とを解することが出來なかつた。彼は單にこの分裂の形而上學的表面にのみ留意して、それが實際にあるよりも遙かに特殊なものにして仕舞つた。彼は問題を形而上學的方面にのみ制限して、分裂の多面的な悲劇をせまい無形の抽象的なものにして仕舞つた。彼は精神の高い現れに於ける悲劇の蔭に物質的悲劇を認めなかつた。現實的な病苦と血汐と涙とを持つた肉體の悲劇を認めなかつた。ドストエーフスキイの作中人物はメレシュコーフスキイから嘲笑や愚弄とも見らるべき態度を受けてゐると云ふことは、之によつて說明が出來る。メレシュコーフスキイは云つてゐる、「ラスコリニコフが爲したことは、自分の爲めに自分ひとりの爲めになしたのだ。だがもし彼が、神の爲めにも、と云ふことをそれに附け足すことが出來たら、彼は救はれたであらう」と。メレシュコーフスキイの考へによれば、ラスコリニコフの罪は彼が「神の爲めに」でなく、埒を踏み越えた點にある。またソーニャの罪は、他人の爲めでなく自分の爲めでなく、たゞ神の爲めにのみ踏み越えることを人間に許されてゐるところの自己犧牲の限界を、彼女が踏み越えた點にある。このやうに、殺人者に向つて、彼が自分の爲めでなく神の爲めに人殺しをしたら救はれただらうと云ひ、また淫賣婦に向つて、彼女が自分の爲めでなく神の爲めに淫賣したら救はれたであらうと云ふことは、それこそ殺人者や淫賣婦に對する嘲弄でなくて何であらう。「神の爲めに」と云ふ、この神聖な言葉は彼等を何から救つてゐるのか？　私は、ソーニャが魔窟に身を墜した最初の夜の

ことを次のやうに想像する。彼女は蒼白くなつて慄えながら、街道から默つて歸つて來た。そしてお金をテーブルの上に投り出して、古い羅紗織りの頭巾で頭を蔽ふたまゝ、穴だらけの長椅子に横になつた。そして聞えないぐらゐに泣き出した。彼女と並んで、メレシュコーフスキイは彼女に向つて、彼女が破滅したのは飢えた家族の爲め、自分の爲め、他人の爲めに淫賣したからであつて、もし彼女が神の爲めに淫賣したら救はれたであらうと說明してゐる。まさしくこの場面には、何だか顏を外らしめるやうな氣の毒なやうなものがある。

✝

メレシュコーフスキイは、ドストエーフスキイの作中人物によつて體驗された宗教的悲劇の本質がよく分つてゐた。彼等の宗教的思想が「自我」と「非我」、個性と世界との矛盾に惱んでゐることも分つてゐた。また彼等の宗教思想が人間を神と宣言したり、或ひは世界を神と宣言したり、或ひは抑へ難い我儘に又は絕對的忍從に突進したりしながら、この矛盾の解決に力なくもがいてゐることも分つてゐた。けれども彼はこの悲劇の他の方面に氣附かなかつた。彼はこの悲劇の抽象的・形而上學的な表現をのみ理解して、その物質的・實踐的表現を見損じたのである。彼は病苦の全體を捕捉せずに、たゞその症候の一つに對して大騷ぎをしてゐる。それ故に問題が一旦病苦との戰ひにまで達すると、全く無力なものとなつて仕舞ふのである。あらゆる症候のうちから彼はたゞ宗教的思想に於ける「自我」と「非我」、個性と世界の矛盾を見てゐるだけである。病氣恢復のためには、宗教的意識に於ける矛盾した名辭の和解が必要である。「自我」と「非我」とが調和した一つのものに融合することが必要である。然るにこの調和はどうして出來るであらうか？　また何に含まれてゐるのか？　そのことをメレシュコーフスキイは知らない。矛盾した名辭の調和は如何にして可能であるかと云ふ問ひに對して、彼にはたゞ一つ「奇蹟によつて」と云ふ答へがあるのみである。健全なる宗教意識は何に含まれるであらうかと云ふ問ひに對して、彼はたゞ「それは神秘だ」と答へた。換言すれば、彼は何も答へないと同樣である。彼は病氣が有利なる解決を見るであらうと確信してゐる。病氣自身がその醫治の力を自分のうちに持つてゐると信じてゐる。そして病氣は死に導くものでない、復活に導くものである、と彼は信じてゐる。だがもしこの確信が何に基いてゐるかを彼に問ふならば、彼はたゞ「私は信ずる」と答へる。もしメレシュコーフスキイにして矛盾の凡ゆる症候を研究したであらうならば、彼は自分の信仰が根據のないものであることを理解したであらう。またドストエーフスキイの作中人物の病氣をそのまゝ放任して置いたら、確實な破滅に導くと云ふことが分つたであらう。またその病氣が病人